
架空人生

神戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

架空人生

【Nコード】

N0640P

【作者名】

神戒

【あらすじ】

少女の死因は臓器損傷、それと大動脈を損傷したことによる大量出血だった。そして彼女の死を見取った少年はその時から、『杉林瑞希』になった。

それから数年が経過し、彼は少女を模して無事高校入学を成功するが――。

そんな彼を取り巻く、青春自叙コメディ。

話は本編と日常からなって、日常は殆どが一話完結の日常ものとしてかかせていただきます

本編は、ちよいシリアスで、ストーリーを進めていくような感じで書きますのでよろしくお願いします。

プロローグ——お別れ——

暑苦しい。呼吸の度にむせ返る、蒸す様な空気が身体の中に染みこんだ。

生暖かい液体が、甘酸っぱい匂いを鼻に翳^{かす}ませ気化していった。それは赤い、酷く紅い、血の色だった。日差しは強く、だがソレは既に西日に変わっている。故に、血が血たる色を俺に見せてはくれない。彼女の顔でさえ、オレンジ色に染まっているのだから。

俺の腕の中には華奢な女性が居た。片膝を立てる俺に背を預けるようにして、だが顔はしっかりとその儂げな表情を此方に見せて。

頑丈^{ナイス}が取り得だと自慢していた彼女の引き締まる腹部には、冷たい銀刃^{ナイス}が突き刺さっていた。気に入って帰宅しても中々脱ぎはしない制服は引き裂かれ、腹部が赤く染まって開かれていた。止まるはずも無く、血が流れ続け俺を浸す。短い呼吸が何度も何度も、死にたくない^{ナイス}と訴えるように繰り返されて、俺は思わず眼を細めた。

ごめん。

彼女の唇が、静かに動いた。声は出ず、空気が揺らぐほどの勢いすらもない。だが分かる。彼女は確かにそう言った。だから俺は、首を振る。お前が謝る必要は無い。悪くは無い。運が無いだけ。仕方が無かったただけなんだと、口では言い切れぬほどの意味を添えて伝わっているか居ないか分からなくとも、それを口にすることで、恐らく残り僅かであろう彼女の時間を使いたくは無かった。

胸の奥がずきりと、酷く痛んだ。彼女の重さが、徐々に、彼女を抱きしめる両腕に加重されていくのを感じて、握る腕に、肩に、思わず力が籠った。

アスファルトの道路に闇が落ち始める。が、間髪置かずに街灯が光を灯して道路を照らした。西の空は既に紫色に、紫から黒へと変

色し始めている。同時に、俺を、彼女を濡らす赤黒い血が、流れも、その熱も、弱々しくなっていくのを理解する。俺は、それを理解してしまった。

「ねえ、……お願い、あるの」

薄い唇が、流れる涎に濡れて照る。まだ生まれてから一度も接吻を経験していない純なそれは、最期の言葉を俺に紡いでいた。

「なんだ？ お前の願いならなんでも聞いてやる」

思わず口が矢継ぎ早に言葉を吐き出そうとする。俺は慌てて喉を閉じ、静かに、冷たく、重くなりつつある彼女を強く抱きしめて、言葉を待った。

頭の中の血管が膨張する。胃がキリリと悲鳴を上げた。閉じているのか、薄く開いているのかすら分からぬ眼を見つめて、俺は”いつもの”言葉を、彼女の耳元で囁いた。

「……頑張れ」

鼻に付く髪から、甘い香りが漂った。血に、汗に、泥に、悲しみに、痛みに、怒りに塗れていても失われないう、彼女の香りだった。彼女は俺の言葉を聴いて、薄く、頬を吊り上げた。俺の為に、痛みを我慢して、頑張ってくれた。いつでも、いつでも、誰も知らぬ所でさえも尽力骨折り努力して――。

胸いっぱい空気を感じ込んだ。制服を内側から盛り上げる大きな胸が軽く揺れて、鋭い痛みが走ったのか、表情が苦痛に染まる。俺はいつの間にか握っていた彼女の手を力を入れて、応援した。

そんな行動が――まるで俺が、彼女の死を受け入れようとしているようで、確定している事を認めているようで、酷く吐き気がした。

自分自身に腹立った。

傍に落ちている携帯電話が、視界の端で画面を明滅させる。ディスプレイの端で画面を明滅させる。恐らくキリの良い時刻になったと言う事だろうが――救急車を呼んだのは、その二分前の事だった。

時間はまだ二分しか経過していない。俺はその事実、否定了その現実を、受け入れざるを得ないように、感じた。半ば自然に。殆ど、強制的に。

焦りが全身を震わせた。息をするのが苦しくなる。心臓が痛い。指先が柔い肉に食い込んでいることに、彼女が悲しげに「痛いよ」と伝えるまで気付かぬくらい、俺はどうかしていた。

「わ、悪い」

「ううん」彼女は小さく首を振った。続いて、でも、と先の台詞の後を次いだ。

「わ、たし……ね？ 私……」

垂れていた手が不意に、優しく頬を撫でた。体温が失われつつあって冷たく、血に濡れたその手ではあったが、確かな暖かさがそこにはあった。血の匂いが再び鼻に付くが、俺は構わず、膝を枕にする彼女の頭を抱きこんだ。

――人通りの少なく暗い街道。閑静な住宅街の縦横に広がる路地の中の俺たちへ、どこか遠くから、サイレンの音が届く。俺は思わず顔を上げようとすると、彼女はおよそ彼女らしからぬ強引さで、俺の顔を引きとめた。

「君に、私の分まで、ね……、生きて、欲しい……」

「ば、馬鹿ッ！ 頑張れよ！ いつもみたいに……あ、あと少しで

救急車が来るんだ！　ほら、聞こえるだろ？　あと少し、あと少しでさ……ッ！」

声が震える。

サイレンの音は如実に大きく、帳が落ち始めたばかりの住宅街にやかましく響き続けた。

気がつくど唇が震えていて、俺は嗚咽を漏らしていた。眼から溢れる暖かい、無色透明のしょっぱい液体が頬を伝い、顎の先から滴った。それは彼女の首筋に落ちて、

「お願い、笑って……？」

涙で視界がぼやけた。頬に触れている手から、力が抜け始めた。モザイク加工される彼女の顔が、徐々にこちらからどこか遠くを見るように、首が座らぬように崩れ始める。だから、俺は――。

「ああ、お前の分を生きてやる」

およそ今まで歩んできた人生の中で、一番の笑顔を見せて――彼女がその刹那、俺に全てを託すように、重くなった。華奢な身体はどこにこの重さがあるのかと疑いたくなる重量が、だが苦痛にならぬその重さが、俺の腕に、全身に、押し掛かる。

俺はその瞬間、彼女の生を諦め、死を認めた。

俺はその瞬間、およそ彼女が望まぬことを、口にして――。

俺はその瞬間から、彼女になった。

始まり——出会い——

桜の花びらが宙を舞う。俺が窓から見る景色の全てを覆いつくし、空気の色を薄い桜色に塗り替えた。まるで蛍光色のネオンが、この真昼間から妖しく煌々と輝いているようだった。

”あれ”から季節は一周し、俺は、『俺から私』となって、電車通学一時間かかる私立高校へと進学した。元から顔は整っていて、肉体はそれなりに華奢なのが功を奏したのか、俺は女生徒用の制服を違和感無く着こなす事が出来ていた。

^{スーブラ}偽乳を二枚重ねで装備し、そしてコルセットで身を包む。カッターシャツを着て、可愛らしく新入生を示す赤いリボンを結び、その上に紺色のブレザーを羽織る。下には腿まで来る来るオーバーニーソックスに、スカートを軽く膝に掛かる程度に履く。俺はそれを洗面所で幾度と無く確認してから、大きく息を吐いた。

——これから三年間、俺は俺と言う俺を殺して、少女、『杉林瑞^{すぎばやし みずき}希^{ちよつと}』になる。”私の分まで”と言われたが、俺はたかが一年と一寸で二人分の人生を歩む事は不可能だという結論を導き出した。どちらにせよ、こんな取るに足らぬ人生経験を持つ一男子が、出来るはずが無いのだ。

そして、高校を卒業する頃には、どちらにせよ肉体が彼女で居る事を許してくれないだろう。だから俺は、彼女があればほど楽しみにしていた、恐らく十代で一番大切だと思われる時間を、今は居ない彼女に使う。それが彼女に対して俺に出来る精一杯だった。

彼女が、その時間存在していた。それを、俺は刻みたかった。学校側は俺の熱意に折れたのか、了承してくれたようだが……。

「正直、不安だ……」

本当にこれでいいのか？ という疑問が、不安となっていくまで

も俺に纏わりついてくる。だがもう退路は失せているから、愚問にしかならないのだが、どうにも、胃がキリキリと痛み続けるのだ。まるで、あの日を思い出しているかのように。苦痛はあの苦悩を、思い出させていた。

しかし考えても何が始まるわけでもない。俺はこれから瑞希を演じ、彼女が今までそうしたように、勉強も運動も、その全てを完璧にこなさなければならぬ。顔は、自分で言うのも嫌なモノだが、中の中くらいだから当たり障りは無いはずだし、肩に掛かる程の長い髪が女の子らしさを演出してくれるだろう。声も、よく電車の中で聞く、マナーを知らない下品な笑い声よりは遥かにマシだろうと思えた。

だから俺は大きく息を吐いてから家を出て――決意を固め――玄関に鍵を掛け、俺で居られる最後の時間を自分で終わらせた――。

俺――否、私、としておこう。俺は今から私なのだ。寝ても醒めても熱しても冷めても、俺はこの三年間”杉林瑞希”個人にならなければならぬ。それを俺が決めた。だから、守らなければならぬのも、この俺なのだ。だから明瞭はつきりと確固しつかりと、完璧ばっちりそれをやりきらなければならぬ。故に俺は、ケジメをつけようと、その道中で大きく頷いた。

背後から追い抜くように通り過ぎるスーツ姿の男が、若干不審げに私を見た。が、それを気にする余裕は無い。その意味はない。どうしようもない。

「やるしかないんだ」

私の瞳の炎は燦っていた。

――最寄り駅は、自宅から十分ほど歩いて到着するローカル線である。電車賃はそれ故に高いが、仕方が無いとしか言い様が無いし、

私自身、その料金設定に対して擁護する気も無かった。

買ったばかりの定期を駅員に見せ、改札機を堂々と素通りする。私は胸を逸らし、革靴の底で人造石コンクリートを叩いて高らかに音を鳴らしながら、数分と経たずに来るであろう電車を待つべく、ホームへ急いだ。

予想以上に人が込み合っていて、ホームに到着するまで、人にぶつからぬ様精神を張り詰めるだけで私の心は磨り減っていた。この調子でいくと、私は、恐らくあるであろうクラスでの自己紹介で力尽きてしまいそうだが……頑張るしかない。

そういった精神論でしか、私は乗り越え方を知らなかった。

『間も無く——行き電車が……とオ着、シィます』

コブシの効く、滑舌の悪い駅員の声が雑音混じりに響き渡る。私はなるべく人の少ない電車の尻が到着する辺りに移動して、ソレを待った。そして騒音を掻き鳴らし、ブレーキの甲高い音を響かせて、その無数の命を乗せる巨大な鉄の塊は、まるで一つの生命体の如き存在感を持って現れた。やってきた。

私の運命を決するソレが、私の未来の分岐を曖昧な形から確かな輪郭を描かせる事になる電車が、扉を正面において、私の前で停車した。

口で表現するのならば『ぶしゅ』と言う、張り詰めた空気が放出されるような音を出して、扉が開いた。勿論、こんな何も無い駅に降りる人間がそういるはずがなく、別の出入り口から一人か二人出るだけで、後は残った者たちがぞろぞろと入り込む。私はその先頭に立って、真っ先に空いている席に座ろうとしたが——気がつく

と、私は押しに押されて、踏ん返り返るように席に腰を落として新聞を広げる中年男性の前に立っていた。

扉が閉まる、音がする。

私は慌てて頭上のつり革に手を伸ばし、手提げのカバンを握る手

に力を込めた。

電車が大きさに揺れてから、徐々に進み、そしてやがて勢い良く窓の向こう側の景色を早送りにしていた。

——胸が高鳴る。胃が痛い。膀胱の上辺りが妙に痛んだ。

誰かが、周囲の誰かが見ているような気がする。視線を感じる。それを気にし始めた途端に、私は足元から太腿、そして尻からくびれ、首筋に掛けて舐められているかのような錯覚を覚えた。無論、それは私自身の自意識過剰気味の妄想に過ぎないのだろうか……息苦しかった。

女に、女の子に、女性になってみて初めて分かる、妙な威圧。^{ブレッシャー}汗が額から頬を伝い、首筋から服の中に垂れる。

今は桜の咲く季節の事である。冬の如き厚着をしている私には、密集が故の蒸し暑さや、元々の、割合に高めの気温は少々堪えた。ソレが為だろうか。私は早くも疲れていた。

ざわざわと騒ぐ車内。駅に止まるたびに増える乗客。私の身体はその都度人波に揉まれて、

「……っ」

誰かの、小さな悲鳴を聞いた。

近くに居るであろう女の子の声であった。恐らく彼女も、新一年生でこの満員電車になれて居ないのだろう。私は、「既に一本早い電車に乗ろうと考えているのだ」等と妙な優越感を、声の主を探しつつ、その彼女に対して浸っていた。が——とある瞬間、何気ないその刹那、私の思考は、視線は、ある一方向で膠着した。

男の武骨な手が何かを掴んでいた。

——何かとは。

私は自問に答えてやる。それは中身の有るプリーツスカートだと。^{グレー}灰色に紺色のチェックが入る、丁度私が履いているような——恐らく同一の——スカート。否、目的はそのスカートではなく、その中

身。その尻であろう。

その太い指は繊細に、尻の谷間に擦りつけられていた。中指が忙しなく動き、残りの指はその感触を味わうようにその肉を揉みしだく。それだけで、スカート越しにも臀部の、女の子じみた柔らかさが容易に想像できて――吐き気を催した。

俺は――私は、こんな変態ちかんと同等の思考を持つ男に殺されたのか、と。

思い出すと酷く情けない。そうだ。”俺”が付いていながら、情けないことだ。悔しい。それは法の裁きでは到底足りるものではない。満足できるものではない。許せるものではない。

爪を引き剥がし、歯を引き抜いて皮膚がズル剥けぬ程度の力で頭髮を引っ張り抜く。死に至らぬ程度の殴打をかまし、肉をほんの一寸ずつそぎ落とし、言語機能を失わせた上で生きる氣力を削ぎとつて、殺してくれと懇願してからが――本番である。西洋の拷問具が良いだろうか。奴への裁きは、絶対なる権力と力を持つ”俺”が行使しなければならない。

が――あの日から一週間後、そいつは無事お縄に付く事になるが、余罪の存在が認められたために、確かな刑罰は、未だ下っていない。

――私は其処で正氣に戻った。氣がつくと、その視線の先ではピンク色の布が今正に弄られているところであった。

どうする？

助けるか？ 罪無き少女に対する痴態から。

この私が？ この身動きすらも苦しい混雑うごから移動うごいて？

私も無事で？ 仲間が居るかもしれないのに。

手を出す？ 腕を掴む？ 声を出す？

否――。

人ごみを掻き分け、手を伸ばす。自分の立つ空間を維持するだけで精一杯の乗客は皆一様に不快感を露にするが、俺は迷わず、中肉

中背、禿げ掛かった頭の持ち主であるサラリーマン風の男の背後に立ち、手を、伸ばした。

「へっ、いいケツしてンなあ？ 誘ってんのか？ ああ？」

それに気付き、思考し、実行に到るまで十数分が経った。そして導き出す、私の彼女に対する救出法は——痴漢返しであった。

私はそのまま、出来る限り地声の、最も低い声で、男の耳元で囁き続けた。それはそのまま男の声と、恐らくその気があるように、どこか艶のある湿っぽい声となる。そして構わず、彼がそうしたように、だらしなく垂れる尻の肉を揉み、その筋に中指を添わせた。

男の肩が、びくりと弾む。私は構わず中指を折り曲げて、その汚らしい尻を刺激した。

——死にたくなる。虚しい行動の最中に溢れ返るその声が心の中で一番大きくなった瞬間、俺は男の尻を力強くつねっていた。

気がつくと、男は小さな悲鳴を上げていて、それから逃げ出すように、人を掻き分け遠ざかっていく。そして間髪置かず、割合に大きい衝撃と共に電車が停車して——下車する人の群れに乗じて、男は姿を消していった。

——痴漢とは、実際されると妙に怖くて気味が悪く気持ちの悪いものである。だから、例えば女子高生に痴漢してしまうような男でも、自分がその相手の立場に立ってみると、それが十分に、否、自身が加害者であるためにそれ以上の恐怖を覚える、のであろう。私は浅はかにそう考えて、実行した。

私はそれから、めくれるスカートを直してやってから、その場を離れようとした。が、スカートから手を離そうとしたその瞬間、手首は掴まれ、自由を奪われる。私は目を剥いて手を掴んだ主を見ると、それは目の前の、痴漢被害者の少女だった。

『間も無く——駅、とオ着、シイます。……物、ない様、ご注意……』

…さっ！』

滑舌の悪い駅員は私が降りるべき駅の名を聞き取りにくく、ノイズ交じりに放送して——私は彼女の手を振り払い、電車を後にした。が……。

「ま、待ってくださいっ！」

人を蝶のように避け、舞台狭しと動き回る私の背後から、必死さ満点の声が聞こえる。だが改札まで僅か数メートル。私は待つか無視するかをコンマ数秒で考え、迷わずポケットから定期券を抜き出した。

鉄砲水のように、改札口から人が溢れ出る。私はそれに乗じてプラットホームから切符売り場へ、そして駅の西口へと脱出する。其処まで来ると人波の多くはスーツ姿や、制服姿が多くなった。そして人波と言うのもおこがましくなるくらい、まばらになっていた。

——しかし。

私は歩きながら、膝の前で両手で掴む手提げカバンを片手に持ち換え考える。やっぱり今は、“春”なんだなあ、と。変態も変質者も不審者も、暖かくなるから出てくるのか、開放的になる季節故なのかは分からないが、そういった代名詞である所以が、理解できた。だが、春は嫌いではない。嫌な思い出を思い出すことはあれど、この爽やかな空気は、俺——私を満たしてくれる。絶望を感じたその直後から、新たなスタートを、そのラインを見せてくれる。背中を押してくれるのだ。

桜の花びらが舞い散る景色の中、駅前の広い広場を見て足を止める。都会的で、だが歩道と車道との間に木が無数に並んでいるのが見えて、どこか自然的でもあった。

「いい場所だ」
トコロ

無意識に呟いた私の口は、半ば同時に、自分の世界から外の世界へと意識を引きずり出した。声と一緒に、この魂は外の世界に触れたのだ。

——ここから伸びる商店街を抜け、住宅地から十分程歩けば目的の場所である。その所為か、この駅がローカルと大都市近郊に繋がる幹線を統合しているからであろうか、自身と似た、あるいは同じ制服を着込む制服姿の男女の数が増えていた。だからか、この場所で立ち止まっても、私には誰も注目しない。

それはつまり、私は一女子として認められていると言う事であろうか。この容姿が、確かに女の子たる姿を持っていると言う事なのだろうか。ならば、もし都合よく捉えても仔細ないと言うのであれば——これ以上無いくらいに、幸先が良い事だった。

が——そう思えたのは私自身、つい先ほどの、被害者から言わせれば所謂ところの”事件”を忘れていたからである。

「あ、あのっ」

卸したての革靴が地面を叩くような、硬く高い足音が肉薄する。

——背筋が凍り、記憶が蘇る。酷く鮮明に、まるで遙か昔の出来事であったかのような錯覚を覚えて、私はつい数分前の過去を思い出した。

柔い肉を溢れんばかりに驚掴む武骨な手の甲。電車が止まるたびに、衝撃が慣性に従って、中にしまいこむその全てに衝撃を与える度に揺れて、その密着度は如実に増す。鼻を衝く加齢臭が偏見を抱かざるを得ない程の悪臭となって周囲の大気を汚染する。私はその西洋の怪物が如き中年男性の背後に迫って、彼と全く同じ事をした。^{モンスター}男の声で。男の手つきで。本来の”俺”がしない、するべくもない行動を、俺の姿で。そして男は退散して——。

「あ、あのお……貴女、ですよね……？　あの時、さっきの電車で、私を助けてくれたのは……？」

気がつくと目の前に居た。

自分よりも頭一つ分下程度の身長を持ち、栗色の髪がふわふわとウェーブを描く、可愛らしい女の子が。目が大きくクリクリとしているのがまるで小動物的で、明るさが腹の底から滲み出ているようだった。

身体は小柄で、だというのに嫌味なまでに主張する胸は制服の上から形が分かるくらい豊満だった。

私よりも――当たり前だが――女の子らしくて、そして恐らく今後学校で人気者になること間違いないであろう容姿を持つ彼女に、何故だか敗北感を覚えた。別に上など目指した覚えは無いのに、先ほどまでの、歌でもひとつ歌いたいくらい絶好調なハレバレとした気分はいつのまにか消え失せ、そして何故だか、まるで反射的にこの首は横へと振られていた。

「さあ？　何の事だか一体……。人違いだろうけど、誰か探しているの？」

精一杯の裏声は、果たして女性のものとなる。ならなければ私は既に目指すものを諦めていたが、それは運命さだめか遺伝子か、違和感無く女の子らしかった。

しかし、彼女は食い下がる。以前と変わらぬ不安げな表情で、眉間に悲しそうな皺を寄せたままで、私を上目遣いに見たままで、

「し、しらばつけれないで下さい！　その髪、顔、背丈、私は見たんです。この網膜に焼き付いて覚えているんです。既にその情報は遺伝子に組み込まれ後世に伝える準備は万端です」

「とんでもねエ英雄扱いだな」

「……？」

「あつ、いや……」

不意に出たもう一人の私の口調に、声音に、彼女は何か聞き間違えたのかと首を傾げた。私は思わず口を手で押さえ、それから精一杯の微笑みを見せてから――心中で大きく溜息をついた。

出来れば話題に上がらぬ程度で、仲の良い友人を作って平穩に過ごしたかった。何事も無く、”これ”をばれずに三年間を貫く自信はあった。だからそういった事を半ば信念に、志にして、朝目覚めると同時に決意を固めるために三度そういった意味の言葉を文章にして復唱してきたのだが……。

彼女は恐らく、今日の取るに足らぬ事をまるで命の恩人が如く誇張して喋繰るだろう。そして少なからずとも一定の間注目を得る事となる。気分は悪くないが、それは望むものではない。出来ることならば、この額を地面に擦りつけ頭を踏み付けられ、糞を踏みにじった靴裏を綺麗になるまで舐めてでも回避したい事象であるが、まず始めに、その懺悔的行為を許してくれる人物ひとが居ない。だから殆ど回避不能の一撃必中、必殺の事柄であった。

今までの経験レベルが足りなかったのか――否、これは所見殺しである。人ならば、ある一定以上の勇氣と常識と良識を持ち合わせる人間ならば、恐らく確実に取ってしまう行動を、常識的に取ってしまった。それが却って自分自身ワザワイに禍となり返ってくる。

誰も予測し得ないし、自分の行動は正しいと信じきってしまうのが、敗因であろう。

――このままこれが噂のバッドエンドかと視界を黒く染めつつある私の腕が強く引かれた。

思わず身体が揺れて、雪山で眠りかけ、仲間を起こされたかのように、私は慌てて目を剥いた。眼下の彼女は酷く潤っていた。それこそ、涙が溢れんばかりに。

「その制服……私と同じです。って事は、私と同じ学園ですよね？
貴女……そして同じ路線の電車に乗った……」

「……、何が言いたいのか？」

私は思わず、彼女から出るであろう答えを口にしようとして言い淀み、そして促す。私が考えた返答にしては余りにも強引過ぎるし、常識外れすぎたから多分間違だろうという不安もあったし、仮に正解していたとしても、そこから彼女の意味を捻じ込まれそうな予感がしたからだ。

別に彼女は悪い人間と言うわけではない。寧ろこの上なくくらい純真そうだし、容姿も可愛い。その線で行けば最上とも言える彼女だ。だからこそ、余り付き合いたくは無いのだ。悪く言えば、目立ちすぎてしまう。ソレは即ち、不必要な詮索を生み出してしまふ。

「ここで会ったも何かの縁……これから私と、仲良くしていただけないか？」

彼女はここぞとばかりに手を伸ばす。頭を下げ、まるでどこぞのテレビ番組の告白シーンの如き様相だった。

緊張する。胃が痛む。心臓が張り裂けそうなくらい激しく鼓動^{ビート}を打ち鳴らした。呼吸が乱れ、汗が吹き出る。腕が震えて――無意識に、私の右手は彼女の手へ、連動する様に引き上げられていた。

止めろと私の理性が叫ぶ。だが、断る理由が見つからなかった。そして此処で断れば、彼女は付きまとうだろう。それは出来る限り回避した。ならば穏便に済みますか？ 答えは心の中で大きく叫ばれた。

「事情が飲み込めないし突然すぎるし不躰だ」

けど。私はそう続けると、地面と水平になる彼女の上半身が引き上げられた。彼女の整った、少女少女している顔が、私に注目した。注視した。緊張した。

「ま、それは追々、ね」

私は短く息を吐く。力が尽きる寸での所で敵兵の刃がこの首目掛けて振るわれるのを見て、死を覚悟するが潔さで、私は力強く、彼女の手を握り返した。ぱちんと軽い音が鳴って、びくりと震える彼女の振動が伝わった。

肉の柔さが、やはり女の子なんだなと思わせた。その暖かさが直ぐに手のひらに汗を欠かせるが、果たして本当にそれが高い体温の所為なのか、私には定かではない。

——そして私はまるで噛み合わせぬ会話の中、半ばなし崩し的に彼女と友好を結んだ。

「私は『小和瀬光』こわせひかり。よろしくねっ」

彼女は持ち前か、それとも私と友人の関係になったからか、先ほどの今にも消えてなくなりそうな元気の無さが嘘のように明るくなって、私の手を引いて駅前から商店街へと引っ張った。アーケード私はそれに抗う気力も抵抗する元気も、今の、これまでのやりとりで根こそぎ奪われて——ただそれに従うしかなかった。

これが私の、一つ目の分岐点だった。

始まり——終わり——

やがて学園に到着する。溢れ変える人はその殆どを学生に変えており、私たちは何事も無い様にそれらに紛れて学園の敷地内に足を踏み入れた。最も、今日からこの学園の生徒なのだから隠れる必要も無いのだが……。

緊張する。正直言って、もう帰りたくなってきた。そういった風に意思が揺らぐ。というかそもそも意思なんてものは麺類が如き柔さだったのかもしれない。アルデンテなんて目じゃない。放置したカップラーメンだ。とても喰えたモンじゃない。これ以上加工のしようが無い。手がつけれられない。もうどうしようもないったら、ない。

「えへへ、瑞希^{みずき}さん。私本当はすっごく不安だったんですよ。同じ中学の友達に来てないし、二回目の電車で……その……あんな、事あったし……」

でもでも、瑞希さんが助けてくれて、すごく安心したんです。元気が出て嬉しくてこれ以上ないくらいの幸せを貰ったようだった——という意味の台詞をニヤニヤしながら延々紡ぎ続けて、やがて昇降口前へ到着した。

おぞましいくらいの人ごみが形勢されていて、人がゴミだという名台詞を地で行く光景だった。ざわざわと雑踏は騒ぎ、歓喜に満ちる。一方で緊張を抱いて胸に手を当てる男子女子も紛れていて、一概に騒がしい者ばかりとは言い難かった。傍らでは、数十分前の恐怖^{トラウマ}体験を呼び起こしたのか、小和瀬が袖を強く握っていた。

随分とまあ、懐かれたものだ。彼女が本当の私を知ったら一体どう思うだろう。今朝だけで十分に男に嫌悪を持ったであろうから、恐らく相当な事になるだろう。正直、ここまで人懐っこい娘に懐か

れて信頼されている現状を考えると、あまり想像したくない事だった。

何はともあれ人ごみの中に侵入して、大きなボードに貼られるクラス割表を見上げた私たちは――。

「――あ、ここか。Fクラス」

昇降口から階段を上って最上階、その四階部分の廊下突き当たり。そこに自身が割り当てられたクラスが存在していた。

因みに予断ではあるが、小和瀬光は名誉有るAクラスに割り当てられた。これは私の浅はかな考えであるが、恐らく頭の出来の良さに順にAから並んでいるのだと思う。でなければ、自分で言うのも悔しいものだが、私が杉林瑞希に追いついていないという証拠にならない。

姿と名を借りている今だが、その頭のできまでは真似できていない。必死に倣おうとしてはいるのだが、追いついていないのが現状だ。そしてまだ――自分を捨て切れていないからなのかも、知れない。私の大切な部分が心の奥底にこびり付いてしまっていて、それが邪魔しているからなのだろう――といっても、それは言い訳にしかない。だから今考えた事をちよっとだけ女々しいと思って後悔してから、大きく深呼吸をした。

ガラガラ、ガラガラ。

音を立ててあけると、その効果音とまるで同じように、教室内に人の気配は希薄だった。机はざっと見るだけで縦に六、横に五の総数三〇席あるのだが、席に着いているのは僅か十人前後。そして誰も、音を立てた主に、つまり私に注目しなかった。というか、まるで聞こえていないように、興味を持たぬようだった。

まあ、目立たぬに越したことはないし、いいだろう。そう考えて、

教室の黒板に大きく描かれる座席表の、名前の羅列へと視線を移した。右列から順に眺め、あ行、か行……そして間も無くさ行へと続き、二列目最後尾に、堂々と『杉林瑞希』と記されていて、思わず心臓が高鳴った。

俺はここには居らず、私だけがここに居る。それを改めて現実のものだと、自分だけが周囲を騙しているという事ではないんだと再認識させられ、また大きく息を吐いて――自分に充てられた、好条件の席へと数歩で向かう。

が……。

思わず思考が停止しまうのは、自分の席に他者が踏ん反り返り、机の上に我が物顔で荷物を置いて、あまつさえ音楽をイヤホンでシヤカシヤカ聴きながら携帯ゲームをしているからであった。

私はもう一度黒板へと顔を上げ、名前の位置と、席の配置を確認しなおす。が、やはりどうにも私自身が間違っている様子ではない。ならばどう言う事であろうか。答えは明瞭、この――短いスカートを履いた上で足を組み、その肉が張り詰めた太腿を挑発するかのように見せびらかす女生徒が間違えているのだ。

だが、声をかけるのはちょっと怖い。短く切り上げられる髪はややボーイッシュで”こわもて”風だし、後ろから見える顔立ちは、割合に美形だ。通った鼻筋に、すらっとする顎のライン。服の上からでも分かる立派な骨肉は、恐らく体育会系だろうと予測立てさせた。

故に、仮にこの娘が逆ギレして殴りかかってきたとしたら――どうしよう。私とてこの一年間なにもしていないというわけでもないが、手を上げるわけにいかんだろう。流石に。

ならどうする？

彼女の聞く音楽を誉めるか？　だがシヤカシヤカとしか聞こえない。

だったら騒音を注意するか？　困っている者などここにはいないし、印象は最悪だ。

であるならば――。

わたしは一ついい考えを思いつく。恐らく、空へロケットを飛ばそうと思いついた人間は、これほどまでに素晴らしい考えが思いついたぞと、誇らしげに思ったのだろう。そのくらい良い提案だった。そして気がつく、私の手は、彼女の肩を軽く叩いていた。

「……？」

彼女は膝の上のウォークマンを操作して音楽を停止させ、そしてイヤホンを耳から外しながら携帯ゲームをスリープ状態にしてから、漸く振り向いた。

――その顔は予想以上に整っていて、思わずどきりとした。

吸い込まれそうな大きな目に、漆黒の底なしと思わせる深い瞳。

可愛いというよりもクールビューティーであろうジャンルを持つ彼女は、自分に何か用なのか、という風に私へと視線を向けた。

ごくりと唾を飲み下す。音が鳴る。喉仏が蠢いた。五臓六腑に恐怖が染み渡り、緊張が肉体の主導権を鈍くする。私は気をつけの姿勢のまま、二、三秒のタイムログを置いて、暫く振りに口を開いた。

「もう一度、座席表と自分の座っている位置を確認してくれば私が幸せになれると思うよ」

「……？」 ――あ、ああそう。ごめんごめん、あたしの席は隣だったよ」

透き通る声音。声は鋭く体内に浸透して、そして背から抜けてゆく。私は彼女の好意的かつ素直で率直な反応に好感を持ちつつ、慌てて荷物をどかさされた机の上に、私のカバンを置いて席に座る。椅子は彼女のぬくもりがあって生温く、妙な興奮が頭を沸騰させかけた、が――私はあくまで女の子だ、と自分に言い聞かせることで、理性は肉体を支配しなおした。

「えーっと、スギバヤシさん……だね？ あたしは『流石琴巳』^{りゅうすけいじ}。や、メーワクをかけたお返しについて事で……やる？」

彼女は爽やかな笑顔で携帯ハードを差し出した。が、私は顔の前で手を振り、それを拒否した。

「いや、ソレやりかけのRPGだし……」 しかも据え置き版も携帯機版も攻略済みだし。

言いかけて私は口をつぐむ。それは”私”が言うべき台詞ではないし、私が知っているべきことではないからだ。あくまでそれは、数時間前まで生きていた”俺”の記憶であり趣味であり、その記憶はともかく趣味経験を引き継いではいけない。そんな気がした。私は純然たる杉林瑞希で居るべきだ。私はそうに決めていた。

彼女、流石琴巳は残念そうに携帯ハードを手元に戻すと、そのままケースに仕舞いこみ、半ば空に近いバッグの中へ乱雑に突っ込んだ。そうすると、壁際なのをいいことに、壁を背もたれに、そして椅子の背もたれを肘起きにして、此方へと向き直った。

話を、お喋りをする準備は整ったようだった。

私は仕方無しに彼女へと、頬杖について向く。これからあるであろう怒涛の展開に備えて少しでも体力を温存しておこうと考えた矢先の出来事であるから、少しばかり自棄になっているのだ。

しかし彼女はそれを気にした様子も無く、口を開く。

「杉林さんは、同じ中学の連れがいたりする？」

「ん？ いや、居ないけど」

居たらこの学校など選んでいない。

付け足したいが、意味はないし、だからなんだというのだろうか

と自分でも思えた。

「へえ、実はあたしもそうなんだ」

彼女は何故だかふふんと胸を反らす。薄っぺらい胸板が強調されて、妙に虚しくなってきた。偽乳とパッドのあわせ技を持つ私よりも小さいオリジナル乳房は、どうにも哀れになってくるが――どうも嫌いになれないのが、私の良いトコロであり悪いトコロでもあるのだろう。そもそもこの趣味は”私”のものではないのだが。

「ところで、ゲームとか好きなんだ？」

――だが。

だが、私は我慢出来なかった。

私が何のためにここに居てなぜ杉林瑞希になっているのか、なぜ彼女になろうと思ったのか忘れたように、それを口にしてしまった。自分の、本当の己が腹の底から溢れ出るようだった。

しかし、それを待っていたのか、彼女は私の心中なぞ知らぬように瞳を輝かせる。”同類”だと見られたか――琴巳は大きく頷いて、満面の笑みを浮かべていた。私はうな垂れた。

そこで私は、適度に自分を生かし殺す案を思いつく。

彼女の言葉を受け止めそして適当に返しながら、教室内の人口密度が如実に上がるのを感じながら、心に刻み込んだ。

己の趣味は生かす。だが人格、性別、容姿は杉林瑞希だ。飴と鞭といえは聞こえは良いが、詰まるところ単なる意志薄弱だ。この調子では、普通に女の子に恋心を抱いてしまいうで背筋がぞっとするが――まあ、ソレは無いだろう。

何はともあれ、これが私の二つ目の分岐であり、そして当分訪れ

ない最初の内の最後の選択だった。

疾風のように

この街は駅を中心にした暮らしが根付いている。その為に、駅近辺には巨大な百貨店が立ち並び、レンタル店、呉服店、ゲーム屋、本屋、ジュエルショップ等など、生活しやすいように、様々な店が連なっていた。そこは商店街となって、人々の暮らしの根本たるとなる。

私はその、およそ一般的な作りであろう街にある、私立高校に入学した。

容姿端麗……とは言い難いが、平均だと思いたい容姿を持ち、頭脳明晰、と言えるのは特定の趣味にのみ。勉強は平均よりやや出来ると自負しているが、客観的に見れば真実の程は分からない。

つまり私は、そういった多分一般的だろうと願っていた一女子高生となることができたのである。そしてその生活が始まって一週間が経ち……。

学生生活が始まると、およそ一週間で極自然的にグループが別れ、似た者同士、気の合う同士で集まったりつるんだりする。中には独りのほうが好きなモノもいたり、グループに入れずはみ出したものも居るが、基本的に二人ないし三人から五人程度の集団となって多くの行動を共にする事になる。

最初の方は同じ中学出身の人間と仲良くするかもしれないが、個人の生活、友人関係が確立され始めると、その関係もやがて希薄に為り始める。最も、私はその旧友が居ないのだから、その心配をする必要はないのだが……。

「ねーミズキい、昨日のアレ見た？」

私は入学初日に二人の友人を作る事に成功した。が、同じクラス

の、今話しかけてきた彼女は割合に、”失敗した”方だと、わたしは思う。声を掛ける人材を間違えたのだ。しかし、あの状況では声を掛けなければいけなかっただろうし、私にそれ以外の選択肢は提示されていなかったのだから、仕方が無いと言い訳しても誰も咎めはしないだろう。彼女にいたっては手放しで誉めてくれると思う。うれしいことではないが。

彼女は――明るめの肌は光を当てるとまるで透けてしまいそうなほど繊細で、白すぎた。きめ細やかな肌が造るのは端整な顔立ち。通った鼻筋に、切れ長の眼。男勝りとも見えるが、凛々しいと言い換えることも出来そうな口元は締まっていた。短い髪と思われた髪はただ癖が付いているだけらしく、後ろ髪は跳ねていた。髪は軽く眼に掛かって、もみ上げは耳を隠して顔に掛かる。ウルフカットと説明したほうが早いだろうか。

締まった肉体は、完全なる戦士――もとい、体育系を思わせる。膝より短いスカートから見える太腿は無駄な肉をそぎ落としたかのように太く、力を込めると中で筋肉が胎動する。傷一つ、無駄毛ひとつ無いそのカモシカの如き足は、彼女が持つに相応しい美脚だった。

だというのに彼女は、

「まあ、一応チェック程度だけだね」

「いやいや、あたし的には今期一番の当たりだと思うわけですよ！」

「今期って、まだ四、五本しか放送開始してないじゃない」

「でもでもさあ、いやあね、震えたよ魂！」^{ハート}

いわゆるオタクと呼ばれる人種であった。

人は外見^{みたま}にはよらぬと言う事が良くわかり、良い経験となった――という感想で締めたいが、この三年間、これからの三年間、恐らく彼女とは切っても切れない縁となりそうだ。なぜならば、私も詰まる所の同種だからである。

最も——この趣味が重なった、という所は単なるきっかけに過ぎないだろう。何か本能的にそう思わせる何かがあった。私は狡猾に、訓練された麻薬探知犬の、あるいはトリュフ豚の如き嗅覚でそれをかぎ分けたのだ。しかしそれが何の匂いなのかは分からない。その匂いの根源の存在をそもそも知らなければ、何の匂いなのか分からぬのは、ごく当たり前のことなのだ。

——チャイムが鳴る。ざわめいた教室内が少しそのトーンを落とし、それぞれ個人が割り当てられた席に着き始めた。直後、教室正面のドアが開き、影が胸を張って入り込む。このクラスを担当する、教師だった。

男性教員は落ち着いた態度でざっと教室内を見渡し、簡単に出欠席を確認する。見た目はまだ二十代であろうが、随分な落ち着き具合である、私は天からの如き評価を与えた。彼はそれから二言三言、諸連絡を生徒全体に伝え、さらに該当する委員を名指ししてまた連絡を伝える。腕時計で時刻を確認すると、彼は「それじゃあ」と始めて、

「以上っ！」

かつて西洋に居たとされる竜の咆哮は、このようなモノだったのだろうか。

声が衝撃となって室内を激震させる。ビリビリと肌を叩くのはやはり動かされた空気であり、その気迫にただでさえ小さい肝が縮む。湯通しされたようだった。

彼はそれを最後に、教室を後にする。締め言葉からドアをくぐるまで、彼は得意気な笑顔で、故にこのクラスで人気を博していた。爽やかなルックスに、親しみやすい笑顔。たまに入るユーモアや、簡潔な諸連絡と、分かりやすい授業などがその要因だろう。私もどちらかといえば、好意的に受け取ってやらない事も無い男だった。

——ともかく私はそういった風に順調に、女子高生としての生活を始めたのだが……。

「ちよいとおしっこ、もとい黄金水、ないし聖水、ちっこ、しっこ、おちっこ、等など様々な呼称が存在する小水を排出してきたいんですがかまいませんね？」

「ただ静かにひたすらに”花を摘んでくる”とだけ残して行って来なさい」

昼休み、私はふと尿意を催して彼女——流石琴巳さすがこしみに、トイレに言っ
て来るという意味の言葉を告げた。彼女は弁当をつついていた箸を止めて、あからさまな表情を私に見せながら、親指で背後を指した。その先には教室の出入り口があって、彼女は続けてそういった。私は促されるままに、というかほぼ自発的に教室を出てトイレを目指す。廊下はたむろする男子、女生徒で溢れかえっており、仮に私がビーム兵器を持っていたとしたら零距离でぶっ放して見たいと思うくらい鬱陶しかった。一歩歩けば一人すれ違い、五歩歩けば十人はすれ違うであろうその廊下は、一体何を目指し何を求めるのか判別付かぬ、半ば徘徊者と化す生徒に満ちている。

まあ、普通に考えれば友人に会いに行く、あるいは昼飯を買って帰るところか、買いに行くところ、暇を持て余して学内探索や、私と同じ目的を持っているのだろう。だが邪魔は邪魔だったのだが、

「考えれば、学校のトイレは初めてだな」

一分とせずに辿り着く目的地トイレは、外観を小奇麗にして維持されていた。押し引くタイプのドアは白く、どこことなく中からの冷氣が伝わってきそうなほど無機質的だった。故の小奇麗さなのか、定かではなく然程の興味も無く、私は一切の迷いも疑問も無く、そのドア

ノブに手を伸ばし、開いた。

ドアを開けると、床には水色のタイルが広がる。その上に立つは数人の男子生徒。なるほど既に先任者、もとい先客が居たかなどと思いつつ、私は中へと足を踏み入れる。と、其処で私は疑問を抱いた。

「ん？」

すると、扉付近にある洗面台に居た一人が私の存在に気付いて顔を上げる。顔を見る。身体を見る。足元からまた、嘗め回すようにその瞳が動いた。顔が連動し、上がるとその眉間には皺がよっていた。彼は身体をこちらに向けて、明らかな狼狽を見せていた。

「んん？ えっ、ちょ……、あれ？ ん？ あれ、ここ男子……えっ、えっ？」

「おっと、失敬」

口はまともな言葉を紡がず、混乱だけを見せていた。だから私は彼の混乱を治めるために一步退き、静かに扉を閉めた。

——位置について、よい、ドン。

私の頭の中で、走り出す全ての準備が執り行われた。

扉を傍目にする態勢から、腰は少し落とされて、走り出す予備動作を得る。

視界内に人はいるか？ 居る。よし、ならばこれから走り出す軌道上には？ 居る、が随時修正可能。よし。私はスーパーコンピューターが持つ処理速度よりも早い切り替えで、この肉体を操作して——私は扉を閉めると同時に、走り出したのである。

顔は見られたか？ ああばっちりだ。だが赤面すればどうということはない。男子生徒が女子トイレへ入ったのならば変態扱いであるが、女子が男子トイレへ入った後赤面して逃げ出せば、そこにあ

るのはいわゆる一つの萌え要素。

だが現実としてあったのは、男子トイレを開け、閉め、般若の形相をして廊下を全力で走りぬける奇人の姿だった。だがその速度だけは、疾風^{はやて}だったと願いたい。

「――あー、疲れた」

たかが二〇〇ミリリットルにも満たぬ尿を排出するだけで何故これほどまでに疲弊しなければならないのか。

「んーふふ、ねえミズキ、さっき男子トイレに入った女子が居たんだった。もしかしてミズキ？」

「ん？ まあ、うっかりって所ね。反省はしてる」

「なーにーさあ、素直に認めちゃってえ。そこは恥ずかしがつて赤面してモジモジして顔から煙だすところでしょ？」

「お……私に何を求めてんのよ」

たかが二〇〇ミリリットル分の排尿を行うだけの時間で、これほどまで噂が広がるのか。正直驚いたし、怖いとも思える伝導率だ。疾風なんてメじゃない。電撃だ。田舎の村もびっくりである。

しかしこれじゃあ――うっかりボロも出せない。出すつもりは無いのだが。

「でも結局、ソレだけなんだよね。つまらん」

「？ どういう意味よ」

「だってさ、別にそれで運命の出会いするわけでもないし、ロボットに乗れるわけでも超能力使えるわけでもないし、実は性別偽ってる伏線でしたーなんてことも無いじゃん？」

「……あながちそーでもないんだな、これが」

私は中身の失せたビニールをグルグルとまとめて塊にし、それを捨てるために立ち上がった。私はその手のひらから記憶を吸い取ることが出来る事を祈りながら彼女、琴巳の頭を軽く撫でて、ゴミ箱へと向かった。

一歩二歩、それから手はアンダースローの動きで手からゴミを投げた。音も無くそれは至極軽い仕草でゴミ箱の中へと姿を消して、それを確認してから席へ戻る。と、彼女は厳しい表情でこちらを向いていた。

「――能力ちからが欲しいか」

「は？」

「あれ、違った？」

「なんか色々」と

子供っぽく舌を出して片目を瞑る彼女はどこか可愛らしくいとおしくて、呆れて腰に手を当てる私は本来の私らしかった。対照的に見える彼女と私、だが仲良くやっていけるのは、対照的であるからだろう。

私はそんな彼女に心を奪われぬよう、机の上にある、然程好きでもないお茶を飲み下してから、再び席に着いたのである。

強く今を生きる

私が受動の最たる生活を甘んじていると大抵、近い日に、何かが起きる。平和すぎる日常の中には、およそ日常に限り無く近い非日常があるものだ。最も、その個人が日常と比べて、こいつは非日常だろうと断定する酷く曖昧で儚いものであるのだが――例えば、不良に絡まれたり、告白されたり。

私の場合は、もう一人の私が蘇る休日、救済日の事だった。最も、単なる休日の事なのだが――私は学園にこの『杉林瑞希』が居たという事実を刻み付けただけであるために、学園が休みの日は元の姿に戻るのだ。故に私、否、俺は本当の意味で、休息を得ていた。詰まるところ、学園で杉林瑞希を名乗っている女生徒は、男の姿に”戻って”、その学園がある街を徘徊まわしていた。

この場所を徘徊まわつく理由は、商店街の中に在る本屋に、個人的に非常に興味のある本を見かけたからである。帰りは大体が琴已か、もう一人の友人『小和瀬光』と一緒なので下手な行動まねはできない。故に、宝がすぐそこにあるうというのに放置する選択しか選べなかった。俺のポインタは、フリーズしたかのように固定されていた。

だから休みのこの日に、わざわざ金が掛かる電車でがたんごとんと揺られ押されながら小一時間掛けてこの場所へ赴いたのである。

――駅を出ると晴れ渡る空が広がる。上がりつつある気温は、俺の額から汗を流させた。日差しは強く、薄手の上着を選んで正解、良いセンスだと自分を誉めてやりたかった。

新鮮な空気が俺を迎える。汗を拭い去り、爽やかな空気を肺一杯に吸い込んだ。都心に近い県でありながらも、その中では割合に遠い街であるが、都会的であるその駅前はいつ見ても飽きなかった。

タクシー、バスの停留所に、二車線の道路が円を描いて存在する。その中心には歴史の人物らしき銅像があつて、俺はそれを遠目に眺めながら商店街へと向かう。大股で、出来る限り知り合いに会わぬ

よう顔を伏せながら。

円形に作られる道路の駅前から逸れて真っ直ぐな道を進むと、やがて遠くの方で大きなアーケードが口を開けているのが見えた。その手前、駅から一、二分歩いた場所に百貨店が建っていて、人通りは平日休日問わず多かった。車の出入りも同じようで、俺は警備員に数分の足止めを受ける。が、別にそれが悪いというわけは無く、やはり「都会的だなあ」のひと言に尽きるのであった。

多くの人々――老若男女が通り過ぎる。広い歩道の中、自転車でも通り過ぎる者も、男女の組で楽しげに腕を組んで過ぎ行く人も、女性二人組み、男性二人組み、などもざらである。

「なあ、悪いけど帰りの電車代貸してくんね？」

その中で不意に聞こえたその台詞。俺は思わず背筋を凍らせた。しかしどうやら、その言葉は俺に向けられたものではないらしい。つい先ほど通り過ぎた二人組みの男たちの会話だった。

「ま、仕方ねえよなあ。アイツ強かったし……しかも女の子だった」「……そいつは真実で言っているのか？」

「格ゲーの女の子より太腿が綺麗だった……感謝致します」

気がつくところには『一番街』と看板を掲げるアーケードが口を開けていた。その手前は道が左右で裂ける丁字路となっていて、今までの道と比べると人口密度は薄い。やはりその人を大量に吐き出す商店街こそが、一番の盛り上がりどころであるらしかった。

俺は向かい来る人の波を華麗に避けては流し、流しては避け、そしてようやく商店街の中へと入り込む。日差しは途端に優しくなつて、逆に湿度が上がった気がした。が、しかし気にするほどでもなく、俺は軽く胸元を仰いで、服と肌の間に空気を入れ込んだ。若干涼しくなったようだが、取ってあげるほど変わるはずもなく――気

にならなくなる程度の人通りになったアーケード街で、その、歩き慣れた筈の商店街で、ゲームセンターを発見した。

大発見である。

ずっとパチンコ屋と勘違いしていたが為に、騒がしいなあと思つて華麗にスルーしていたが、ジャラジャラ音を鳴らしていたのは比較的店内の手前にあるメダルコーナーであつて、よく見ると奥の方には筐体きょうたいがずらりと並んでいた。見るからに種類は豊富そうである。クイズゲームからリズムゲーム、定番の格闘ゲームからクレイン、など等、俺の興味を驚掴みするものばかりがあつた。

俺は腕時計を見る。気がつくと、俺の身体はゲームセンターの前に移動していた。

「十四時か……ここで一時間使つたとして……、十八時前には家に着く、な。よし、余裕」

簡単な決意と興味を下に、俺はゲームセンターへ来店した。

様々なゲームのBGMに、メダルゲームの筐体がコインを排出し、そして利用者が音を掻き鳴らす。それら全ての音が入り混じつて頭が割れそうになる大音量が生み出されるこの空間——大好きだ。休みという事もあつて利用者が多いのか、空気は紫煙で淀んでいるが、嫌いじゃない。五月蠅く子供たちがわーきゃーと騒ぎ走り回るが、今日は許せる。そんな心情にさせてくれるここは、ゲームセンター。

俺は一先まず、一年前までは慣れ親しみプロ級を自負し始めた格闘ゲームの筐体へと向かう。しかしそこには見慣れたものは無く、どうやら今までやってきていたゲームの最新版が並んでいるらしかった。が、俺は構わない。全てに身を委ねるつもりで、横に長い椅子に腰を落とし、サイフを筐体に置く。

どうやらこの背中合わせに並ぶ筐体の向こう側には同じく利用者プレイヤーが居るらしく、目の前の大きな液晶は、その戦闘画面を写していた——が。

無情に百円玉を飲み込む筐体によって、それは中断される。

そして恐らく、向こう側の画面には『乱入』を意味する英単語が羅列されていることだろう。そういった発音の良い音声^{おれ}が聞こえたが、俺には何を言っているのか分からなかった。

俺は最新版でもおなじみの位置に居る中国娘を選び、決定ボタンを押す。向こうは既にキャラクターを選択し終えていたらしく、画面は素早く戦闘画面に移行した――。

「レディ・ゴー」

本場の発音でそれは紡がれた。

同時に俺は敵へと、コアリズムを使うインド人へと定位置から肉薄する。この間僅か一秒足らず。

俺は様子見とばかりに小キックを浴びせる。中国娘から伸びる美脚は華麗に包帯が巻かれる敵へと襲い掛かるが、瞬間、インド人は眼前から消えた。

「なんだと!？」

こいつは脳までいい天気になった俺の幻想か？ 否、それはバグと言えるわけも無い、敵の持ち技の一つであった。いわゆる所の瞬間移動。コアリズムを極めし者は一瞬にして空間を移動でき、口から氷を吐ける鬼神と化すのだ。故に、一瞬不意を突かれた中国娘の背後に回りこむインド人は、容赦情けなく空気中の水分全てを凍りつかせんとばかりの吐息を浴びせた。

全身が凍りつく。体力ゲージが三分の一にまで低下した。

まずい。死ぬ。

脳裏に負の言葉が染みこんだ。汗に濡れるジョイスティックが音を立てて激しく動く。中国娘は激しい身震いの内、すぐさま全身に纏わり付く氷を打ち破って、カウンター気味の上キックをお見舞い

する。しかし気がつく、インド人は地面に這い蹲っていて――。
瞬間、インド人の瞳は眩く光り、背景が黒く染まる。これは、まさか……。

「コアファイヤー」

開始十秒未満でノーダメージ、さらに下に方向キーを入れている状態で小難しいコマンドを入力すれば放つことが出来る超必殺技の『コアファイヤー』であった。その直前に全てを冷凍する吐息を放っていた事は関係するのかしないのか、俺の中国娘は炎の鎧をまとって背後へ吹き飛ばされ、消し炭にされて地面にへたり込んだ。

体力ゲージはいつのまにか完全なゼロへと消費されていた。

――それから俺は、何度もインド人へと相対する。その為に何枚の硬化が消費されたことだろうか。今までに消費した硬化の枚数を覚えていたのか、と問われれば迷わずノーと答えてやれるほど、俺はソレに対して自信を持っていた。

しかし簡単に言えばボロ負けしたというわけで。俺の腕が鈍ったと言い訳したいが、自宅でのプレイを地道に続けていたからそれも口に出来ないだろう。

俺は本来の目的を達成できなくなると判断して、ゲームを中断し、席を立つ。最後に俺をここまで――経済的にも――苦しめてくれた相手の顔を拝んで行こうと思うと、丁度向かい側の相手も、席を立ったところだった。

自分に近い背の所為か、筐体から頭の先が見えていた。そして筐体の隙間から顔が覗く事が出来て――その顔は、どこかで見た事があるものだった。どこかで、と言うのは正しくない。だってそれは昨日も一昨日も学園で見た友達顔なのだから。

「……ん？ おっと、リアルファイトならお断りですよ？」

いつもの調子で口を開く。だが、スポーツをやっているんだかないんだか分からぬ、程ほどに鍛えられた肉体を持つ彼女でも、男相手には敵わないだろう。そもそも喧嘩なんてものが彼女に出来るのかすら定かではない。

俺は彼女、流石琴巳を一瞥してから、そそくさと向こう側に回りこんだ。その足の速さ身の軽さたるは鼠小僧を越えたかもわからない。

彼女は怯えたように、身構えた。俺はそんな琴巳に手を伸ばし、握手を求める。

「いい試合だった」

それが俺の素直な感想だった。

友人関係であつたとしても、初対面であつたとしても、心からの嘘偽りない言葉である。この格闘ゲーム内では勝者が、勝者のみが正義であり、敗者は屑、ゴミ、チリアクタ以下の下衆に成り下がる。勝てば官軍……なんて言葉があるが、正にその通りなのだ。

そして俺はフェアプレイヤー。現実で覆せるその真実を、力任せでねじり変えようとは思わない。

彼女は俺の握手に恐る恐る応じ、そしてこのナイスガイたる俺が何もしないことが漸く理解できたのか、力強く握手を返す。

「なんか、君とは初めて会った気がしないなア」

と、要らぬひと言を付け加えて。

このナイスガイを捕まえてあんな女顔時の、見ればシヨタに見えなくもない顔の『私』に似ているという意味の言葉を突きつけた。背筋に悪寒が走る。俺は彼女の手を握って上下にぶんぶん振ってから離して、「じゃ」と短い別れの挨拶の後――そそくさと、それこ

そ訓練された精鋭部隊の如く桃源郷を後にした。

まあ友人が割合に学園の近所に住んでいるらしいことも分かったし？ 上には上が居ると言う事もわかったし、考えようによつては結果オーライだ。少し見方を変えれば世界はこんなにハッピー。

「見ると君は中学生か、辛うじて高校生らしいね」
「そういう君は女子高生」

つーかなんで着いて来ているんだお前は？ という突込みよりも早く言葉は滑り出る。

ホットパンツに黒いニーソックス。更に上をシャツの重ね着で済ます格好は、この時期にしては薄着過ぎであったが、この割合に高い気温を考えると無理もないと思えた。が――そんな挑発的な格好で、見も知らぬ男に着いてくるその理解不能な思考には、吐き気を催した。

ゲームセンターを出ると真っ直ぐ左を向いて、元の進行方向へと進む。人の流れはそう多くは無く、流石琴已は隣に移動する。

「なんで着いて来るんだ？」

「この先の本屋に用があんの。君があんだけ足止めたから、急がないとイケないのっ」

「だったら先に行ってくれ」

俺はどうぞと肩をすくめながら先を促す。歩調を緩めて彼女の様子を見ると、何故だか急ぐと口にし大きく手を振っているのにも関わらず、彼女は依然として、俺の隣から離れようとしなかった。

「なんなんだ。ベタな言い回しかもしれねーが、俺が悪い男の人だったらお前なんて――ありとあらゆる意味で――イチコロだぞ？」
「ベタな言い回しかもしれないけど、そーゆー事考える人は注意し

て人の油断を狙うよりも、必死に言いくるめようとするんだよ。経験者は語る」

「……っ、経験者!？」

俺は不意を突かれて思わず足を止めた。

彼女は半歩進んだ先で立ち止まり、悪戯な笑顔を見せて、肩をすくめた。

「ま、ジョーダンに過ぎないケド？」

長めの髪が目には掛かる。片目は隠れるほどの髪が覆いかぶさるのに、もう片方は真ん中の分け目から掻き揚げられるようになっていくのが為に、その端整な顔の半分が露になっていた。その為に目立つのだろうか、元々の美形のお陰で惹かれる者が多いのだろうか、俺にはわからない。知りたくもないし、然程興味が無かった。

「つかなんでよりにもよって俺？」

俺は彼女の隣に急ぐと、間髪置ずに、嘆息交じりの質問を投げた。彼女はそう言われて改めて俺の顔をまじまじと見始めて、思わず横っ面を向いてしまう。彼女はそんな行動に、わざとらしく、せせら笑いが混じる溜息を吐くと、

「あれ？　もしかして”特別自分が選ばれた”なんて——」

「——思ってたねえよ」

「そう？　ま、深い理由はないケド……強いてあげるなら、ストレイジファイターに対する愛が感じられてね」

言い終わると同時に、否、果たしてそれが言い終えたのだから分からねが、兎も角、彼女の言葉がそこで途切れた。そして琴巳の足

が止まる。俺もつられて立ち止まる。視界の端に、本の陳列が入り込んだ。どうやら目的地に到着したらしい。

俺は腕時計に視線を落とすと、その針は『十六時』を指していた。やれやれ、どうやら休日もこの友人に振り回されたいらしい——俺はやれやれと首を振ると、いつもの様子で楽しげに店内に入り込む彼女の後を追っていった。

——可愛らしい。俺も彼女の仕草を見習わねばならんだろう。が、アレは彼女の持ち味であるが為に、完全なコピーはいただけない。彼女の中の、自分でも使えるであろう、自分でも不自然ではなからう仕草を取り上げ自分のものにしなければならぬ。

それが、杉林瑞希に近づく最大の訓練であり、俺への試練であるのだから——。

そんなこんなで、結局自宅に到着するのは二一時を回り、そして結局、目的の品物は消失していた。骨折り損のくたびれもうけを地で行く一日であり——さらに、いつ決められたかも分からない門限を破ったという事で、父にこっぴどく叱られた。

然程厳しい家柄でもないのに……と言う愚痴もそこそこに、俺は早くも俺の命を、俺で居られる休日を、終わらせた。

——明日は学校である。

本当にこんな中途半端な決意で良いものかと考える一方で、息抜きを挟まねば生きていけぬ性分であるがために、仕方が無いと自分に言い聞かせた。

時は刻々とその身を削り——明日は今日になった。

俺はそれも気付かぬ内に、眠りについていた。すやすやと。目が覚めるかも分からぬ明日を夢見て。

最悪の出会い 一目目

入学式や簡単な委員決めの、半ドンで帰れる日を含めて学園生活は五日を経過し、そして土日の二日間の連休を経て、私は再び学園に居る。逃げる時間も機会も既に一週間前に過ぎていて、私はここに来るしか術は無かった。ここへ向かう選択肢しか見えなかった。そもそも私は逃げる理由を抱いてなかった。

今まで、この一週間を練習台にした私は、これからが本番だと、心を、身を引き締めた。

風が生温い。激しい人の往来の中、ただ棒立ちする私は学園のホームルーム棟四階、その階段付近の廊下、窓の前に居た。時刻は三時より十数分経過したであろう頃合。食事を終えた私は、一人ホームに熱中し始める流石琴巳さすがかことみを放置して自身の所用を為すべくここでとある人物を待ち合わせをしていた。

穏やかな風情で自然を感じ背景と化す私は、肩にかかる髪を後ろへ流しながら独りごちた。

「遅っせえな」

腹の中はドス黒い。しかし誰がそれを知ることが出来ようか。この表面上では平均の顔面偏差値を持ち、そこから清潔さや髪型、服装の乱れや仕草などを駆使した上でレベルが高い人間に見られ始めたこの私を、誰がこの胸中を推し量ろうか。

幸か不幸か、知り合いはそう多くは無いが、一方的に顔を知られている私である。愛想の良い面で接する私は、たとえ流石琴巳と付き合っている、特定の偏見の目で見られることは無い。その影響は、流石にまで流れているらしく、持ち前の明るさ故に、同種でない友人も多いらしかった。

「あ、杉林さんっ！」

甲高い声が九時の方向——左側から聞こえる。私はそちらへ顔を向けると、薄れ始める人ごみのなか、小さな影が俊敏に人波を避けながら迫ってきていた。その動きは酷く小動物的で、私の心を掴んで話さない。

先ほどまでの不機嫌が嘘のように、私の顔に笑顔が張り付いた。

「や、ヒカリ」

「ご、ごめんね？ 私が呼んだのに待たせちゃったみたいで……」

うるうると潤う大きな瞳。その鮮やかさたるやトンボの複眼の如し。困ったように、申し訳なさそうに潜む薄い眉を見るに、どうにも怒れなくなってしまう。まるで幼児が手伝いをしようとしてうっかり皿を割ってしまったような、

「しょうがないなあ」

理由を聞かずともそのひと言で許せてしまういとおしさ。異性としてではなく、何か別の、愛玩動物の様な存在に感じる彼女はそれからまた一度だけ謝って、隣に並んだ。

頭一つ、彼女は背が低い。その為に、隣に立たれると私は彼女の頭頂部しか見る事が出来ない。見れたとしても、視界の下の方で妙に存在を主張する、分厚い胸部パーツのみである。

だがそれもお構い無しに、私の視線を淫らに全身に這わせるままに、彼女、小和瀬光こわせひかりは本題に突入した。

「杉林さんは、もう部活決まった？」

私は首を振る。

彼女の眼は一層輝いた。

「実はね、私友達と一緒にテニス部に入ろうと思ってるんだけど、杉林さんはどうかなあって。だってだって、ほら、杉林さんって身長も高いし、運動神経もよさげだし、一年生にして期待のエースになれるかもって」

身長が高いと言っても高々五尺八寸である。女子生徒の中ではそりや高いかもしれないが……。

それに運動神経は確かに良いが、球技は、特に球を打ち返す系のスポーツは苦手である。

そればかりは彼女の誤算だろう。嬉しくもなんともない、そのままでの意味で残念な誤算であろう。

このどちらの立場を知る第三者が居れば誰だってそう思う。私もそう思う。

だが、部活に入る。それは良い発想だ。着眼点が優れている。この学園生活をより良いものにしよう、したいという努力が垣間見える。それだけで私は彼女を応援したくなる。だから私は大きく首を振った。

「私は文化系に入ろうかと。中学のとき、憧れてたんだけど文科系部活が無かったからねー」

「ああ。そうなんだ、残念。だけどまあしょうがないよね」

「うん」

「もし色良い返事だったら、このまま一緒に練習見に行こうと思ってたんだよ」

「はは、それじゃちよつと悪い事したかな？」

いやいや。彼女は冗談っぽく両手を振って、それからいくつか世間話を始める。くだらない、どこでも話されているような話題の数

々である。が、私にはその大半が分からなかった。洋服の話。ブランドの話。アイドル、有名人、芸能人、テレビ番組の話。その多くは私が恐らく関与らないであろう、”女の子らしい”話の種だった。だから必死にその会話に合わせて頷き――やがて予鈴が、校内に鳴り響く。後五分もすれば次の授業が始まるだろう。教師が教壇に立ち、挨拶もそこそこに前回の続きが開始される。私は、そして彼女は、否、この学園に所属する全ての生徒がその際に所定の位置についていなければならない。それは学園内での最低限のルールであり、常識であり、良識だった。

故に、人の行き来が激しくなった、気がした。

「それじゃ、またね」

「じゃね」

人口密度が途端に低くなる廊下。全開になる窓から入り込む風は、心なしか冷たくなった気がした。

彼女は大きく手を振ってから、私に背を向けて自分のクラスに戻っていく。足早に、何か楽しいことがあった子どものように。一方私は対して疲れたわけでもないのに、胸の奥から息を吐く。肩を落とし、三時の方向――右側を向いて、自身のクラスを目指した。

その瞬間のことである。

私が振り向いたその瞬間、大きな影が眼前に肉薄する。今まで感じられなかった、捉えようとしなかった有象無象の気配の一つが、途端に大きくなりやがった。

私は息を呑む。

時の流れが緩む。

相対的に、意識の伝達が早くなる。

大きく一歩引き、そのまま左足を外へ伸ばして迫る影を避けよう

とする。私の意識は完全にその行動の成功を未来に見た。

「うわっ——」

が、肉体がそれに応じるかどうかは、その行動を完全に思惑通りの時間内で終了させられるかどうかは別の話である。

——男の声が耳に届いた。顔が此方に向いて、どうやら私の存在を捉え、認識したらしい。そして今までふざけあって押されて私に肉薄している最中らしいこの男はそんな声を上げ、慌てたように、振り向こうと腕を振り抜いた。

低身長 of 可愛い少女ならばその鋭い肘鉄は頭上を過ぎるだろう。しかし悲しいかな、私の身長は六尺近く。男の等身とほぼ同等なのだ。

故に、鋭く。

故に、素早く。

その肘は狡猾に私の右こめかみを撃ち抜いた。

衝撃がそこを基軸に円となって周囲に広がる。まるで水面に雫が落ちて波紋が広がるように。その衝撃は瞬間、衝撃を空気中に伝えて——脳に突き刺さる。ただ頭蓋を叩き割ろうという攻撃力のみならず、その肘鉄と言う名の作用は脳を激しく揺さぶると言う反作用を起こして見せた。

途端に、私の身体は大きく揺さぶられ、背後へ大きくよろめきそうになる。が、気がつくと、振り向きかけた男はその錯乱の最中に、私の足を踏んで居た。

行動を強制的に封じられる。焦りに、不可抗力の事故に狂乱する男はさらに私に対して真正面を向こうと大きな動作で振り返り——裏拳が、この整う顔面を貫いた。

刹那、意識が跳ぶ。

鼻を叩かれた事によって冷たい痛みが脳に響いて染み渡る。思考が白く染まる。

強く踏みとどまろうとした太腿から力が抜けた。また入れ直そう

とする健気な努力を嘲笑うかのよう、その行動は機会を逃^{タイミング}していった。この身体は気がつくと既に、大きく背後へ仰け反っていたのだ。

——ノックアウト、と。ユールズ、と。流石琴巳がこの場に居たならばこの男に憤慨するよりも早くそれを口にするだろう。

私は結局、奇襲じみた連撃に耐え切れず仰け反り、そして踏ん張りきれずに倒された。背は無情すぎるほど硬い、アクリル素材が敷かれているかのような触感の廊下に叩きつけられる。視界が歪み、息が止まる。肺の中から根こそぎ空気が失われた。

それから私の身体が落ち着くまで、ついで意識が朦朧とするまで一秒足らず。小和瀬光と別れてこの状況に到るまで一分足らず。

廊下は人通りを少なくするも人は居て、そして廊下に出ているものの全てはこの惨劇を目撃していた。

「いつ、あ、あのっ、ごめん！」

半ば悲鳴じみた男の声は、どうやら私に向けられたものらしい。

しかし私は、予想以上のダメージによって、それに反応する元気を、気力を削ぎ取られていた。顔を上げると、深く頭を下げる男の奥には似たような男子生徒が二名居て、彼らは申し訳なさそうな顔で硬直するのみであった。

顔が痛い。頭が痛い。無論、物理的に。

仮に私に時を止める能力があったならば、確実に攻撃を受ける前に報復していただろう。攻撃を受けていないのだから報復というのかどうか分からぬが、少なくとも危機を与えてくれたのだから間違っっては居ないだろう、と思いたい。

「いや、気にしないで」

鼻の下を手で擦る。瞬間、鼻に激痛が走った。そしてまさかと思

い手の甲を見ると、薄れた赤い液体がまだ乾かぬ内に視界に入る。
私は鼻血を垂らしていた。

そして端と気がつく。口の中に広がる濃厚な鉄の味は一体なんなんだ？

ちょっとした吐き気が胸にこみ上げる。

脈動と同時に、頭が締め付けられるように痛んだ。

——私はふとももまでめくれ上がるスカートを元に戻して身体を起こす。ブレザーのポケットからハンカチを取り出し、鼻に当てた。まだ確認はしていないが、恐らくワイシャツにこの鮮血が滲んでいるだろう。染み抜きをしなければ後に残る。面倒だ。

目の前の男はそんな私の所作を見て、手を差し伸べた。私は構わず大きく前屈みになって床に手をつき、そこを支えにして立ち上がる。その刹那、全身から血の気が引いたように、意識が遠のきそうになる。いわゆる、眩暈という奴だ。

「ごめん！ ああ、大丈夫……ですか？」

天国から地獄と言うのはこんな事を言うのだろうか。

先ほどまでは小和瀬と会話をしてとても楽しかった。心が満たされた。今までの、そしてこれからの生活に自信を持つことが出来たし、参考にすることも出来た。さらに、単純に友人との他愛も無い会話としても笑いあえたのだ。

だというのに、僅か一分未満で肘鉄を側頭部にぶち当てられ、怯む私をそのままに裏拳を顔面に突き刺す。狡猾な手段である。至極卑劣な行動である。許すまじ。許すまじ。

だからか、それとも単純にその声が嫌いなのか、私の視線は鋭くなった。

キッと彼を睨む私は、睨むことで彼を一瞥して、

「そう見えるなら、そうなんじゃない？」

素っ気無く答えてやる。しかし、答えてやるうちはまだマシだと、私は思う。だが彼は自身を取り繕うためか、本当に私を心配しているのか、一歩近づいた。私のパーソナルスペースが侵され、社会距離から個体距離へと変動する。

数十分前に胃に落としたはずの食料が、ざわめき始めた。胃液が溢れ始めるようだった。

「保健室に行ったほうがいい。僕の過失だ。勿論付き合おうよ」

最悪な出会いから——という噂の恋愛商法は、こんな状況からでも始まるのだろうか。しかし、これはあまりにも最悪すぎではないだろうか。これならば通り魔でさえも被害者と恋に落ちる事が容易になってしまう。

無論、そんな色恋沙汰なんかは別にして、ともかく、この加害者の顔をあまり見たくは無いのだ。

適当に切られた髪は長く軽く目に掛かる程度で、目は大きすぎず、鼻は一般的、輪郭も造形も、一般的と言ったほうが早いであろうその顔を持つ男である。言ってしまったえば、どこにでもいそうな感じで、特徴がない。そんな彼は今眉を八の字に歪めて、私を保健室に誘おうとしていた。

ならば、素っ気無い態度、明らかに怒って近づくなと言う雰囲気醸しだしてもほっといてくれないのならば、逆の事をやるしかない。

そう決起して、私は落ち着いて、女の子の声を出した。

「いや、そんなに気負う事は無いわ。私がよく周りを見なかったのも悪いもの」

しかしよく周りを見ても、教室からいきなり飛び出てくる陰には

対処のしようがない。

「でも貴方も悪い。だからこれはお互い様って事で……ほら、授業も始まっちゃうし」

ここまで言えば引き下がるだろう。引き下がってくれなければ困る。恐らくもう本鈴が鳴るまで数十秒と言った所だ。静まり返った教室に戻るのには目立つ。それは回避しなければならない。さらにこの状況だ。その優先度は何よりも高くなる。

「でも……」

しかし男子生徒は食い下がる。
お願いだ。空気を読んでくれ。

「それじゃ、ね」

私の焦る心は彼の動揺を、迷いをそのままに、この肉体からだを動かした。

大股で、素早く私は男の横を通り過ぎる。その瞬間、袖を掴もうと指先が触れるのを感じたが、私は気付かぬ振りで腕を振り、回避する。

気配は遠のき、声も聞こえない。私は男から逃げ出すことに成功して、足早に教室へと向かった。

最悪な再会 一回目

「ちょっと、貴女……」

私は教室に向かう。

その最中に声を掛けられた。

顔面を見事に打ち抜かれ鮮血を垂れ流した直後の事であった。

「私、何故だろう……見たことある……貴女の事」

聞き覚えのある声。澄んだ、小鳥が囀るような静かな声音。私はこの声を、知っている……気がする。

故に背筋が凍りつく。嫌な予感が、発想が脳裏にちらついた。悪寒が走る。気がつくと顔面の痛みは既に失せていて、変わりに猛烈な吐き気が襲い掛かる。額に脂汗が浮かび始めた。

——そんな筈が無い。

そう信じたい。だがそれを裏付ける証拠はあるか？ 私の、あるいは俺の知り合いが、友人の友人が、私の、ないし俺の存在を知る者がこの学園に来ていないという絶対的な根拠は存在しない。

三学年全てを数えれば生徒総数は千に届く勢いだ。

私はそれを調べる術を持たぬし、そして誰が自身の存在を認識し認知しそして現状とのちぐはぐさを指摘できる記憶を、知識を持ち合わせているか知らない。だから私は、今という状況においては完全なる無力である。

雪山で仲間が倒れてしまったような焦りが鼓動に表される。妙な孤独感が、暗闇の中で開けた目が見る本当の闇を見出した。

私は振り向けない。振り向かない。だから、背後の少女は如実にその気配を強くする。相対的に、彼女との距離は確実に狭まった。どくん、と胸が高鳴った。あるはずのない豊満な胸を締め付ける

コルセットの所為で息苦しい。呼吸が乱れるのは、先ほどの暴行が故だろうか。この現状に焦りを、危機感を隠せぬ私の動揺がもたらすもののだろうか。私には分からない。

「……間違っていたらごめんなさい。もしかして、杉林——」

果たして彼女の言葉は、その最中で遮られる。まるで狙ったように掻き鳴り始める、本鈴の音によって。

彼女が伸ばしていた手はすぐさま引っ込められ、その気配は直ぐに遠のく。私の鼓動は安堵したように、その拍動を落ち着かせた。汗が額から頬へと流れる。肉体が弛緩する。途端に、熱い液体が鼻から滴り床に落ちた。

クリーム色の廊下に、紅い花が咲く。私はそれを素知らぬ態度で踏みにじりふき取りながら、再び教室へと向かった。

——授業も終わり、流石琴巳から受ける心配の眼差しもそこそこに、帰宅の準備に取り掛かっていた。既に帰りのショートホームルームは終えていて、クラスの中は騒々《そうぞう》とざわめいている。

カバンに必要なモノを詰めながら、琴巳の言葉を聞き流す。適当な相槌を返しながら、時折適当な話題を持ちかけながら、日常へと時間は流れる。私の心も、先ほどの腹中の喧騒を忘れてしまったように、酷く落ち着いていた。

その時の事である。

「ねえ、貴女——」

耳元で聞こえるのは、昼休みが終わる直前でこの身を引き止め、ただでさえ落ち込み加減の気分をさらに蹴落とし踏み躪りした少女

の声であつた。

私は肩を弾ませる。背後の気配が、突然敵意をむき出しにしたように、感じられた。今まで気付かなかったのに、意識し始めた途端にそうやって大きくなりやがるのだ。恐ろしい。正直言つて逃げ出したかった。

しかし――。

そう、しかし。

私の存在を、俺個人を知っていたとして、このちぐはぐを理解しているとは限らない。杉林瑞希と名を、性を偽つてこの学園に在席していると見抜ける筈が無いのだ。

先ほどの授業を二時間分使つて気分を落ち着かせ、そして冷静になった頭をフル回転させて導いた可能性^{こたえ}である。

決め付けるわけではないが、普通に考えてそうだろうと私は考えた。そして十中八九、そうだろうという確信も持てた。

故に私は、振り向けた。

勇気を持てた。

自信を掴んだ。

この上ない熱意さえも孕んでいるような気もする。誰にも負けぬ勢いさえも生み出せる。

この障害さえ越えれば、私は早くも一段階成長できるかもしれない。

だから彼女の顔を見据えながら、笑顔で、調子の良い裏声で、問うた。

「なあに？」

大きな瞳は丸っこく、特徴的な可愛らしさがある。長い前髪はそんな目の片方に軽く掛かって、隠される。小さい鼻や、整った輪郭はその所為で顔を小さく見せるようで、相対的にスタイルの良い身体は、スレンダーに見えた。

そんな彼女の姿を、私は今日初めて見た——と、言いたかった。少なくとも私の心中では振り向く前から幾度もそれを繰り返していた。

だが、私は彼女を見たことあるのだ。

そしてよりにもよって、やたらめったに瑞希^{わたし}と、そして俺と仲が良かった、共通の友人であったことを、思い出した。

杉林瑞希が死んでから、彼女は大変心配をしてくれた。だから立ち直る事が出来た。結果的には、彼女の力のお陰と見てまず間違いは無いだろう。だから少なくとも感謝はしていた。しかし何よりも俺は瑞希を進学させる事で頭が一杯になっていた。

だから、進学し、入学する頃になると、彼女の存在はすっかり頭の中から消えていたのだ。

都合の良い頭だと、私は我ながら嘆息した。

いや、正確には都合が悪い。なにせ、こういった状況の事を、一切考えてなかったからだ。考える暇が無かった。まずその事について考えようという発想が無かった。

自分が馬鹿なのか間抜けなのか気抜けなのか、分からなくなってきた。

しかし、私はまだ一つの希望を抱いている——が。

驚いた顔をする彼女を見ながら私は思った。

希望は潰えた。

「……、ちよっと、顔、貸してもらえる？」

自分をただのそっくりさんだと思ってくれればそれで良かった。

そう思ってくれるものだとばかり考えていた。信じていたのだ。彼女がその——現実をしっかり見据えている人間だと。

彼女は杉林瑞希が死んだことを知っているのだ。

だからそう考えてくれるものだとばかり考えていた。

しかし、そう来られると、私はもう何も言えない。

この容姿を、名を、これ以上偽るわけにはいかない。というか、私がこの外観で、この杉林瑞希と云う名で居る事に意味があるのだ。そして彼女にだけ名を騙るなどと言うリスクを犯すことは出来ない。そして仮に騙したところで、そこにリスクなど存在しない。

「悪いけど琴巳、先に帰ってて」

「え？ あ……うん。それじゃ、また明日ね」

「うん、また」

神妙な顔で告げる別れに、流石琴巳は珍しく真顔になって頷き、手を振った。私は背を向け教室を出、先を促す彼女の後を追う。

私は学園生活での死を覚悟した。

「——ちよつと待って、状況を整理しましょう？」

「その必要は果たしてあるのかな？ 冷静になるだけで全ては解決すると思うのだが……」

「……そうね」

廊下を歩く我々は肩で風を切っているであろう。だが私の心情は、既に息絶え絶えであった。恐怖におののいているのである。意識が既に途絶えそうなのである。足がすくみ、いつこの歩行が終えてもおかしくは無いのである。

だが私は傍らにいる彼女と同じ速度を保っている。それは、彼女に手を繋がれているが故だろう。

柔らかい、女の子らしい暖かさに手が包まれる。心地よく、安心できる筈なのに、私には彼女の顔が死神にしか見えなかった。

——どこへ行くのだろうか。階段を降り続け、一階に到着したところで私は思った。まず最初に考えるべき事であったのだ。だから代わりにとばかりに、私は昇降口に着いた瞬間にそう口にした。

「何処へ行くの？」

「その口調はやめて。それと、靴を履き替えて」
「あいよ」

そう言って手を離すので、私は言われたとおり自身の下駄箱の前に移動し、上履きを脱いで拾い上げ、その中の靴を放り出す。軽い音を立ててスニーカーは床に落ち着き、それを見ながら上履きをしまいこむ。見事に並んだ靴に足を突っ込み、入り込む踵を簡単に出すだけで靴の履き替えは終わりだ。

私はそれから昇降口を出て、その入り口前で待機する。
ほどなくして、少女は現れた。

「それで、一体どちらに？」

もはやこの少女に対して体裁を取り繕う必要はない。おそらく全てを見抜かれてしまっているのだろう。

だからそんなふざけた様子で口にして、反応を窺う。

顔を覗きこむようにして見ると――その眉間には皺が寄り、冷めた視線を返された。

「貴方きみの家で落ち着きましょう？」

「あ？　なんで……」

「話は長くなるから」

「ならん」

ひしめくが如き雑踏。その中を突っ切って校門へ向かう。その小さな行進を阻む者は誰一人として居らず、故に死の宣告は如実にその数字を小さくして行った――。

「——という訳でさあ。父さんも容認しているし、この美貌を以つてすれば誰一人としてこの俺が男だと気付けないんだ。お前一人を除いて、な」

私——この状況に於いては”俺”であるが、そんな俺はたった今、これまでの行動を全て神に懺悔するように吐露をした。

女装をするきっかけに、その目的。学園側も一部の人間はそれを知り、さらに加担してくれている事。なぜだかは、分からない事。だが今までは順調に進んでいた事。今日昼休みに顔面を殴らるという、悲しい事故があったこと。

「変わらないわよ、そのくらい」

「ああ？ 言っておくがな、俺がその気になればお前より美人だからなッ!？」

勉強机の上には教科書が並ぶ。それに付属する椅子に腰掛ける俺は、数歩離れた位置にあるベッドに腰を沈める彼女に喚いた。

陽光差し込む部屋の中、テレビをつけようとりモコンへと手を伸ばすが、反射の関係で見難くなっていることを確認して、取りやめた。

それを見ながら、彼女はいきなり本題に入る。何の心の準備もさせぬまま、その言葉は核心を突こうとしていた。

「もし、まったく事情の知らない人間にばれたら？ 学校側がよろしいと言っている、社会的に生きていけないじゃない」

「だから細心の注意を持ってだな……」

「うっかり男子トイレに入っちゃう程度の注意？ はっ、ちゃんちゃら可笑しいわ」

っていうかね、と。彼女は怒気を孕む荒い口調で続ける。

日の差し室温だけが上がりつつある中、彼女はブレザーを脱ぎ胸元のボタンを外し、俺は対照的に背筋を凍らせるように、額に汗を滲ませた。

それほどまでに彼女の迫力は絶大なもので、そもそも俺はそんな彼女を見るのは初めてであつたために、そうした悪寒にも似た感覚に襲われたのだろう。

「一番最初に見たとき、直感的に貴方きみだと理解したのは勘違いではなかつたのよね」

「……何が言いたいんだ？」

眉間に皺寄せ、大きく息を吸い込む。体温調整のための発汗が彼女の身体が熱くなっているのを教えてくれる。これが怒りのためなのだろうと理解できてしまったために、俺はヒステリックな叫び声を堪えるために目を薄くする。

露になって始めて分かる、一般よりもやや大きめだろうと思われる胸元に汗が滑り落ちる。その瞬間、声が響いた。

「貴方きみは酷く中途半端だわ。全てに於いて」

「……どこがだ？ 学園では――」

「”全てに於いて”と言つたわ。たつた今ね。貴方きみは貴方きみで居る事と、瑞希でいる事を両立しようとしている。それ故、直ぐに地が出る、出てしまう儚さを持っているの。理解わかる？」

俺は沈黙する。

彼女は嘆息した。

「三年間、と言つたわね？ 学園に瑞希の名を、存在を、そこに居たという事実を刻むために学園生活全てを奉げるって……？」

「……ああ」

「体育はどうするの？ 夏になれば水泳もある。着替えは？ 進級すれば修学旅行だってあるの、知ってる？ それ以外に日常でのハプニングが貴方^{きみ}に襲い掛かるわね。その全てが障害になって、その全てを完璧に回避しなければ、どれもが致命傷になってしまう」

俺はその全てを回避できるか？ その自信は？

仮に失敗してしまったら。ボロを出して疑いを持たれたら。そして――俺が男性だと知られてしまったら？

「どうするの？」

どうにも出来ない。俺に為すすべなど、とうに存在しないのだ。誰も守ってくれないし、誰もが認知してくれるはずがない。俺が安心して杉林瑞希として、学園生活を送れるわけがない。

父さんが、教師が、友人が、そしてこの彼女が許してくれたとしても、その戦力は頼りなさ過ぎる。有象無象の大衆を相手にするとなれば、殆ど無いに等しいのだ。

その場を解決するだけではすまない。誰一人として残さずに納得させなければならぬ。

噂は一人歩きする。たった一人の疑念で更なる何かが勃発する。そしてそれは確実に俺を死に至らしめる。

しかし、後戻りなど、とうに出来ぬ位置にいるのだ。

「どうにかする。それしかねえだろ……」

理想としては何も起こらない事だ。が、今既に彼女に見つかっているという事を考えると、その願いは酷く淡いものになってしまうだろう。

俺は顔をしかめて、垂れる汗を顎から滴らせた。未だ脱いでいない、オーバーニーの上に落ちる水滴は、その上で少しばかり溜まっ

てから、その身を消した。ただ濡れた後だけを残して、俺はそれを指先で擦って馴染ませた。

彼女は割合に大きい態度で足を組み、背後に手をついてまた、幾度目かになる溜息を吐いた。

「もうここまで来ちゃったんだから私が責める事に意味はないわね……なら」

彼女は上半身を勢い良く屈めると、そのまま立ち上がる。僅か数歩にじり寄る様に近づくと、彼女を見上げる俺に向かって、手を差し伸べた。

俺にはまるで蜘蛛の糸が如き希望に見えてしまうのが悲しいところだ。

それほどまでに、俺には支えが無かったのだと、ようやく知った。学園生活が始まって一週間余りが経過した、この瞬間の事である。

恐らく彼女から見たら、俺が女装していることよりも何よりも、その無防備さに腹が立ったのだろう。そう考えると、何故だか悪い事をしたような気になってきた。

「中学三年の付き合いがあるこの『栗田栗子』あわたりんこが、協力してあげようじゃない」

そんな事の思考中に、頭の上の方から、だがそんな高くは無いい位置の、俺の視線の向こう側から得意気な声が降りかかる。その見下す視線は、どこか挑発的だった。

ここで手を払ったらどうなるのだろうか。そんな不謹慎な事を考えてしまう俺は天邪鬼なのだろうか。無論、半歩分しかない崖の道を命綱無しで渡ろうとする登山初心者が如き危うさを持つ俺である。その、恐らく救いであろう手のひらを、女の子ならではの、酷く柔らかい、暖かい、包容力のあるソレを、掴まぬ理由わけがない。

俺は彼女の、栗子の真似をしてわざとらしい嘆息を後にして、立ち上がる。

瞬く間に栗子の頭は、俺の目線の下に移動して、そのままかまわず、手を差し返す。反射的に手は握られ、果たして俺は栗田栗子との協力関係を結ぶ事に成功した。が――。

――この彼女の登場が、杉林^{おれ}瑞希の学園生活を良くも悪くも揺るがすことになる事になる。

最悪の出会い 二日目

「いよいよ始まる、貴方との学園生活。再会したあの人は、やっぱり優しくとつても器が小さな人でした。そんな貴方に、私はなんとかしてあげたい」

ガタンゴトンと揺れる電車の中は割合に空いていた。最も、いつの日かより一本早い電車である。空いていなければ割に合わないし、早くした意味もないし、そもそも私個人としてはその電車を一本分早くする意味はなかった。

私はふとももを力強くつねる傍らの少女、栗田^{あわたりんこ}栗子へとそう告げて見せると、彼女は不満げに指先の力を強くした。しかし正直な心情を告げた私には既に一片の悔いさえも残っていない。だから、お返しに、その短いスカートの裾から伸びる長く白く、ほどよく肉々しい太腿を、ぱちんと力強く叩いてやった。

リンコは短い悲鳴を後に、私を睨む。

「なあにソレ、私に対する当て付けか何か？」

「はっ、べっつにイ？」

「あ、アンタねえ、疑問文に疑問文で——」

別に私個人が彼女を憎んでいるわけでも、嫌っているわけでもない。むしろ、彼女が普通に、最低限一般的に対応をしてくれれば好意的に返してやるのだ。彼女がここにいただけで、少なくとも私は救われている。それに一年前、自暴自棄になる私に付き添ってくれた恩もある。それを返したいとは思うのだが……。

彼女は何が気に食わないのか、再会してから常に頭上に立つ様に言葉を吐く。

彼女は何が嫌なのか、私の顔を見る度に深い溜息を吐く。

私は何かなんだか分からぬままに、ただそれを完全受動態勢で受け止め、そして不快感を得て、その時の感情を根底に置く行動に出る。

その結果が、この現状であった。

「つて、そう言えば今気になったんだけどさ」
「ん？ 何よ」

彼女は自身の言葉を半ばで区切ると、思いついたように口走った。先ほどの憎悪に満ちた視線はどこへやら、その顔はその素直さや純真さに満ちていて、思わず私は気を削がれた。

だから相槌を打つ。

彼女は促されたように言葉を続けた。

「瑞希になって、異性と接触する事ができるようになった訳じゃない。そのせいで、性的興奮とか起きないの？」

「——なっ、おまつ……、リンコって失礼よね。女の子にそんな事聞く？ 普通……」

ははは、とにこやかに笑いながら、

「今はそれどころじゃないから」

とだけ返答しておいた。

——そんな話を話していると、電車はやがて目的地に停まる。私たちは膝の上に乗せるバッグをそれぞれ手に持ち肩に掛け、やがて駅を後にした。

——リンコとは中学三年間の付き合いである。が、一年前から今

まで殆ど付き合いが無かった。連絡の取り合いもしなければ、ただの挨拶すら交わさぬ程関係は薄れていたのだ。一方的に、であるのだが。

彼女はその間、執拗に私に付きまとった。それは、杉林瑞希を亡くした私に対する心配であったのだろう。今思えば確かにそうであっただろうと考えられたし、彼女がいなければ私が今こうしてこの場に居ることは無かっただろうと思えた。

だというのに、再会してから今まで、最も今日で再会二日目であるのだが――特に思い出話に浸るわけでもなく、だが事務的と言う事も無く、されど仲の良い友人という関係も持たずに、微妙な距離感を保っていた。

気まずいという所が本心だ。やはり一人でいたほうが気楽なのではないか？ と私の心情は再会時より冷め始めていた。

しかし――そんな関係を、また今まで通りに戻してくれる出来事が、この日に起こったのだ。

思い返しても、そしてその事態に直面した時も、心に思う事は「最悪だ」のひと言に尽きる。

それはまたしても、新たな出会いからだった。

「――まったく、アンタは私がなんでこの学園に来たか知らないからそんな気楽に出来るのよ」

「ここに来た理由って、頭の程度の問題でしょ？」

笑いながら返すと、何故だかわき腹を小突かれた。割と偏差値が高いという所を取った誉め言葉のはずだったのだが……。

駅から十数分歩くとやがて見えるのが学園だ。商店街を抜け、そして住宅街を突っ切るとその突き当たりに存在するソレである。殆ど一本道であるが為に迷うことは無く、さらに進めば進むほど、同じ学園の制服を着た生徒の姿が増えてくる。

周囲は登校する生徒でざわめき、有象無象の一部と化し私たちは

雑談に、とかどことなく皮肉を孕む会話の応酬に花を咲かす。最早私が男であることに気づくものはいない。超絶美少女としか捉えられぬが故に、私は女の子として正当な扱いを受けているのだ――と。調子付いて、不覚にもそれを意味する言葉を口にした。一拍置いて、言葉は空気を、私の心を震わせた。

「……それは、その……本気で言ってる？ 超絶なんとかって」

轢かれた小動物を見るような目は、確かに私を捉えていた。

そして彼女は酷く冷静に、なんの皮肉も深い意味合いも込めずに、淡々と、冷酷にと、台詞を紡いだ。

「アンタはどっちかというと、男前って感じだね。少なくとも女顔ではない、かな」

だから私が直ぐにアンタが杉林瑞希ではないと気付けた。彼女は最後にそう付け加えた。

――私は思わず、足を止める。衝撃が心臓を打ち抜いたように、妙な拍動は整わず、鼓動は乱れた。汗が額に滲む。喉が渴き、肌が枯れたような感覚がした。

「お、女には見えないの？」

恐る恐る尋ねる私の声は震えてしまう。恐怖に揺らされ、喉は小刻みに震えていた。

――男前だと？ 冗談ではない。今まで少なくとも杉林瑞希の面影があるという体で過ごしてきたのだ。そして鏡を見て、完璧だと思っていた。だというのに男前？ 女で男前って誉めてるの？

「いや、言うなれば王子様系ってやつかな」

「ああ、宝塚？」

「それをソフトにした感じ」

そんな返答に安心したような、がっかりしたような。

少なくとも、最低限女の子には見えていて、さらに元々の――自称――美形が後押ししているらしく、どうやら今の私は私が持ち得る要素を最大限に生かしているらしい。これで男らしいことを女の子らしくしてみせればファンクラブが出来るだろうな――と考えていると、私たちは学園に到着した。

――それから校舎に入り、靴を履き替え、階段を上り、それぞれのクラスへと向かう。

私は廊下突き当りのFクラス。彼女はその手前にあるCクラス。そしてそのCクラスは丁度、昨日顔面衝突事故を巻き起こした男子生徒が飛び出してきた場所だった。

思い出して、身震いする。リンコは不思議そうに私を見てから、手を振って教室の中へと姿を消していった。

悪夢が蘇る。

また視界の隅から不意に影が肉薄し、通り魔よろしくこの顔面を打ち抜き上っ面の言葉で静かに謝罪する。そんな、思い返せばハラワタが煮えくり返る出来事が脳裏に過ぎる。そして記憶が蘇ると同時に、鼻筋がジリジリと痛んだ。

――が、意外にもここをノータッチで無事スルー。最も、普通に考えれば当たり前のことだった。

「――ねー、杉林さん？」

急ぎ足で教室へ向かい、席に着く。カバンを机の上において、中から荷物を取り出し、カバンを机の横に掛けて一旦落ち着く。その直後に声が掛けられた。

「私ね、見ちゃったんスよ！」

私は少なくとも悪魔の声を聞いたことはないが、恐らく実際はこんな明るさで絶望を囁いてくれるんだろうなあと、停止しかける頭で考えた。

そんな私に構わず、短く切りそろえられたサラサラな黒髪を乱舞するようにランデブー。やがて私の机の前に立つと、その瞳を輝かせて自身の言葉を次いだ。

「その顔面を打ち抜かれ強制的に麻痺する肉体は、引きずる様にあるが動き、立ち上がり、されどその事故の要因に怒りするわけではなく、爽やかな、そして惹かれる笑顔だけを残して退陣——何これマジ？　って思ったけどこれは現実だったんスね！」

「……何の話だか、私には」

白々しく言ってみるも、彼女は聞く耳持たず、机に手をつけて息が掛かるほど顔を近づけた。興奮の程は酷く、私は仰け反ると、彼女はそれに応じるようにさらに肉薄した。

彼女は八方美人と言うわけではないが、この短期間で多くの友人関係を持ち、されど敵を作らぬ人間である。そしてそうなった理由が良くわかるような人当たりのよさと、適度な引き際を心得ているらしい。そういった所は本心から見習いたいと思うし、常日頃の言動から若干周囲から引かれて^{さすがこども}いる流石琴已にも変わらず接しているのは本当に、人間としてそんな正確が羨ましいのだが……。

今、この現状を見て、私の彼女に対する印象は著しく変化した。

「もう一目見たときから”格好良い”と思ってたけど、私もっと、杉林さんの事知りたいッス！」

彼女の眼は異様な輝きを持っていた。私の顔色は相対的に暗くな

っているような気がした。

好かれているのか？ 尊敬、と言うならば多分、小和瀬光こわせひかりがそうであるが、この少女はそうでない気がする。ならば前者が正しいのだろうか。だとしても、良い意味での関係が築かれようとしても、あまりこれは喜ばしくない。嬉しくはあるのだが、何か、嫌な予感が膨れ始めている気がする。

「ははっ、冗談でしょう？」

笑いは引き攣り、声は掠れた。無意識の内に、私の腰は椅子から浮かび上がっていた。

こんな状況はどう切り抜ける？ 交友関係を結んだほうが良いのだろうか。だが、共通の趣味も持たず、且つ干渉が割合に強そうな彼女相手ではボロがボロボロに出てしまう。そんな自信に満ち溢れそうだ。

相談——するか？

癪だが、彼女に……唯一この正体を知り理解が有り、仲はそれほど良くは無い、あのリンクに。

「冗談なんて言わないツスよお」

押しは強い。行動は早く関係を結ぶべくその手は差し伸べられた。この手を避けるか？ 私にそれが出来るのか？

——無理だ。出来るわけが無い。

答えは反射的に浮かび上がる。

ならば逃げるか？ 可能か？ この状況で、私が見事にそれを成功させる事が。一体私にどれだけの運が味方しているのだろうかと考えても、どれだけの人間が背を押してくれようとも、私はそれが一つの可能性として存在しているとは、とても思わなかった。

つまり、私は最初から彼女のこの手を弾く事など考えておらず、

それをしようとすら考えていなかった。故に、気がつくところの右手は――彼女の手を、力強く握っていた。

こうして私は半ば強制的に、殆ど受動的に友好関係を広めて――。

「――ほら、居るっスよね？ 達川クン。もう調べはちゃっちゃとついでるんスからねー」

昼休みにもなると、彼女は強引に私の手を引いてCクラス……栗^あ田^{わたりんこ}栗子が在席する教室へと向かう。その間彼女は意気揚々と、肩で風きり廊下を歩き、そしてLサイズの態度で口を利いた。彼女の要求を吞まざるを得ない少女は顔から血の気を引かせて、教室の中へ姿を消した。

「ちよつ、誰だ……よ、そのタチカワ君って」

多分アイツだ。昨日の、この整った顔立ちに鋭く武骨な拳を喰らわせ察そうとその場を後にした男――事実とは異なるが、未知に恐怖せざるを得ないという本能から、あの経験をどのくらい大きくなつたかも分からぬくらい、肥大化させていた。

だから此処で再び接触し、この、本来あるべきではない無駄な警戒と恐怖を解くのは今後の事を考えるに正解だと思われた。のだが……。

「なアにを言っているっスか、達川は昨日の彼っスよ。調べました」
「行動的だね」

やはり意を決して行動に起こすまでに時間が掛かる。勇気が必要。だから私は無駄な抵抗と知りながらも、がっちり腕を掴む彼女の手を、自分が在席する教室のある方向へと引っ張った。必死になつて引くが、だが全力を出せるわけも無く仕方無しに女の子らしい

腕力を想像して力を尽くしては見るのだが、彼女は動く気配を見せなかった。

なんだかそんな行動の虚しさと、何故だか沸きあがってくる恐怖感が心の中で溢れて、どうしようもない焦燥が胸を焼き、眼の奥から熱がこみ上げてくる感覚を覚えた。

その中で、ふと此方をじっと見ている影が見えて――それが流石琴巳だと、そして何故だか仲が良さそうに並ぶ栗田栗子だと気付くのは、彼女が何かの合図のように私をその身と共に教室内へと引きずりこんだ後だった。

彼女はカツカツと踵を鳴らし、大股で男――目を見開いてド肝を抜かれたような顔でこちらを見る達川へと迫る。どこそこなく注目されているようで、そして私の姿を確認すると共に始まる囁き合戦がかすかに耳に届いて、この頬が朱色に染まりあがるのを感じた。

普通に恥ずかしい。もうすこし、こう言う事はこっそりやるべきなのではないだろうか。一方では何を勘違いしたのか、愛の告白をしに来たとかなんとか言い合っている声も聞こえる。

やはり選択をミスったか。ならば逃げよう。逃げて見せよう。国境線を越えてやろう。

そう考えたときには既に、彼女の足は止まっていた。

そこは教室の中心に限り無く近い場所だった。

机を三つ合神させて友人と思わしき男性二人と、今正に昼食を取ろうとしていた彼はこちらを見て硬直する。友人らしき二人は笑顔を引き攣らせて顔を見合わせ、内一人が恐る恐る口を開いた。

「ははっ、おい入学初っ端っからモテモテじゃんか達川」

「おい笑いごっちゃねーんスよ」

男はにへらと軽く笑い場の雰囲気解して見せようとするが、そんな彼女の一瞥と共に放たれた凄みが彼の顔を硬直させ、心を凍りつかせた。途端に周囲のざわめきは失せて――空間は静寂に包まれ

た。

「達川さん？ 女の子に、下手をすれば跡が残るかもしれない顔に、痛烈な一撃を無差別にブン投げて、その場だけの謝罪で済むと思つてんでスカ？ もう怒りはサブタンク満タンなんスよ！」

一人で勝手に興奮^{ヒートアップ}し、やがてその妙なテンションも絶頂を迎えるだろう。私は彼女を、否、この空間を傍目に見て冷めた視線を送ってみるも、青筋を浮かべる勢いで、だがその口調ゆえに大した恐怖も与える事も出来ずに喚く彼女は、いくらか捲くし立てた後、私を達川との前に突き出した。

「謝るっスよ。女の子の身体と心は傷つき易いんスから」

手を引かれ背を押され、私と彼は再び対面した。故に、私の胸は高鳴った。無論、恋のドキドキではなく本能から来る恐怖のバクバクだ。

相変わらず決して清潔とはいいがたい長めの髪は目に掛かり、間抜けに開かれたままの口は異性として判断するにマイナス評価に値する。が、悲しいかな、彼は同性なのだ。どちらかというと男に乱暴された、というよりは不良に絡まれたような悪寒が走っている。

だが彼自身も、今正に彼女に説き伏せられ、あの時の肘鉄が、裏拳がどれほどまで凶器となってしまったのか思い知り、そして悔やんでいるように見えて――この展開では誰もが無駄に気まずく過ごせるステキでバッドな時間が流れることは必須だった。

何よりも、当事者のみならずこの空間内に居る全ての人間を巻き込んでいる事が、全てにおいて間違いなのだ。

それに気付かぬは、この事態を引き起こした、今回の当事者ばかり。彼女に悪気は無いのだが、性格ゆえにそれが正しいと信じぬく確信犯。その為に、彼女を責め切れないのが、悲しいところだった。

純粹なのか確信的なのかその真実の程はまだ分からないが、私は前者だと信じたかった。

「……う、うう」

男——達川は困惑し何を口にしたか良いのか分からずただ唸った。私は何をどう待てばよいのかわからず、ただ立ち尽くす。彼女はただ腰に手を当て偉そうにその場を見守る。故に、時は俄かに停止したように全ては静止状態にあった。

——何も始まらず、継続するのはこの硬直だけ。故に終わらず、故に動けず。

その中で、仕方がない、という意味を孕んでいるであろう溜息が空気を震わせる。私は首筋にそれを感じ、顔を横に向けて、横目でちらりと背後を窺うと、どこか嬉しそうな笑みを浮かべる少女は、まるで自分を見てくれることを予想していたように、私へと視線を向けていた。

そして視線が交差する。彼女は爽やかに、首を傾げるように笑みを投げて、気がつくと思ひる手は肩を叩いていた。

私はそれで改めて振り返ると、彼女はダメだと言わんばかりに首を振る。しかし、私は彼女が何を言いたいのか分かるはずもなく、また分かりたくも無いから、曖昧な笑顔を返した。すると彼女は私の肩を引いて、入れ替わり立ち代る。

そして頼もしい背を見せ、誇らし気に胸を張って、

「手も足も出ないっすか？」

「……え、ええ。まあ」

達川は何か得体の知れぬ敗北感を感じたように肩を落とす、俯いた。

——そもそも、今回のことはあの場で全てが終わったはずなのだ

が、などと考えさらに彼女を説得するべく口を開こうとする暇もなく、そしてそうしようと決意した途端に、展開は進展を見せる。

そして私の肩に触れたその手は、今度は彼の、達川の肩をぽんぽんと二度ばかり、励ますように叩いて、彼女は嬉しそうににんまりと笑った。

「なら思い知ったっすよね、達川さん？ 今回の事は――あー、杉

林さん、どうするっスか？」

「もう全部許した」

「――全て水に流すので、後は常識の範囲内で行動してください」

「わ――わかりました……」

では。

彼女はそう言って、再び私の手を引いてその場を後にした。辺りに迷惑を掛けたという自覚が無いために何の謝罪も無く、そして全てが正しいと感じるが為にその顔にはどこか満ち足りたような表情が潜んでいた。

――最悪だ。なにもかも。もう取り返しのつかないことになってしまったような気がする。そして今回のことで、彼女の一般的な評価を著しく低下させてしまったような予感がした。

私のせいかな？ 否、彼女が勝手に勘違いして思い上がって興奮して行動に出ただけなのだ。だが――。

何か突っ掛かる。私がやったわけではないのに、事の中には私が居るのだ。私が問題ではないのに、中心核が私でなければ今回のことは展開されないのだ。だからこそ、胸糞悪い。まるで全ての責任を強制的に背負わされた気分だ。

恐らくあの教室内で何が起こったのか、正確に説明できるものはそう多くは無いだろう。だからこそ、無駄な噂が広がってしまう。入室した際に、場違いすぎる勘違いを噂として口にした者が居るように。

……最悪だ。

私は大きく溜息を吐いた。教室を後にし、様々な生徒が注目する中を突っ切るその中で。

——私を純粹に慕い小動物のような可愛さを持つが——どこか、根本的な部分が黒そうな小和瀬光。こわせひかり

友人の中で一番気安く接することが出来るがつかみ所が無い流石さすが琴巳。ことみ

私の正体を知りそして協力関係を結んだ旧友、栗田栗子。あわたりんこ

そして今日、また新たに友人となった、”小鳩明子”。こはるあきこ

この一週間で、そう多くは無いが、妙に凝縮されたような友人を手に入れた。これは大きな収穫といえるのだろうか？

だがそのせいで私は無駄な問題を抱えてしまう羽目になりそうだが、やはり、私が私である限り、この状況に導いたのはどうであれ私自身なのだから、状況を変えるにも甘んじるにも、私が選択、決断しなければならぬのだ。

頑張るしかない。やるしかない。決めるしかない。

私は彼女、小鳩に手を引かれながら、そう考えた。

頑張るぞと——腹を決めた矢先に、授業開始五分前を告げる予鈴が校舎内に鳴り響いた。

これでは昼食を摂る暇もない。時間がない。急ぐ余裕も存在しない。諦めるしか、ない。私はまた、大きく息を吐いた。

「ま、頑張って」

落胆するように肩を落とす私の耳元で、すれ違いに言葉が囁かれた。聞き覚えのあるそれは間違いなくリンコだろうと、私は振り向かぬままでも理解できた。

そんな声に、ささやかであるが少し励まされたような気がして、ふん、と一つ息をつく。

——そんな、新たに構成され安定してくれるであろう日常を願っ

て、私は自身が在席するクラスへと、手を引かれながら向かった。

入部

「杉林さんって身長高いよねえ、どのくらいあるの？」

「え？ まあ、なんと言いますか……」

そこまで興味有り気に見えないが、聞かれたからには答えてあげねばならぬだろう。妙に隠すことではないのだが、だからといって大袈裟に振り撒く情報でもない。殊女子に於いては——最も私個人の考えであるが、身長が高いのは困り者なのだ。

否、正確に言うなれば、似合えばいい。凛々しく、格好よければ良い。だが明らかに”かわいい”系統の顔造りなのに身長が一七〇センチとかだともう——意外とありかもしれない。想像してみると案外そのギャップが良い。だが基本的には、ちっちゃい方が個人的に好きである。断言してもよかった。

だから私は、傍らの名も知らぬ少女の耳元でその情報を囁いた。吐息が耳にかかるらしく、彼女はくすぐったそうに身をよじる。が、間も無く彼女は驚いて身を引くと、嘗め回すように私の全身を視線で往来させ、その顔に輝かんばかりの笑顔を満たせていた。

「大っきいねえ、バスケとかやらないの？」

「スポーツは苦手です」

「なーる、だから”文化部”に来たんだね？」

「ええ」

——時は放課後。昨日の好き放題にされた出来事から一日と少しが経過した頃。

私はホームルーム棟を一回り小さくしたような校舎、一般的に文化部棟と呼ばれる、文化部に与えられた部室棟の一室に来ていた。目的は無論、

「入部資格は特にないと聞いたのですが」

にこやかに笑う少女は、私の身長に注目しただけあって、その背丈はそれほどまで高くは無い。具体的に表現するならば、その頭頂が私の肩半ばで終わっているというところだろう。

そんな少女は胸のタイを真赤に染めて、学園での第三学年だということを主張していた。胸は無く、すらりとした身体はだからといって幼児体形ではないらしく、といっても、ぱっと見て分かるのは安産型というところだけなのだが。

大きな瞳は琥珀色に染まりあがり、見つめれば吸い込まれてしまうような魅力があった。小さな頭は私が両手で挟み込めば瞬く間に割れたスイカのような惨状を引き起こせそうな儚さがあった。つまりはとても——可愛らしかったのだ。

だから私はソレを口にした。

途端に部室内に居るその他部員は怪訝な顔を、視線を私に投げる。しかし部長を名乗る彼女だけは引き攣った笑顔を保っていた。

「許可降ろさなくてもいいかな？」

「ちょ、冗談ですって！ 止めてくださいよこんなくだらな洒落で入部できなくなったとか」

私が入部志願したここはつい先年まで同好会として、経費削減の為に今にも潰されそうな人数しか居なかったのだが、今回の入部者多数のお陰で部活動に成り上がった場所だ。かつ、私の趣味を適度に押さえ、わたしはココに居ていいんだ、と思わせるような部活動だった。

だから私は志望した。

「ごめんね？」

「ま、マジッスか？」

一度部内全員をドン引かせたのがいけなかったらしい。しかしたった一度の事だ。そこくらいは広い心で許してくれてもいいものなのだ。

が、彼女は困った笑顔で入部届けを付き返した。
だから私は失望した。

——大人しく退室した私を待ち受けていたのは、今回の入部大作戦に付き合ってくれている栗田栗子だった。

彼女は彼女でテニス部に入りたいなどとはざいていたので、その見せパンツならぬアンダーウェアで発情期の男をホイホイ誘って青春を満喫するのだろうこの糞売女と勢いづいてほえ面を掻いて見せると、彼女は往來の、可哀想なモノを見る面で私を眺めていた。

そして次いで、私の心情を見事に察した彼女は、アンタ一人だけだと不安だから、とわざとらしい理由をつけて一先ず私の部活探しを手伝ってくれる事を約束してくれたのだ。やはり旧友は偉い。なによりもこういったところが、話が早くて済む。

学園で知り合った人間ならば、まず始めに私の言動でケンカになつて無駄に時間を過ごしてしまうだろう。いや、そもそもそんな大胆な発言をすることになるまで私の心は緩やかになっては居ない筈だ。

リンコは肩を落とす私を見て一つ、この愚図が、といった意味の言葉を独りごち、手にした部活動一覧表に視線を落とした。

「イラスト研究会もダメ……っ」と

彼女はしなやかな指で持つボールペンを見事にさばき、部活動名に横線を引く。私はなんだか追い討ちを掛けられたような気がして、自然に溜息が漏れた。

リンコはその吐息を聞いて再び顔を上げると、今度は呆れた、というような顔で肩をすくめた。

「そもそもね、私から言わせればアンタの女装それなんて仮装と同義な訳よ。なのになんでこういった扱いなのか、私には不思議でならない」

「そりゃ本来を知ってりゃあね。だけど、なんにも知らない人間が見りゃ完璧なわけよ」

「まあ、私は殆ど昔のアンタの姿を見てるような感じだしね」

「つか、んな事いいから、次」

適度に口調を崩しての返答。彼女はハイハイと面倒そうに手を振ると、部活動名の羅列を指先でなぞる様にして横線の掛かっている文化部を探す。今日から始めた部活めぐりは、だがこの時点で既に二桁に達する数を背にしていた。その多くは名前と、出回っている情報からの消去法で、実際に入部を希望したのはこの”イラスト研究会”の一つだけだった。

だがそれがダメだったのだ。

残るはまだ名前のチェックすらしていない、殆ど期待薄な部活だろう。下手をすれば部活動を諦めなければなくなる。しかし、一度はこういった部活に入ってみたかった——と、杉林瑞希は言っていた。

——”俺”の影響を受けてこちらの方面にも興味を持ってそれなりに知識を付けていた時期があったのだ。その頃彼女は確かバレーボール部に所属していて、俺はバスケット部だった。本当は文化部系に入りたかったのだが、そもそも通っていた中学には文化部なんて存在していなかった。

田舎な事もあったし、在席生徒数の数が一〇〇人ちょっとな事が主な理由だったのだろう。

リンコが協力してくれたのは、そういった背景もあったお陰だと、

私は考えていた。

「次——ねえ。次は……この中でめばしいものと言ったらコレ、かなあ？」

リンコは促されてA4サイズの紙を流し見て、そして適当に私が気に入るようなものを探してくれる。彼女はそれで、これが本当に正しいものなのか判断に困って、聞いてきた。

私は覗き込むように、彼女が指差すソレを見て——暫し思案の後、私は静かに頷いた。

文化部棟の廊下は酷く殺風景で、締め切られた教室の扉の奥からは染しげな声が漏れ出す。しかし廊下の窓からは自然満載の景色が赤く染まりあがっていて、時間的に、この訪問が今日最後であろうと思われた。

だがどちらにせよ、今日が最初で最後というわけでもないのだが——などと考えながら、リンコと談笑しつつ、文化部棟最上階の最奥の教室へと向かったのである。

——たどり着いたその奥地は、近くに空き教室ばかりが目立つ、二階廊下の行き止まりの教室だった。ネームプレートにはただ”架空人生共有会”とだけ書かれており、それだけでは一体何を目的として活動しているか不明すぎて不気味なものだった。

そもそもここはまだ部活動として認められていない同好会で、人数はその数五。あと一人で正式に部活としての地位を持ち、生徒会から部費を得られる——が、こんな活動では、得た部費を何に使うか分かったものではない。そう直感的に感じるほど奇妙な名前だった。

緊張する。このスライドドアをノックしていいものだろうか、今更になって躊躇った。

縦に切り抜かれる長方形ののぞき窓すらも見れない。不可解な名

前だけが頭に残って、奇妙な恐怖が五臓六腑に染み渡る。身体が硬直し、指先から感覚が失せたような気がした。

相手だって人間だ。さらに学生で、その上この学園の生徒である。何を恐れる事がある。体育系部活動ならまだしもここは文化部だ。暴力の権化である不良はいない。いるのは、居たとしても奇人だけだ。そして居たならば逃げればいい。それだけじゃあないか。

だけど私の腕は動かない。

からだ肉体はいつでも正直だ。

——扉の向こうには複数の気配。それを感じて、胸はどきりと疼いた。

「やっぱここは止めておこう。初めの印象が大事なのに個人的には最悪——」

コンコンと、言いかける中で突如視界の端から現れた影がドアをノックする。反則過ぎる不意の行動に私は呆気にとられてリンコを睨む事も遅れた制止をすることも忘れて硬直する。と、間髪おかずに返事が返ってきた。

こもるその声は、どこことなく女性のものらしいだと、聞いて思った。

「さ、行ってきなさい」

リンコが待ちくたびれたような声で背を押すので、私はいよいよ決意を固め、腹を決めた。

怯えるように震える手はまるで他人の物のように勝手に動く。だが私の頭のどこかでこの腕を動かしている感覚はあって、結局自分はまだ嫌なモノから目を背けようとしているだけなのだと理解した。

そう認識した瞬間から、全ての感覚が自分の中に収まり始める。失せた感覚はしっかりと存在し、指先が触れるドアの取っ手は、確

かに冷たいと感じる事が出来る。だが正直嫌なモノは嫌なのだ。

そう考える隙に、私はドアを開けた。ガラガラと、いつもと何も変わらぬ音を日常的に鳴らして、やがて私と中の教室とを隔てる扉は消え失せる。廊下と教室は空間的に繋がる事になり、ノックからこちらへ注目していたであろう中の人間は、私の予想を裏切る事無くこちらを見ていた。

「あ、あのオ」

「中へどうぞ。そしてこちらへ」

扉の正面からやや離れた位置に立っていた少女の胸元に結ばれるタイは恐らく赤い色だろう。ならば恐らく彼女は三年生なのだ。

長い髪は下ろされて顔の半分を隠し、そして横を向いて教室の中心へと促す際に見えたのは、臀部に届かんとしている長い髪だった。いずれもその色は黄金こがねであったが、その美しさは窓から漏れる夕日のせいで良く分からなかった。

一歩中に入り込むと、一般的な広さの教室のその中心に、長机が二つ対面するように並べられているが、その席に着くものは誰一人としていなかった。彼女は手前ではなく向こう側の机の、その真ん中辺りに腰を落とす。そして私に、自身の正面を手で指し促した。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

先ほど感じた恐怖とはまた違う奇妙さが、今胸に抱かれた。恐れはもうない。極端すぎる判断はもう失せた。私の心には少しばかりの安堵が許されていて、故に許される限りいっぱいの安心を抱きしめる。

小さい溜息を最後に、私はようやく席に着いた。

「この棟をうろちろしている人間が居ると聞いておおよその想像は付いている。出さない、入部届けを」

「いや、ちょっと——先に質問、いいですかね？」

「……？ まあ、その権利は十分にあるわね」

彼女は眉を潜める。私は心外だと心の中で叫びながら、気になっていた事を口にした。

まず初めに、一体どんな事を主体において活動をしているのか。

次に、何年生が何人ずつ在席しているのか。

さらに活動日、活動時間。顧問は存在するのか。部長は貴方で間違いないのか。入部資格など等。

聞いておけばある程度の警戒を解けるくらいの質問を投げると、彼女は一つ一つ、丁寧な、だが僅かな間も置かずに応答を開始する。

「どんな活動か？ と言われれば、まあ『架空人生』、つまり個々が妄想するもう一人の自分の人生を話し合ったり、物語にしてみたり、設定だけを書き綴って見たりする事が主な活動と言える。最ももう一人の自分といってもそれがこの時代の、この世界の自分とは限らない。同じ次元に住む自分とは違う自分でもいいし、異世界があったとしたらの自分でもいい。それは個人の趣味だし嗜好だ。そして最終目標としては、部を引退するまでにその”架空の自分になりきってみる事”だ。こんな事が出来るのは、こんな事が許されるのは私たちが子どもとして扱われるまでの間だけだと、私は考えている」

酷く淡々と説明する彼女であるが、妙な熱意が胸を突き刺した。何も感じなかった、といえは嘘になるだろうソレを、だけど私はひた隠し、頷いて次を促した。彼女は首肯し、ただ口を開ける。

「三年が私、さらにもう一人居る。並びは部長、副部長だ。次いで

二年が三人。残念ながら新入生が来て一週間経つが、まだ一人も入部はおろか見学にすら来ていない」

さらに、と彼女は一つ息をおいて、

「活動日は特に決まっていらないが、暗黙の了解として火、木の一六時から一八時までの二時間を原則としている。最も用事があれば欠席しても構わないし、最初から卒業するまで来なくても特に処分は決めていない。資格といっても特には無いが……話か、文章に達者ならこの部では重宝するだろう。顧問は同好会（ここうかい）を作る際、担任の教員になってもらった。君には、今の教頭だといえば分かりやすいだろう」

「なるほど。それと——小説として綴っている人も居るって事ですか？」

「ああ。文芸部より気が楽だ、という理由で在席（い）する者も居る。だが基本的に私はよくわからないので良し悪しには口は出せないが」

「役者みたいに熱烈に架空の自分を語る人も？」

「うん。演劇部はレベルが高すぎ指導が厳しすぎるらしい」

「そういえば、部長さんが架空（これ）人生共有会を立ち上げたんですか？」

彼女は私が続けて質問すると、疲れた素振りもせず頷いた。気のせいか、その表情は初めてみたときよりも生き生きとし始めている——どうやら彼女は、彼女が話す架空の自分になりきっているらしかった。だからこそ徐々に口も達者になり始めて、見た目とは違う、男らしい凛々しさがそこにはあった。

——ここならば、大丈夫かだろうか。今私自身がこの三年間を賭けてしていることを、ここでは半ばお遊びとしてやっている。ならば、仮にばれてしまったとしても大丈夫なのではないか？

正確には、ばれたことは最悪だが、それを許容する仲間を作っておけるのではないか、という事だが……多分、ここなら大丈夫だろう

う。私は殆ど直感的にそう思った。

私は厚い胸板を押さえつけるコルセットを制服の上から触れて、小さく頷く。上目遣いに見る部長の顔は、酷く綺麗な造りをしていて、夕日も手伝ってか煌めいているように見えた。

――私はポケットの中に折りたたまれる数枚の紙の一枚を指先でめくってつまみ、そして机の上に置く。胸のポケットに突き刺さるボールペンを手にして穂先を出すと、そのままつらつらと『入部希望用紙』に学年、クラス、氏名を記入し、部長を名乗る少女へと差し出した。

彼女は予想通りと余裕を持った表情と、どこか安心したかのような表情とを混じり合わせた奇妙な顔で私を見ると、静かに手を差し伸べた。その手は女の子らしい、小さく柔らかい、全ての色に染まりあがりそうな白い手だった。

私は手を差し返し、強く握る。彼女はその細腕には相応しくなく、くらの力で握り返し、にこやかに笑った。

――入学二週間目の水曜日。私の学園生活はここを境にして安定期を迎えた。

馴れ合い

「私は霜月京子^{しもつききょうこ}」

金髪が美しい部長はその切れ長の目で鋭く私達を見て、薄く微笑んでから自己紹介をした。大きな胸が特徴的な典型的な美人という感じだが、どこことなく男っぽい口調のせいでその印象はより強いものとなる。その傍らに立つのは、部長と同じ三年生で、副部長らしい青みがかかる黒髪は腰ほどまで長く、そしてその毛先は綺麗に切りそろえられている。目元は優しく丸っこく、その表情には笑みが絶える事が無い様に、頬は釣りあがっていた。

そして部長とは対称的に胸は小さく、だがその分背が高く、全体的にスタイルが良く見える。雑誌やテレビなんかでよく見るモデル体型という奴なのだろうが——なんでそんな美人さん方が、否、美人さんに限ってこんな事をやりはじめるのか疑問だった。最も、私個人としてはやはり美しい方がいいから特に文句はないのだが。

「私は御堂珠樹^{みどうたまき}です。ふふ、まさかこんな同好会に新しい人が入ってきてくれるなんて、ね？」

「ああ、正直私も驚いている」

二人は仲良さげに肩を合わせて笑いあう。そうやって並ぶだけで絵になる二人を、私と——なぜかリンコも一緒に席に座って眺めていた。

しかし細かい事を気にしないのが私のいいところである。なんだかんだで結局私と同じ部活に入りたかったリンコの心情など彼女の口からわざわざ窺うなんて野暮ったい事をせずとも私にはわかるのだ。彼女が、私が何も言わなくても一緒に部活を探してほしい事を察してくれたように。

そして羨ましいのか——リンコはちらちらとこちらを伺っていた。が、私は面倒なのでそ知らぬふりをして、やがて始めるであろう彼女等の、これからの活動説明を待っていた。

そうして始まる部活動説明。入学式の後日に体育館で行われる大々的な部活動説明には参加できない同好会故に、明確な活動内容は昨日初めて聞いたのだが、それでもまだ不鮮明なのは拭えなかった。話によると、所属している二年の三人は他の部活と兼業しているために、滅多に顔を出さないらしい。良くて一月に一度参加する程度らしい。最も、今回そのお陰で部活動として正式に認められた、という事があっても無くても、特にそれがどうということはないとの事だった。

「それで活動内容なのだけれど……そうね、あまり理解の得られない人達にとってはとても特殊に見えてしまうもののよ」

「しかし大よその活動内容を聞いたうえで入部希望の意思を提示した彼女等だ」

「なら大丈夫かもしれないわね……覚悟は良い？ 私は出来てる」

そうして御堂が口にする活動内容は、先日霜月から聞いた話となんら変わらぬものだった。

自分が考える最強の自分でも、最弱の自分でも、全く性格の違う、性別の違う、人種の違う、あるいは人間ではない——理想の——自分を思い描く。最初は設定を、そして次に物語を、さらにそれを主人公とした世界を、最後に、その自分を、本当の自分だと思い込んで生活する。それが過程で、かつ目標だというものだった。

私は既にその自分が決定していて、実行すらしている。しかしリンコの方はどうなのだろうか。だが私が彼女にそういった心配をする場合、大抵が無駄になる。だから今回も同じようなものになるのだろう。

「でも杉林さんはなんだか、既に違う自分になりきっているようにも見えるけれど――」

「なあっ!？」

「違ったらごめんなさい」

「へ、あ、はは、勿論私は生まれた時から女の子ですから……えへ」

「いや、誰も性別まで否定はしていないが」

「え？ あ、ああ、で、ですよー」

動揺して首の動きがカクカクに、発言がボロボロになりつつある私の腕をリンコが小突く。「ちよっとお、しっかりしなさいよ」といった意味の言葉を投げられた気がしたが、今は先輩連中にどうフオローを入れればいいのか、そもそもフオローを入れるほうが良いのか、入れたら入れたで妙に食いつく気がして不自然ではないかと思案に思案を重ねるのに一杯一杯で、その台詞を理解するのは半ば不可能だった。

しかしそんな危惧は徒労に過ぎず、彼女等はそんな明らかに不自然な口ぶりに疑問を抱かぬように説明を続ける。御堂が口にする次の説明は、聞くのは初めてだった。

「何がしたいか、と言われれば、自分の嫌な所を修正する……局所的に言えばね。でも私達は、自分を変える事を目的にしているの。例えば、内向的な人間から外交的に変質するように。あるいはその逆もありえるわ」

「誰かが求める自分ではなく、自分が求める自分に」

「そう。でもそれって凄く難しいことだし、実行できる環境も少ないわ。だから私達がそれに協力し、手伝いたいって考えたのよ。最も――それ自体を希望する人が居なくて、私達は困ってたんだけどね」

「――確かに、変身願望ってのは誰にもあるって言えますしね。女

装男装とかも、その一種ですかね？」

「一概にそうだとは言いきれないけれども多くはそうなのかもしれないし、だけれど女装、あるいは男装をしている自分を同姓、異性に綺麗だと思われたいだけかもしれない。もっと深い訳があってそうする必要がある人もいれば、特に理由無くそうする人も居るわね」

「はは、じゃあお二人のどちらかが男だって可能性も？」

「簡単に否定できるわけでもない。逆に君たち二人のどちらか、あるいは両方が男性——という可能性もだが」

「……なるほど」

「だがどうあれ、私たちは君等^{ツレ}を否定しない。寧ろ手助けする立場にあると言う事を忘れないで欲しい。君たちにどんな事情があれども、ただ興味本位で入ったにしろ、だ」

「……………」

——随分深い所まで私を知られているような気がして、思わず背筋が凍る。額から流れるのは体温調整のための汗ではなく、単なる冷や汗だった。だが不思議と嫌な気分ではなく、まるで——母親の胎内で優しく包まれているような暖かさがそこにはあった。

安心できた。身近な協力者とは違う、まるで組織で私の身柄の隠匿に励んでくれることを約束されたような安堵が胸の奥から指先まで、その脈拍によって広げられるようだった。

だから私は妙な感覚を肌で感じつつも、その顔は緩やかに笑みを浮かべる。それをみて、霜月と御堂は喜ぶように顔を見合わせ、優しく笑っていた。

傍らのリンコは何が不満なのか仏頂面だったが、多分自分以外にこの学園内で気を許すものが出来た事が少しばかり不満なのだろう。だがそれが出来なかったら出来なかったでまた面倒で大変な思いをするのが目に見えているのであからさまに不平を口に出来ない。そんな複雑な思念が渦巻いているのだ、と推測してみせる。

そんな彼女を少しばかり嬉しく思いながら私は、そういえば物事

を自分中心に考えすぎて、さらに多くを彼女に頼りすぎていたな、
と思ひ返す。そうすると自然に申し訳なく思えてくるのが不思議だ。
だから慰めとばかりに太腿を優しく二度叩いてやると、何故だか
力いっぱい足を踏まれた。

耳元では「セクハラだよ」と囁かれ、どうやら自分は完全に異性
として見られているらしいという事が判明する。ならばこれまでの
私に対する反応は全て男としての前提があつてのものだったのだろ
うか。

だったら——こちらでも少々、複雑にならざるを得ない。

「あら、もうこんな時間……。なら今日は適当に、親交を深めるた
めに談笑にしましょうか？」

「ああ、それがいいな」

御堂は立ち上がって背を向ける。軽い足取りで教室の奥へと向か
うと、壁際には勉強机がいくつか並び、その上にはポットがあつた
り、コップがあつたり等私物がならび、その一方でコピー用紙が山
積みされていたり、画材や、一台のノートパソコンが綺麗に置かれ
たりなどされている。

彼女はそこでコップを人数分手にとってお盆に載せて、ティー
パックを入れてポットからお湯を注いだ。簡易なアフタヌーンティ
ーでも始めようという魂胆が行動から丸見えだったが、談笑を目的
とするならばそういった場を設けるのが一番手っ取り早いだろうと
思えた。

やがて彼女は準備を終えると、盆に更に市販の茶菓子を盛った皿
を乗せ、こちらにやってくる。その足取りは頼もしく、不器用な人
間がおっかなびつくりで物を運ぶのとは大違いであつた。

「ただの紅茶で大丈夫だったかしら。ミルクティーの方が好き？」
「あ、いえ。おかまいなく。ありがとうございます」

運んでくるのを伺い見て、リンコはそんなタイミングで立ち上がり、コップを受け取り自分と、私に配る。さらに霜月にも渡そうと盆へ手を伸ばすが、既に御堂が配り終えた後だった。最後に彼女は菓子を四人の中心に置き、自分のコップを席の前に落ち着かせると、ようやく腰を落とし、盆を机の脇に置いた。

「ごめんなさいね。ここではナマモノが置けないから」

「いえいえ、これだけでも十分美味しいですよ。やっぱり淹れる人が上手いからじゃないですかね」

「うふふ、ありがと。でもそうやって女の子ばかりをたぶらかしてもダメよ?」

「……えっ?」

「貴方は女の子なんだから、ちゃんと男の子にも目を向けないと、ね?」

「あ、ああ……ああ! はは、分かってますよッ。でもホラ、入学してそうそうホイホイするのも印象がアレじゃないですか」

正直、全部バレてて彼女らの手のひらで鼓舞しているものだった。思った。

しかしそれは勘違いだったのだが――どうにもこの短時間で私は、御堂珠樹に全てを見透かされているような気がして、奇妙な恐怖を覚え始めていた。最も恐怖といってもそんなシリ阿斯なものではなく、子が欠点のテストを隠しているのが母親に知られているのではないか、と怯える程度のものである。

だが、私は早くも、そんなにもここに馴染み始めているのだろうか。否、正確には彼女等に気を許し始めているのだろうか。

確かにこの霜月、御堂は初対面にしては随分と親しみやすい二人だった。美人だと言うところを主張せずに、だが決して謙虚に出過ぎない、自分のいい所を嫌味にさせずにいいように出す、自分と言

うものを良く知る人間であつた。

意識して彼女等を観察すると、髪を掻き揚げる仕草も色っぽく、毛先を指で巻くその所作も、頬を撫でるその行動も、軽く胸のタイを緩める動作も、その全てに目を惹く魅力があつた。さらにそこに嫌味がないからこそ、人としての憧れと魅力が集中するのだろう。こんな人になつてみたいと、こんな人に付いて行きたいとが重なるのだ。

更に気を遣い、人に優しい。

完璧だつた。

だから私は、この二人にならバレてしまつても大丈夫だと確信できた。

後はそれが勘違いにならないことを祈るだけである。

「――へえ、二人は同じ中学出身なのね？」

「はい。お二人もそうなんですか？」

「ああ。まあ腐れ縁つてヤツだな。いわゆる」

私が適当に相槌を打つて思考する間に話は進んで、不覚にもそんな話題に突入してしまつていた。しかしそう危惧する必要も無く、

「昔はバスケやつてたり……頼れる男だヤツったんですけど、今じゃこんなに頼りなくなつちやつて……」

「そうかしら？ 私が見る限りでは、彼女は今でも随分頼りがいがあるように見えるけれど」

「確かに。私も、そこいらの女生徒とは大分違い、太い芯がその根底に見えるが」

「そりゃ今も根底は変わらないかもしれないますけど……」

妙な方向へ会話は展開された。

「ちよつと三人とも！ なんですか、その内ピンクになりそうな話の流れ！ 私をその中心に置かないでくださいよッ！？」

「はは、いいじゃないか。同姓でも好いている人が居るのはいいことさ」

「す、好きじゃないですよっ！」

「まあまあ、今は素直になれないかもしれないけれど……ね？」

彼女等はからかうように、だがどこことなく羨ましく見るように笑って、賑わう。場はそうやって話を二転三転させて私を含める四人の顔を朱く火照らせて、時間の経過を忘れさせた。

——結局私達の談笑に一つ区切りが付いたのは、活動時間を大幅に遅れた一九時過ぎだった。

大打撃　そして激痛へ……

肩までの髪を全て後ろに流して、髪を掻き揚げる。一つ大きな息を吐き、私は首を捻って骨を鳴らした。

時刻は流れ、授業が終わって放課後になった。だが季節は春であるために空はまだ蒼く日が高い。故に行動時間にはまだまだ余裕があった。が、ここ最近——特にこの一週間は様々なことが込み合っ
て肉体的にも精神的にも疲れてしまっているのだ。だから少しでも早く家に帰りたいかった。僅かでも多く眠りに付きたかった。

リンコは幸い……と言って良いのか分からないが、委員会の仕事で学校に残らなければならないから先に帰ってくれと伝えられた。
小和瀬光こわせひかりに到っては既にテニス部で和氣藹々としているらしい。微笑ましいことだ。そうして帰り道は特に誰かと一緒という事がなくなったので、自分のペースを貫いてさっさと帰宅してしまおうと——昇降口を出た時の事である。

「ミーズキツ、一緒に帰ろう！」

「そうっスよ。今日は週末だから遊びまくるっスよ」

背後から襲い掛かる二人の声は途中で左右に別れ、一方は強引に肩を組み、もう片方は力任せに腰を抱く。その為に私のバランスは大きく崩れて前方に倒れそうになった。

息を呑む。痛みを覚悟した。が、私の腹筋は、りよりよく膂力は私自身が思うよりも強靱であるらしく、少しばかり力を込めるとそんな女の子二人の突進を容易に堪え抜く事が出来た。足は強く踏ん張られ砂を巻き上げる。背には確かな女の子らしい柔らかさが服越しに密着し、石鹼の良い香りが鼻に付いた。

だから私は慌てて彼女等を払いのけ、その勢いに任せて振り返る。すると、不満そうな顔をする少女が二人、こちらを睨むようにして

みていた。

「な、なん……によ」

「だって最近ミズキさん私の事挨拶以外で無視するじゃないっすかあ。もう私悲しすぎて……」

「そりゃアンタ、自分でやった事を省みてから言ってみなさいよ」

「私の時だって、殆ど上の空みたいだったじゃん？」

「考え事してただけだって」

琴巳は癖のある明るい茶系の髪を風に飛ばされ乱れるのを、手櫛で直す。小鳩は顔に掛かる黒い髪を纏わり付けながら、何も構わず何かを叫び続けていた。だがそこまで強くはない風に声が流され、一定の距離を保つが故に言葉は届かない。

私が知らん振りをして背を向けると、小鳩は泣きそうな顔になって飛びついてきた。

「わ、わかってるっすよ！ あの時の方が余計なお世話ってのならわかってるんすよ。でもミズキさんの気を引きたくて、つい……」

「っていうか、なんで私？」

「すぐくカッコいいんすよ。男の人みたいに。一目ぼれてヤツっすか」

思わずドキリとしたが、この手の話は既に克服している。そしてこの二週間の経験で、私は完全に女性として見られていることを自覚済みなのだ。故に私は冷静にふふんと鼻を鳴らして口を開こうとするが――不意に一閃。肉薄する。

「本当に男だったら――」

小鳩から放たれた手刀はそれを知覚する間もなく飛来して、それ

は寸分狂わず股間を打ち抜いた。

——激痛。鋭痛。苦痛。腹痛。やがて意識は白紙に染まる。

人間の、否、男の体外に存在する急所を突くその手刀はスカート、ショーツ越しのその感触を理解しているだろうか。だが私にはそれを気にする余裕は無かった。

呼吸が乱れる。視界が狭まる。やがて暗くなり、世界は闇に包まれた。

私は肩膝を付き、浅い呼吸を繰り返す。やがて原因不明の腹痛が奥底から滲み出るように広がり、まともな思考を封ぜさせる。

遠慮のない直接打撃はそれ故に私を跪かせ、肩に乗せられ心配を伝える手には悪意さえ感じる何かがあった。だが、伊達に肉体を鍛えているわけではない。急所突きには一定の耐性がある。それ故に、数分うずくまった所で回復の兆しが見えた。

「ご、ごめんなさいっ！ まさかミズキさんがそんな日だったとは思わなくて……」

彼女の肩を借りて立ち上がる私の姿は一体十人中何人くらいが情けないと感じるだろうか。少なくとも私が違う立場なら指差し腹を抱えて馬鹿にしていただろう。自分が当事者であっても、心の中で情けないと自分を責めているくらいだから。

額には脂汗が滲み、唇は酷く乾いている。それでも見せる引き攣った笑顔は、それ故に他者に対して無意識に心配を促していた。

「ああ、いや……その、なんだ。今度から気をつけよう。それで——何か気付いた？」

「……？ いや、ミズキさんも大変な時期があるんだなって」

「なるほど……。許した」

会話をする位余裕が出てくると、下腹部の痛みはやがて鈍痛に変

わり、そこまで気にするほどにはならなくなる。私は軽く腹部をさすってから、何事も無かったように笑顔を見せてしっかりと立ち上がった。

それから汚れた制服を軽く払い、バッグを肩に掛ける。それでも琴巳はどこか心配そうな顔でこちらを見ていた。

――まあ、痛みが緩くなっただけだから引いたとは違うのでまだ完全復活には至らないのだが、正直そこまで心配されるとなんだか私が逆に悪い事をしてしまったような気になってくる。

しかし、これが本当に心配なのだろうか、ここまでもの思わしげな顔をしてくれるとこちらが気に病んでくる。

もしかして今の攻撃の瞬間にパンチラしてしまったのではないだろうか。そのパンチラを偶然見た琴巳はついだとばかりにその股間部の盛り上がりを見てしまったのではないか。最も通常状態だしサポーターをつけているからそこまで目立つ筈はないだろうが……何にしろ、今のところ気になる心配な点はその一つに集中していた。

傍らの小鳩は泣いたカラスがなんとやら。先ほどまでなみだ目で真赤にしていた顔は、今ではにこやかに笑みで満たされていた。これで口調と性格がまともならば小和瀬のような扱いをしてやっても良いのだが、今のところはそれを許してしまうと付け上がり無駄な問題が纏わりつくのは必至だろう。だから彼女にはふざけ半分で付き合うのが丁度良いのだ。

一方で琴巳だが……。

「ねえミズキさん、どこ行くっスかあ？」

「まずはゲーセンとか？」

「あ、私ゲーセン行った事ないっス！」

その表情の曇りは一瞬にして払拭され、小鳩の問いに彼女は即答する。

私はソレに安堵し、息を吐いた。胸を撫で下ろし、生温い風を受

け止める。やっぱり気のせいだったのだと、彼女の顔と同じように私の心中は晴れ晴れとなる。

下校時の人通りが多いようだが、部活動に向かう人間の方が勝っているために、然程通行や一目を気にするほどでもなかった。

だから私達は、なぜだか私が中心になって横に広がって――ゲームセンターへと向かう事になった。

「うーわーっ！ 声が全然通らないっスよおっ！」

「ミズキはゲーム好きみたいだけど、ゲーセンって来た事あるの？」
「え？ まあ、中学の頃はちょいちょい……」

――紫煙によって薄っすらとモヤがかかる空間内には、喧騒が如き数多のゲームのBGMが重なり、さらに金属が擦れあう音が合わさって些細な物音ならば決して気付けぬ自信をもてるくらい五月蠅かった。が、もはやこんなのには慣れっこだ。小鳩は初めである故に、目を煌めかせて辺りを見ているが、私や琴巳は比較的落ち着いて、何にするか、辺りを眺めて居た。

はしゃぐ小鳩を他所に、琴巳はさっそく目を輝かせて筐体きょうたいを探し始めている。私はとりあえず、あまりここに来た事がなさそうな小鳩を優先するために琴巳に生返事をしながら、三人で盛り上がりそれうなゲームを目で探した。

「ねえねえミズキさん、あれ、あれやりたい！」

小鳩は私の袖をひっぱって注目を自分に移すと、大きな液晶画面と、ボタンが七つ平面に並ぶ筐体を指差してプレイしてみたいと主張してくる。いわゆる音楽ゲーム、通称音ゲーで、その中でも有名な”スッポンミュージック”だった。内容は到って簡単で、流れる音楽に合わせて落ちてくるスッポンを、画面下にある判定ラインと重なるタイミングを見極めてボタンを押していくゲームである。

慣れるまではスッポンに翻弄されてしまうが、慣れてしまえば簡単で、だが奥深い個人的にも割合に好きなゲームの一つだった。琴巳は私と同じように促されて視線を移すと、いいんじゃないかな、と首肯した。

それじゃあやってみようと言う事で、その筐体の前に移動して、小鳩は意気揚々とサイフの中から二百円を出してプレイを開始したのだが――。

「うう、なんスカアレ。鬼畜っス。鬼畜ゲーっスよ」

「まあ、アレだ。縁が無かったゲームって事で、元気だそうよ」

流れてくるスッポンを全て見逃してからボタンをダブルクリックしていた彼女は精神的疲労を表現するように肩を落とした。私は彼女の肩を軽く叩いてから、元気出せよ、とクレーンゲームの前まで連れ出した。気がつくとき琴巳の姿は見えないが、彼女は彼女でまた格闘ゲームに熱を出しているのだろう。

そんな風に一方に意識を向けると、小鳩はまるで幼児のように私の腕を突付いて注視させる。私は「はいはい」と気だるげな返事と共に、小鳩の面倒に集中した。

「ほら、この熊の脇にアームを挟む事を想定して、移動させんのよ」

「む、なにやら繊細な予感……」

「まあ最初はなんでも難しいよね。でもやってる内にコツを――」

アームが関節を動かす機械音が籠って聞こえる。私が失敗を恐れずチャレンジせよと、落ち込まないように言葉を掛けている間に彼女は既にクレーンを操作していた。この娘はいつでも人の話を聞いた事がないと心の中で愚痴っていると――。

クレーンは先ほど例に出したテディベアの頭上で停止し、僅かな調整の後、静かにおり始める。捕食する蜘蛛のように開かれたア―

ムは両手を広げる熊の脇の隙間に突き刺さり、そして閉じると、がつちりと脇が固められた。熊は順調に引き上げられ、一度空中で停止する振動すらも凌いで……。

熊は果たして、小鳩の手元に降臨しくさった。

「……やった!」

「おう、良かったじゃない」

「いやあミズキさんあつてのコレっスよお」

胸の前で小さくガッツポーズする姿はまるで深窓の令嬢がはしゃいでいるようで見ていて可愛さがあつたが、その口調が復活してからは一気に現実に取り戻されたような気がして、彼女を見る目が少し変わる。が、どうやらこのゲームセンターで一気に距離が縮まったつもりで居る彼女は、私に身体を密着させながら再びクレイネームに投資していた。

「ちよ、まだやるの?」

「――これより我ら、修羅に入る」

「私もっ!」

彼女はまるでクレイネームに魅入られ、さらに才覚を見せた所為でファンシーなアニマルグッズしかないその筐体に数百円、後に数千円と投資する。

最初の勢いのままで行ければ良かったのだが、さすがに二度目以降は幾度か失敗してしまう。だが六、七回目になると確実にそのツボを理解したのか、ほんの僅かな指の動き、そのクレインの揺れやらを見極め、タグに引っ掛けたり、腕で輪を作る人形のそこに突っ込んだりと、稀にテレビで見るプロの技術^{テク}をやつてのけた。

やがて数十分も経過すると、小鳩も我に返って――バッグに入らきらない無数の人形、ヌイグルミを見て、

「……ごらんのありさまだよ！」

嬉しげな顔で咆哮^{さけ}ぶと、一区切りついたかと様子を窺っていた店員が、丁寧^{ていねい}に袋をもって近づいてくる。私はそれに顔を向けると、

「よろしければこちらをどうぞ」

と嬉しげな顔で男性店員が手渡してきた。

最悪抱えようかと行動に移しかけた私達にとっては正に渡りに船と言ったもので、礼の一つでも言いたかったのだが、そうしようとする内に彼はそそくさと受付の方へと身を引いてしまった。仕方が無いので私は一つ彼の背に会釈をしてから、小鳩に渡されたトートバックを譲り、人形を居れる様にと促した。

瞬間――。

「てめえ……もう我慢ならねえ！」

アングラの巢窟^{そく}に近いと言っても差支えがないほど筐体の揃い具合が秀逸^{しゆいつ}の空間で、そんな所故に日常茶飯事であろう怒声が響いた。喧騒^{けんそう}を超えるドデカイ声はマナー知らずのお客の中でもその多くが、さすがに迷惑だと感じたのだろう。近くに居た殆どが、眉根に皺を寄せ、声の方向へ顔を向けていた。

一割が興味深々に、五割はどうでも良さそうに、そして残りは面倒ごとに巻き込まれないように店を後にする。私達はその最後の連中に模倣^{もはく}し出て行きたかったが、まだ琴已と合流していないのだ。

そして声が聞こえて来た方向は、残念ながら彼女が居るであろう格闘ゲームの筐体が並ぶ場所である。

「女^{アマ}ちゃんがよお、口の利き方ってモンを教えてやろうか？」

そしてその台詞で絡まれているの女性だという事が判明した。

この時点でその被害者、あるいは加害者が流石琴巳と言う線は酷く濃厚である。

妙な暴力沙汰にさえならなければ、私が横から突っ込んで口先だけで言いくるめてやる事が出来る。そして実行してやってもいい気分だし、そのつもりだ。男友達なら知らん顔で帰っていたが、友人が女の子で、さらに相手が、

「ちょっと面あ貸せや、嬢ちゃん」

背丈が私くらい高く、さらにゴリラみたいな筋肉のつき方をする、見た目がぱっとみ野蛮な男であるならば仕方のないことだろう。私が様子を身に行くかどうか手をこまねいていると、そんなタンクトップ姿の男が女の子の細腕を引いてクレールゲームの脇を通り過ぎる。通過する少女と――流石琴巳と、眼があった。視線が交差した。そして悲しげな表情が、そこにはあった。

「あっ……」

背にしがみ付くように居る小鳩は、そこで漸く”被害者”が琴巳なのだと理解する。そして瞬時に、その後行われるであろう凄惨な出来事を脳裏に過ぎらせて、服を掴むその力が少しばかり強くなる。私はその両者の心情を理解して、酷く脱力した。

どうすりゃいいつつうんだよ……。いや、どうして欲しいのか、か？ 私は分かっているながらも心中自問する。

無論、こいつらの思った通りのことはしてやるつもりだし、見事成功する自信もある。伊達で”あの一年間”を過ごしたわけじゃない。だがこの姿は目立ちすぎるのが問題だ。

いや、だがどうするかを考えている間に二人の姿を見失うかもし

れない。それは一番やってはいけないことで――。

気がつく走り出すこの身体は、考えるより先に問答無用で琴巳の背に追いついて、虚しく垂れるその手を掴んでいた。

「ほーら、どこ行くつもり？ 帰るなら一緒に帰ろうよ」

「ああ？ テメエ誰だ」

しかし、やはりと言うべきか。私の言葉に反応するのは男が早かった。だから私は思い切り振り上げたカバンを彼女と男の、手の継ぎ目の部分に力一杯振り落とした。するとヌイグルミを沢山詰め込んだその重量と、力に耐え切れなかった、そして必要以上に堪える必要のない手はいとも簡単に離れる事が出来て――その瞬間、私は琴巳を思い切り背後に引っ張ると、同時にこの身を男に迫らせるように押し出した。

男はぎょっとして私を見つめるが、だがそれ以上の行動に移らないのを見て、にやりと笑う。

どうせ私がびびってこの期に及んでこの肉体からだを硬直させた、だなんて思っているのだろう。しかしこんな状況では、こういった思い上がりの馬鹿のほうが助かる。だから私は男好みこいつの、怯えた表情を見せて見た。

そして間髪おかずに肩を掴まされると、そのまま身体を手繰り寄せ、肩を組む。アルコール臭が鼻についた。

「はあん？ 嬢ちゃんの身代わりになろうっての？ いいぜ、俺は心が広いからな」

彼は力任せに私を引っ張ると、そのままゲームセンターの外へと誘った。私は構わずそれに流され、背を向けたままこちらを向いているであろう琴美に手を挙げ、小鳩をよろしくと合図したが、それが正しく伝えられたかは定かではない。

——やがて喧騒は失せ、耳はまるで耳栓でもされたように、世界の音を隔てて聞かせた。だがそもそも元が静かである故に、男の息遣い以外はその殆どが無音に近かった。

店と店が並ぶ。その為に路地が多い。そして人通りの少ない道の路地などは、不良の溜まり場にもってこいの人気の無さだった。

私は思ったとおり、そんな人気のない薄暗い、息苦しいくらい空気の悪いその路地へと連れて行かれて——。

その暗がりに入り込んだ瞬間、鋭い一撃が顔面に突き刺さる。

痛みが脳に染み渡る。暴力に押されて後退する身体は、ここが狭い路地であることを認識しているのかまわず下がり、後頭部を壁に強打した。

痛みが芯に伝わり、行動が鈍る。意識が僅かに白に近づいた。

「馬鹿が！ カッコつけで身代わりなんかになるから、よオッ！」

「つてえんだよ屑がッ！」

男は大きく振りかぶる。故に馬鹿みたいな隙が出た。

私は背と接する壁を強く弾いて、男に向かう速度を加速させる。

そして僅か数瞬の内に肉薄すると、男は行動に焦って拳を突き出した。が、路上でのケンカしか経験のない拳など、どう飛んでくるか容易に予想がつく。だから私は突進する拳の内側に自分の腕をもぐりこませ、その軌道を反らすように作用させてから、外側へと力強く弾く。

そうすると思惑通り、男は大きく、何かを抱擁するように腕を開いてくれた。

隙は更に大きくなる。

男はもう片方の腕で——顔を隠すように防御の態勢をとった。

これで完全に彼は無防備になったわけだ。

私は頬を吊り上げる。だが対照的に、この表情は怒りに満ちていることだろう。

「馬鹿が、弱えモンだけに粹がつてんじゃねーよ」

強く右拳を握ると、間髪おかずに振り上げる。そしてその拳骨は寸分狂わず男の、顔を守る下腕に喰らいついた。そしてその腕は力に負け、押され、大きく空へ弾かれる。途端に、驚きに塗れた男の顔が覗いて出た。

私は構わず残った左腕を背後に引いて、脇を締める。それを見て男は一層顔を引き攣らせたが、構わず弦の引かれた弓のように、拳を弾き、男の顔面、その鼻筋へと肉薄させる。同時に男へと大きく踏み込んで、体重と、勢いその全てを上乗せした。

刹那にしてこの拳は男の顔面に食い込むと、妙な、硬かった何かが緩くなる感触を覚える。だが構わず、持続的に、壁に対して垂直に力を加え続けてやった。

ぐざぎと、言葉に成らぬ呻きは口が拳によってふさがれているが故だろう。

だが構わず言っちゃった。

「一発は、一発だぜ？」

口にすると、男の両腕が左腕に纏わりついた。

私は短い溜息の後、空いた右拳で男の顎を叩く。それと共に男の両腕からは力が抜けて、閉じた口からは中から何かが押し寄せるように、頬が膨らむ。

それが何なのかを瞬時に理解し、私は跳んで街道側へと避けると、瞬間、男の口からは滝の様に吐しゃ物が溢れ出だした。しかし飲酒の後に激しい運動だ、それも仕方ないだろう。酔いが悪い方向へ回ったのだ。自業自得と蔑んでやる事しか、私には出来ない。

——私はそんな彼が口から、胃の中からその全てを吐き出し終わったのを確認してから、コイツをどうすれば永久的に、簡単に人を

襲わなくなるような恐怖を与えられるだろうかと考える。が結局何も思いつかないので、ポケットから携帯電話を取り出し、とりあえず警察に通報する事にした。

そんな頃になるともう、空の色は朱色に染まりあがる時間帯になっていた――。

平々凡々

結局あの後、駅前のお巡りさんが直ぐに駆けつけて、鼻血を出して立ち尽くす私を見て全身でたじろぎっぷりを表現してみせ、その奥に臭気たっぷりに酷く汚れた男を見て、事態を理解したんだかしていないんだか良くわからない態度で私を路地の外まで引っ張り出した後、男に何かを怒鳴りつけていた。

私はそんなお巡りの背に、帰っていいですか？ とただ一言尋ねると、彼は詰問を取りやめ即座に立ち上がり、近寄る。それから事のあらましを二、三聞くと、「またか」と一つ呟いて、帰宅の許可を容易に降ろしてくれた。

それ以上のことは何も口にしなかったが、ここいらじゃ有名な男なのだろう。悪い意味で。

やれやれ、今回は状況的にとても有利だったわけだ。だからある意味、悪行を重ねる男に助けられたようなものだ。

そうして私は再びゲームセンターへと引き返して、友人等とさっさと帰る事にしたのである。

傷は然程大袈裟なモノではなく、冷静に処置してみて、極めて無傷に近い事がわかった。

「――というのが昨日の事よ」

「今日の事は？」

「睡眠妨害する夢魔の出来損ないが僕のもとにやってきた」

私は首を振って嘆いてみせると、リンコはくだらないと肩をすくめる。

だったらお前は何のために存在しているんだと嘆いてみると、彼女は眉を潜めて私に睨んだ。

「私が夢魔だとしたら間違ってもあんたのところには来ないわね」
「っせーな。今日だってこうして来てるじゃねえか。帰れ」

「琴已から心配だって連絡^{メール}が来たから、こうして様子見に来たんじやない。ほら、アンタはやせ我慢が過ぎるから」

彼女はそう言って、私がわざわざ淹れて来たお茶を啜って喉を潤す。私はつけっぱなしのテレビに視線を投げた。その画面にはアニメが映っていて――まだこんな時間なのかと、肩を落とした。

いくら旧友で、且つ現役の友達で、さらに私の協力者で、同じ部活動に所属して、それでいて家が近いから遠慮も無いのだろうが、少しくらいは気を遣って欲しいものだ。朝から彼女のモーニングコールで目を覚ますなんて、学校と家の区別がつかなくなってゆっくり休めない。土曜日の朝くらいは自由にさせて欲しいものだ。

だが学園から家が離れているお陰で、今の友達には自宅を知られていない。そこが唯一の幸福といったところだろうか。

しかし――酷く緩慢な時間の流れだ。リンコが居るからゆったりは出来ないが、ゆっくりは出来る。最低限の息抜きは出来ている状態だ。だからまあ、別に毛嫌いするほど彼女を追い出したいというわけでもなかった。

暑苦しく人様のベッドでテレビに集中するリンコを眺めてから、私はなんだか初めて、否、酷く久しく、この平凡を得たようで、その中に浸っているようで、妙に嬉しくなった。だからつい微笑んでしまうのも仕方が無いことだろう。故に、こんな気分だからこそ、彼女に奇妙なモノを見るような目で顔を除かれても、悪い気分にはならなかった。

「でもやたらめったらに鍛えてたあの期間は無駄じゃなかったのね？」

「ん？ ああ、まあな。こういった時に役に立たなかったら、俺なんも学んじやいないって事だから」

「はは、でもアンタはそっちばっかで、結局何も学んじやいないわよ。殆ど自分の事ばっかだし。未だに究極のシスコンだし」

「っせーな。んじゃ適当に誰かを好きになりゃいいのか？」

「まあそれがいいかもだけど……今の状況で好きになれる異性なんているの？」

私は無言で首を振る。

彼女はむっとして眉根をひそめた。まるで自分がそうだと言ってもらえることが当然だと、信じてやまなかったように。

確かに私は彼女の事が好きだが、愛しているというベクトルではない。無論、彼女はそれを理解しているだろうと思っていた。というか今でもそう信じている。そもそも中学時代、瑞希を介した付き合いが殆どだから、私自身との仲は言うほど良い訳でもないのだ。なのに彼女はなんだかんだで私に付きまといっている。

これが好意からくるもので無いのなら相当気持ちの悪い人間だと思ってしまうから、私は少なくとも好感を持つから付き合い合っているのだと考えることにした。

「つーか、やること無いなら帰ってくれよ」

時間はまだ九時を回ったところだ。彼女が今帰れば今日一日有意義に過ごせる。だが、

「やだよ。来たばっかじゃない」

リンコが首を振れば、多分今日一日が無駄になる。だから私はまるで学園で協力する分自分の休みを削られるような気がして、辟易した。しかし一方的に力を貸されるよりは、そういったほうがより信頼が強くなるのだろう。そうすれば私も気持ちが良いし、彼女もそれで楽しめるなら納得できた。

そんな事を考えていると、不意にリンコが口を開く。

「邪魔ならさ、どっか出かけない？ 昨日はなんだかんだで息抜きにならなかったんでしょ？」

「どっかって何処よ」

「ま、街の方……とか」

「あー、まあタマにはコッチのほうもいいかもな。因みに男と女、どっちが良いよ」

「お、男の方で」

「了解。んじゃ家の外で待ってて」

どうせ無駄にされるのなら外で気を晴らすほうがいいだろう。地元だったら中学時代の友人に会うかもしれないが、男の姿で出かけるんだから特に心配する必要も無い。そしてまた悪漢に絡まれたら、それはそれで昨日みたいに決死の覚悟で挑み掛ければいいのだ。

だから私はリンコを部屋から追い出すと、ダンスから適当に長袖と半袖とを重ね着して、ズボンのポケットにサイフと携帯電話を突っ込んだ。それから長い髪を真ん中で簡単に分けてから、自室を後にした。

今日はコルセットやサポーターを装備しないから気が楽だし、開放感がステキすぎる。身体が軽くなったような気がした。

そんなものだからうっかり階段なんかでスキップを試みて——高いジャンプは、残り八段をゆうに飛び越し、一階廊下に着地する。衝撃が周囲に波を起こして、同時に破裂音が如き音を掻き鳴らした。私は間髪おかず起き上がろうとすると、バランスが崩れて正面の壁にぶつかって……。

「ま、待たせたな……」

「……なんで着替えるだけでそんなボロボロになってんのよ」

「ま、まあ色々あってな」

「そう。まあどうでもいいけど、行こう？」

「ああ」

あやうく自分から紅葉おろしし掛けたが、瞬発的に壁を弾いて九死に一生を得た。それを説明しようと思ったが、あまりにも情けなさ過ぎて口にできない。恐らくそれを聞く彼女の反応は、いつものように冷めたものになるだろう。

私——否、俺が肩を落とすと、何かを悟った彼女は軽く背中を叩いて励ました。

「んじゃ、どこ行く何する？」

「私も行くっス！」

「賑やかになるわね」

俺がリンコに尋ねると、返答が来るよりも早く聞き覚えのある声が遮った。が、彼女はまるでそれを予知^しっていたかのように受け入れ、ごく自然にその声の主——小嶋明子を自身の横に携えた。

だから俺は思わず足を止め、言葉を失う。

——何故お前がここに居る？ 同時に俺が瑞希だと知ってしまったのか？

そういった二つの疑問が脳裏に渦巻くが、小嶋はそれを知ってか知らずか私の顔を覗き見て、目を見開いた。そんな表情はくりくりとする瞳が特徴的で、男としては思わず赤面ものなのだが、既に彼女の耐性がある俺は驚きは在れども無表情を貫くことが出来た。

「あつれ〜？ 後ろ姿からミズキさんだと思ったんすけどね。見間違いましたか。って事はアレ？ リンコさん、まさか……」

「アッキー、これは違うわよ？」

「アッキー！？ なんだお前、え？ いつそんなに手を出してたの？ こわっ！ お前こわっ！ つかお前もなんだよストーリーカーかよ

！　うわあああッ！」

噴出した感情は我慢すればするほど混ざり合って自分でも訳が分からなくなる。故に一度、そんなモノを吐き出してしまえばこんな混乱と混乱に満ちた意味不明な暴走が口先から紡ぎだされて、そして元氣良く私は振り返り、走り出そうとする。

が、その行動を制するのは、腕を掴む細腕。そしてその主は小鳩だった。

「わ、私は昨日ミズキさん……っていう憧れの女性ひとが数駅後で降りるって聞いたから、今日来て見ただけで。それで偶然リンコさんを見かけて、それで……、あの、迷惑掛けるつもりはなかったっすよ。ごめんなさいっす。邪魔なら——」

「邪魔じゃないよ！　なんだお前もう、そうやって殊勝にしたりやいいんだよ——可愛いんだから——。人は多い方が良い。お前が良けりゃ一緒に遊ぼうか？」

いつもの調子で、だがいつもとは違う風に褒め称えて見せると、ぱあっと暗がりに落ちかけた表情は明るくなる。俺にはソレがまるで赤子が泣き止んだように見えてしまって、なんだか無性に可愛く見えてきた。

だからそんな事を口走ると、小鳩はどこか気まずそうな顔でリンコを見ていた。

最も、見知らぬ男からそんな事を言われたら困惑するのは当たり前だ。二つ返事で行動を共にすることになったら、俺自身、こいつとの付き合い方を考えるかもしれない。

そしてリンコは彼女の困った顔を見て、とりあえず小鳩の肩を抱いた。彼女の心を落ち着かせるためだろう。だが相手がリンコなために、羨ましいと思えないのが悲しいところであった。

「ホラ、大丈夫。安心して。彼は見た目ほど悪い人じゃないから」
「大丈夫だよー。見た目も悪い人じゃないから」

中腰になって手を叩いてみせると、すかさずリンコから蹴りが飛んだ。

「どうやらふざけるな、という事らしい。
痛みに啼く腰を押さえ、俺は頷いた。

「ん……なんか変な人っスけど、テンション高い時のミズキさんみたいっス。それに顔もちよっと似て……」

「——ないよッ!？ 知らない、俺知らないから」

「まあ、リンコさんの友達なら、別にいいっスけど」

「そう。なら一緒に遊びましょう?」

首をぶんぶん振って風を斬る俺をよそに、小鳩は嬉しそうに頷くと、そのまま人懐っこくリンコの腰を抱くように歩き始めた。俺はなんだかいつも自分になついてくれるあの鬱陶しさが実は幸せだったんだなと再認識して、同時に襲い掛かる妙な物悲しさに頬を膨らませる。そんな俺は彼女たちから半歩遅れてその後についていった。彼女等が向かった先は、家から少し離れたところの大通りに面する、一般的な服屋だった。

これは後で聞いた話だが——リンコと小鳩は、既に入学前、とある事情で出会っていたらしい。どうやら俺が、今は疎遠に近い小和瀬との馴れ初めに近いようだった。だから俺はそうなんだと納得して、別段、両者の関係に不満も嫉妬も持つことは無かった。

一緒になって歩く二人はまるで姉妹のようだった。背丈は小鳩の方が頭一つ分小さく、さらにその人懐っこい仕草が妹を思わせ、冷静に、だが優しく振舞うリンコは姉の風貌を持つ。そして両者とも見た目が”割と”良いために、服屋に入店^{はい}って少しすると、直ぐに店員がやってきた。やはり可愛い娘に自分の店の商品^{ふく}を買って、身

につけて欲しいのだろう。

——店内は広く、一般的なチェーン店の造りである。入って直ぐに季節に合ったシャツが台に並び、その奥に服を陳列する衣装棚が適度な間隔で配置されていた。騒がしいBGMはメタル調で、だが音量が抑えられているからだろうか、妙に心地が良く感じられる。あまり聞かないジャンルの曲もたまには良いもんだなと思いつつ、仲が良い二人を眺める。俺の心に精神的充足感を覚えるのは両手に花と考える優越感からではなく、出来の良い姉妹を持ったような、兄のような誇らしさからだった。

人類皆兄弟とは良く言ったものだ。

そうして俺は——本当に、こんな度々男に戻って良いのだろうかと思えてきて、女性用の服を買おうかと足を向けるが、小鳩の存在を思い出して足を踏み留めた。そして、ならば男物の服は春夏秋冬全ての季節に対応できるものが揃っているし、ここに居ても彼女等の邪魔になるだろうと考えて、とりあえずこちらをちらりと視線で窺うリンコにそういった意味の合図をしてみせ店を後にした。

自動ドアを背にすると、連休初日の午前故に人通りの多い歩道が広がる。俺は流れ行く人波の途切れる瞬間を見極めて、正面の、二車線道路とを隔てるガードレールに移動し、そこに寄りかかるようにしてひとまず息を付いた。

首を鳴らし、大きく伸びをする。

途端に満たされるのは、この上ない開放感だった。

何を気にするわけでもない。何かに注意しなければならぬことも無い。肩まで伸びる髪は風になびき、俺は大きく深呼吸をした。

そんなのほほんとした空気を醸しつつ空を見上げ、ただひたすらに思考を無に、意識を虚無に変えてみせる。そんな中で、

「お姉さん、ちょっといい？」

茶と金の間に行くような色を持つ髪を無造作に立たせ、首に銀のアクセサリーを身につける、ぱっとみ柄の悪そうな男はそんな風に声を掛けた。だがお姉さん、という部分を逃さず聞いた俺は無論流し、こんな街にもナンパなんてものが存在するんだなあと頭の隅で考える。しかし男は俺の横顔から視線を外さず、伸ばす腕は迷い無く俺の肩を掴み、ゆする。

だから思わず眉間に皺寄せ、顔を向けて目を見張る。彼は正面からこの顔を捉えているのにも関わらず、悪戯っぽく微笑むので、彼が喋りかけるよりも早く、俺は口を開く。

「悪い、お兄さんちょっと連れ待ってるんだわ」

「なっ……お前男かよ！」

笑顔で返答すると、彼は虚を突かれたように驚愕に表情を染めると悪態を付いて背を向ける。なんだかムカついたのでその背中中指でも立ててやろうかと思ったが、こんな街中でそんな恥ずかしいことが出来るわけも無く、短い嘆息を後に――空を仰ぐ。

まるで水面のような空には水煙のような雲が漂い、緩慢な速度で流れていく。気を抜くと、こんな雑踏の中でも自然の一部になったような気がして、現実と妄想の境界が曖昧になり始める。

もうどうにでもなれ、と心の中で呟いているはずだが、もしかすると口に出ているかもしれない。だがそれすらも気にならなくなつて、やがて――再び、少し汚れているだろう空気を胸いっぱい吸い込んで、それを気付く葉代わりにした。

たまにはこんなのもいいだろう。そんな事を考えていると、”ようやく”なのか、”もう”なのか、二人は服屋から、辺りをキョロキョロと見回しながら出てきた。俺はそんな彼女等に軽く手を振りながら向かって――。

一日は、平穩はこうして何も起こらず過ぎていった。

プールサイドの悲劇

夏と言えばビキニである。

中学時代に、そんな持論を掲げてクラス中の女子から反感を貰っていた友人が居た様な気がした。名前と顔は失念したが、その立派な発言と行動力に惜しめない拍手と賛美を送った記憶は確かにあった。そして高校生にもなると、確かに発育したその肉体にはビキニが良く似合いそうな女の子が沢山居る。私はプールサイドで仁王立ちしながら、それを俄かに理解した。

起伏の激しいそのボディラインに、その細い腰元。柔らかそうな身体はピチピチの学校指定水着^{スクール}によって抑えられていて、故にその柔らかさが顕著に表されていた。さらに水によって色を濃く、その上肌に張り付いて、女の子の魅力は普段の三割増しとなっていた。

何の競技も行われず、皆がワイワイと騒ぎながら七コースもあるプールの中を縦横無尽に泳ぎはしゃぐ。水しぶきが上がり、声を上げて笑いあう彼女等にはどこか微笑ましいものがあった。やがて私はプールサイドを囲うフェンスを背に座り込み、膝を抱えて一つ息を吐いた。

浴びたシャワーの水は、常より高い気温のお陰でもう乾いてしまっていた。誰かがフェンスにかけるタオルのお陰で日陰になるソコでは、それ故に程よい心地で待機することが出来たのだが……。

「ちよつと、ちよつとちよつとお！ なアにやってるっスか！」

見渡せば広く純白なプールサイド。良く掃除されているのか、コケ一つ生えては居ない。ゴミの一つも存在しておらず、さらに透き通る水が張るプールは側面や、底の蒼さを見せて鮮やか。見ている私まで清々しく、爽やかな心境にさせられた。その中には、E、F組の女子が合同でプールの授業を受けているが、自由時間となる現在ではもはや授業と言って良いのかわからない程楽しげに騒いでいた。

その中で、ふと私の不在に気がついた二人の女子が、濡れた髪を掻き揚げ、或いは後ろに流しながら此方へと近づいて声を上げる。透き通るような軽い声は、まるで未だ声変わりのしていない少年のようだった。

小鳩明子(こばとあきこ)は座り込む私に視線を合わせるように、腰を曲げて前屈気味に顔を覗き込む。水着がたるむ胸元は、たっぷり吸った水分によって重量を得て、そこから重力に引っ張られて露出する。豊満気味、と言うのが正確であろう発展途上の乳房を惜しげもなく見せ付ける彼女は、そのミニマムな等身を持ったために、胸のサイズは相対的に大きく見えていた。

私は彼女の、その丸っこい眼を真赤に充血させて此方を見るとどこか人懐こい顔だけを見て、その下の視界を意識的にはじき出す。が、ただの人間である私にそれは不可能であり、故に少し上向きに顔を上げて彼女の言葉を耳に入れた。

「せっかくのプールっスよ！？ 何やってんスカ！」

久しぶりの散歩に喜ぶ子犬のように、笑顔を貼り付けたままの顔で怒鳴りつける彼女には威厳もへったくれもあつたものではなく、その言葉は一切の威圧をもたらず事も、ましてや私の心を動かす事は決して無い。

「プールは苦手なんだよ」

だから彼女の誘いを断固として拒否する。と、今度は傍らの、長身の子がしゃがみこんで私を見た。流石さすがに琴已はその長い脚を胸にひきつけるように座り込み、その太腿を拘束するように手を組んだ。

「お遊戯でやってるんじゃないんだよ！」

そう笑いながら口にする彼女であるが、泳ぎ疲れたようで自分の膝にへたり込んでいた。そんな琴已を見て小鳩は慌てふためき、彼女の腕を引っ張り挙げる。どうにも遊び足りないようで、この調子では一人果敢にプールに飛び込むのも時間の問題だった。

私は相変わらず反応の薄い第二の私を意識の外側へと追いやりつ

つ、結局一人でプールへと飛び込む小鳩を見送った。誰よりも綺麗なフォームで水に入り込み、予想以上に静かな水柱は、それでも授業を受け持つ担当教師の注意を促す。今日は体育教師が休みと言う事で、競泳水着の上に白衣を羽織る女性養護教諭が日陰に立ち、小鳩を指して声を荒げていた。

立ち上がると、競泳水着によって締め付けられている筈の胸が大きく揺れる。ここで男子生徒が居たならば感嘆の声を上げて立ち上がり拍手を掻き鳴らしていたであろう等と考えていると、彼女は注意の最中で、まるで言葉を忘れてしまったように口を開けたまま停止する。その目はある一点を見つめたまままで静止して――。

「とにかく、小鳩さん？ 次に飛び込んだら水に触れさせませんかね！」

なんて適当に纏めながら、更衣室を背にする位置から私へと身体の向きを変え、ぺたぺたとプールサイドを踏みながらこちらへと歩み寄ってきた。

――余談であるが、彼女は一応、私の正体を知っている。その上で監視官として体育に参加しているのだ。だから私は緊張する。もしかして彼女の目に留まるような事をしてしまったのかと、反射的に想像してしまう。だが私はそんな危機を回避してこのフェンス際にて待機をしていたのだが、それ故にこの視線がいやらしいものに見えてしまったのかもしれない。

そんな事を考えていると、まるで入れ物でもしているかの如く不自然に揺れる胸を携えて、学校医である彼女は私の正面にやってきたわけである。

「……杉林さん。あなた、授業が始まってから一度もプールに入っていないわね？」

「え？ まあ、あのその、なんといいますか……」

私の斜め手前では、琴巳が何事かと首を傾げてこちらと、彼女とのやりとりを見ている。学校医は自分が眼鏡からコンタクトレンズに変えたのも忘れたように眼鏡のズレを直すような仕草をしながら、

私が見つ鋭い眼光を放つ瞳を見据えていた。

胸はドキドキと弾み、緊張のせい、か、生命の危機を感じたのか、私の血液はあらぬところに流れ始める。嫌な予感が鼻を掠めた。

「まずは私の正面に立ちなさい」

膝を抱く私の腕をひっぱる彼女には、しかし強制力は存在していなかった。ただそうしてほしいとダダをこねて母の袖を引くようなか弱さで腕を引いたのだ。私はそれを拒否する理由はなく、元氣と力強さの息づく分身たる私の位置を頭の隅で意識しながら、やがて更衣室側へ向く彼女の正面に私は立った。

――プールの作りは、まず飛び込み台側にシャワーがあり、その奥に更衣室が控えている。更衣室の中にはさらにシャワー室が存在するが、一先ずソレはおいておこう。そして側面、飛び込み台に立って左側には体育館が聳えており、右側には広いテニスコートが存在する。正面には雑草が生える、いわゆる裏道のような、恐らく使わなくなった陸上競技の用具やらが放置されているだけの場所である。そこはそう広くはなく、二、三人がやっと横になれる程度の幅で、そもそも人気の無い場所であるのだが……。

「……私が言いたいことが分かるのならただ頷きなさい。私がして欲しい事が分かるのなら首を横に振りなさい」

私の気まづげな表情が曇ったのが認識できたのであろう。彼女はそう口を開いて、私から逃げ道を断って見せた。その中で、相変わらず琴巳は体育座りのまま、私と彼女のやり取りを眺めていた。

――私が彼女の肩越しに見るのは、その裏道側のフェンスの右隅にある金属的光沢。正確には、何かが太陽光を反射しているのだろう。そして目を凝らすとそれは黒い何かに包まれているようで、それ故に、私にはそれがカメラに見えた。一眼レフと言うのだろうか、正直カメラに精通しているわけではない私には詳しい分類が分からないが、よくテレビや雑誌で見かけるもののように、私の目には映っていた。

そしてそのカメラのレンズが向くのはプールの方向。その主はカ

メラを覗き込んでいて顔までは分からないが、恐らく男子生徒かそこいらなのだろう。

しかし今の時間帯は授業を行っているはずである。保健室に居ない彼はそれ故に、どのクラスの誰なのか特定されやすい。何の断りもなく授業をサボる生徒もいるであろうが、この時間に偶然数十人が授業を無断欠席するなんて可能性は限り無く低いと見てまず間違いはないだろうから――彼女が今私にさせようとしている事は、多分無駄足になる。

後で調べて、呼び出し、話を聞けば良い。それが堅実で、今は下手な問題を起こすよりやりやすい。動いて事を大きくすれば、知らずに済んだ事を知ってしまう者が増える可能性が大きいのだ。そして一部ではそれ故に心に傷を負うものも出るかもしれない。

だが今それを告げるには余りにも時間が無さ過ぎて、そしてあまりにも、学校医だというのに彼女は感情的過ぎた。

「いやあ、なはは。良く分かりませんが」

だから今は誤魔化して、少しでも長く時間が過ぎるのを待つべきだろう。確かにこの状況を隠れて撮影するなんてのは犯罪だが、今は何よりもスマートに解決する事が先決だと思うのだ。しかし何故だか、彼女の眉間には皺が寄る。多分、彼を擁護しているように捉えられてしまったのだろう。

「冗談じゃない。分かってもらわなきゃ困るわ!」

ヒステリーな叫びは必死に抑えているだろうその喉の奥から僅かに漏れる。これ以上彼女の意見を否定すれば、恐らく行動する異常に面倒な事になる事は容易に想像できた。だから私は、彼女を怪訝な顔で見ながら、溜息混じりに首を振る。そして更衣室へ振り向くと、掛けられている時計は授業の残り時間はあと三〇分であることを知らせていた。

「わかりましたよ……、その代わりに、授業はちゃんと出席した事にしといてくださいね」

私はわざとらしく面倒そうに答えてみせる。それからクラスの女

生徒たちが使う更衣室ではなく、荷物や道具置き場、あるいは教師の着替え場となる部屋へと足へと運んだ。その中で、琴巳に何かひと言添えておいたほうが良いかと思われたが、何を言うべきか考え付く前に、私はその扉の前に到着してしまった。

気がつくと背後には学校医が付いて来て居た。

「カメラは少なくとも破壊しなさい」

さらにそう言って、私の仕事内容を増やしていた。

「つーか、あんだけ騒いでんのに盗撮犯がじつとしてつかよ……」

さっさと制服に着替えなおして駆け出すこと数分、テニスコートの外周一回りをほぼ全力疾走で走り抜ける私は、それでも鍛えぬいた肉体のお陰で息切れ一つ起こさずに涼しい顔で裏道へと到着する。そこは舗装もされていない砂利道で、腿までのオーバーニーを履いていなければ雑草によって擦り傷を無数に付けられてしまいそうなほど、草は鬱蒼としていた。さらに学園の敷地と外とを隔てる高いフェンスの傍に高い木が聳えていたり、その根元に履き捨てられたらしきスパイクがいくつか転がっていた。

私は足音を立てぬように歩みを進め、やがて楽しげな笑い声が大きくなって耳に届き始める頃――。

コンクリートの土台に身を隠すように屈みこむ男子生徒は、果たしてそこに居た。

照りつける太陽はじりじりと肌を焼く。走っているよりもただじっとしているほうが、額から汗が流れやすかった。私は手の甲で汗を拭いながら、気配を殺し、息を潜め、ある程度まで距離を縮めると、その場で片足を胸までひきつけて、振り下ろす。私の革靴は力強く地面を叩き、砂利が弾ける音がした。

男が驚くように肩を弾ませる。

私はその反動を利用して高く跳躍。男がこちらへ向く動作の中、それよりも早く私は男の背へと回り込んだ。

恐らく彼の視界の端に私の半身が映っているのだろう。だがどち

らにせよ、今彼は私の存在を認識している。だから、接触した際に驚いて声を上げることはもうないだろう。そして今騒げば、状況的に不利なのは明らかなのだ。彼が大きな行動に出ることは無くなった。

そして――。

「ちっ！」

小さな舌打ちと共に、沈んでいた男の腰が浮かび上がる。手にしたカメラをそのままに、地面に置いたままのバッグへと彼は手を伸ばす、がもう一度の跳躍で、今度は背へと肉薄した私は、そのまま彼の肩を掴み、後ろへと引いた。

男は瞬く間にバランスを崩し、息を付く暇もなくひっくり返る。そこでようやく、彼が小太りなのを認識した。単色だけで色づくネクタイは飽くまでクールな空の色。それは第二学年を意味していた。ちなみに私は紺色であり、勿論一年生である。

私はその胸元から生えるネクタイを素早く抜き取ると、丸めて男の口の中に詰め込んだ。そして仰向けに寝転がる彼に動く暇も与えず馬乗りになり、垂れる両腕を、両足を以って封じ込めた。

さらに顔を見られぬように、大地に顔面を押さえつけるように片手で覆い、辺りに転がっているはずのカメラを探す。と、直ぐにソレは見つかった。彼の顔の脇に転がっているソレを、私は男の顔に体重を掛けつつ、もう片方の手でそれを広い、顔の高さに持ち上げた。

重量感があるそれは、装甲が確かな金属で作られている為だった。トイカメラだと思っていたが、随分としっかりした構造を持っているらしく、ただ覗いてシャッターを切り、フィルムに焼き付けるタイプでは無い様に見えた。どうやらデジタル要素が入っていて――なんにしろ、これを破壊するのは流石に傍若無人すぎて、申し訳なくなったのである。

これなら挿入されているSDカードさえ奪取し提出すれば、現状はとりあえず解決する。後はあの学校医が彼を呼び出すなりなんな

りして、彼自身の処分を決めればいいだろう。なんにしろ、私自身この男にはなんの怨みも無いのでどうでもいいのだ。いくら盗撮犯だとしても。

「いやあ、すいません。ちょっと中、拝見しますね」

騒ぐに騒げぬ彼はただじっとされるがままにジツとする。私は男の顔から手を離して、カメラの背面についている画面を見ながら操作を開始する。カメラの種類が分からなくとも機械の操作はある程度理解できる私は、少し弄って――水着の女の子の画像がサムネイル形式で表示される画面を映し出す。

全ては今日の授業に参加している生徒ばかりが被写体となっていて、どうやら盗撮は今日始めたばかりなのだろうと思われた。準備体操から始まるその画像は、僅か二〇分と経たずに既に二、三〇毎に上っているのにもかかわらず、私の画像はただの一枚も存在していなかった。その代わりに、妙に小鳩の写真が多かったのが気になった。

「ただの盗撮魔か、それとも……」

ありがちな、いじめで先輩達に盗撮を強要されているのか。

まあ、そこらへんは私が関与すべき場所ではない。そのくらいは踏まえているし、どちらにせよ、首を突っ込むには面倒なのだ。

男は私が呟くとネクタイを口から吐き出して、眩しげに私を見上げる。恐らく逆光にでもなっているのであろう。

「と、盗撮なんてしてない……こ、これは、げ、芸術……」

「被写体の許可がないままに写真撮れば盗撮なん……のよ。おわかり？」

「お、おかわり！」

嬉しげに開く口にレンズを突っ込み、フラッシュを焚いて接写する。眩い光が辺りを照らす、この太陽の下ではそれはささやかな瞬きにしかならなかった。

「残念ながら、これを黙っているかわりに、なんてエッチな展開はないから覚悟しておきなさい。ヒステリックな養護教諭が最後の

良心を持っていて、公開処刑されない事を祈るだけよ」

カメラを抜くと、粘る唾液が糸を引く。既に汗に塗れる彼は髪を濡らし、呆然と私を見上げていた。最初から抵抗する気がないのか、力が無いのか、膝に踏みつけられる両腕はびくりとも反応が無い。

それから私はカメラ側面の突起を押して、中の小さなチップのようなカードを引き抜いてから、カメラを彼の頭の脇に置く。内蔵フラッシュメモリさえなければ、これで完全に画像データは失われた事になる。

任務は完了だ。

「名前は聞かないし、これ以上関与しない。これは希望だけど、そっちもそうしてくれれば助かる」

恐らくそれはないだろうが、念のために釘を刺しておく。今回の事に対して彼が行動することは、全てにおいて彼にとっての不利益なのだ。あるとすればこのカードを取り返すこと。直ぐにバックアップを取って保存し、ダミーを返して晴れて解放、というのを目論むだけだろう。

「お、俺は早嶋郁漏^{はやしまいくろう}」

「ああ？ だから？」

「お、お、お名前――」

「先生！ ここに誰か居ます！」

「つくそ、面倒臭えッ」

少しばかり騒ぎすぎたのか、上方向から女生徒の声が降り注ぐ。

私は行き場の無い怒りを吐き捨て、男から降りると、そのまま羽交い絞めるように彼を拘束し、来た道へと全力で引っ張り込む。――

――無数の足音がこちらへ近づく。勿論裏道から響くものではなく、裸足で床を叩く、プールサイドからフェンスへと肉薄するものだ、が。発見された時点で全てが終わる現在では、無駄に焦燥を掻き立てるものに変わらなかった。

彼を引きずると砂利が音を立てる。さらに痛い痛いと言き言のように呻く彼は正直鬱陶しい。そして近くの物陰まで数メートル。恐

らく数秒もあればプールの連中から発見されてしまい、その距離は到底数秒ではたどり着けないものだった。

——この男を見捨てるか？ 社会的に考えれば当然な選択だ。そもそも私がこいつを助ける義理はない。

どうする。どうする。どうする。

焦燥は鼓動を速くする。

男を拘束する腕に力がこもる。足腰の疲労はより蓄積された。

動きは力強く、そして鈍くなり始める。足音がより大きくなった。心臓が破裂しそうだ。今すぐに呼吸を止めてしまいたくなるくらい苦しくなった。

「先生、ここに——」

やがて声が聞こえる。

私は諦めて、全ての動きを止めた。拘束していた腕を放し、男は小さな音を立てて再び地面に落ちる。私も流石に、地面にへたり込んだ。

もうどうにでもなれ。

「……あ、れ？」

そう考えた途端に、雰囲気が変わる。鬼の首に刀を添えたような強気な声は、瞬く間に、泣き出す寸前の赤子のような不安さへと変わっていた。

「人？ どこにも居ないわね」

学校医の声が凜と響く。事情を知っている私には白々しく聞こえたが、彼女は彼女で事態の收拾をするという程度の理性はあるらしい事がわかって安心した。

やがて女生徒が集まると、様々な憶測が行き交った。宇宙人から、超身体能力を持つ超人、次元転移できる人間だったり、幽霊だったり。なんだかんだで見間違いに落ち着いて、腑に落ちないという声で第一発見者は納得した。

——どうやら火事場の馬鹿力、というものが発動したらしい。気がつくとは私はプールサイドのフェンスからは到底見えはしない

物陰まで移動していて、鬱蒼とする草に包まれていた。男はというと、私より少し離れた位置にいるものの、同じく草を纏い、見事に姿を隠していた。

安心すると、心臓は大きく弾むと、やがて緩慢に、通常の脈拍に戻り始める。私は深呼吸をして、心を落ち着かせた。

「はは、命拾いしたな」

——男は自分の立場も忘れたようにそうつぶやいた。

なぜ私がこいつの社会的地位を守ってやったのか、疑問と共に怒りが湧いてくる。

それと同時に、立ち上がった彼はどこか清々しそうな顔で私を見ていた。

「その声、やはりキミか”ミチオ”」

巨漢が壁のように立ちはだかる。肉体からは凄まじい熱気が肌に伝わってくる。

「ミチオって……まさか、ゲーセンの？」

「タミヤだ」

「おおい早嶋あ！ 写真はとれ……って、え、誰？」

まだ授業中だというのに、後ろからまた新たな闖入者の声がした。

「ああ会長！ 写真はバッチシなんですがね、ちょっとばかしミスっちゃって」

「見つかったのか……。その女生徒、これには少しばかり訳があってだな。実は病気で寝ている私の妹がどうしても水泳の授業風景が見たいって——」

背後の闖入者が覗き込むように私を見て、そして言葉を失ったように硬直した。

私がなにやらその行動がひどく癪だったのにらみ返せば、会長と呼ばれた——見覚えのある彼は、どこかのお坊ちゃまのようなマッシュルームカットを乱してたじろぐ。それほどまで嫌な目付きをしていたのかと、今度はぎこちなく微笑んでみれば、彼はさらにたじろいだ。

「盗撮は立派な犯罪です——といっても、私はただ保険医に頼まれて来ただけです。言い訳はそちらにお願いしますね」

「おいミチオ、聞き分けの悪い事を言うんじゃないよ」

「ミ、ミチオ？ 男なのか、彼女は」

「え？ いや、ちょっとした知り合いで。ゲームでのニックネームですよ。先輩と良くゲーセンに行くんですが、そこでちょっと……なあ、少尉殿」

「恥ずかしいんでリアルでそういう事言うのやめてくれませんか？」

うんざりしたように肩をすぼめると、本名不詳のニックネーム『タミヤ』の彼は、先程までの酷く情けない醜態はどこ吹く風といった風に、まるで私がその現場に居合わせずに観ていなかったように、白々しく格好を付けていた。

いわゆるモデル立ちで、腰に手を当て髪を掻き上げる。しかしその姿は暑苦しく、注視することが出来なかった。

「それでタミヤさん、この会長とやらは？」

「あっはっはっは！ 会長お、威厳なさすぎて存在忘れ去られてますよ！」

先ほどのまでの挙動不審な早嶋の姿は何処へやら、さっそく威厳を振りまいて豪傑に笑い出す巨漢は贅肉を揺らし、全身から排熱するようだった。

「会長に……副会長が、あんたですか」

生徒会長室に呼び出されたのは、その放課後だった。

先程のマッシュルームカットが特徴的な男は生徒会長であり、先日ゲームセンターで世話になった『少佐』は副会長として、事務机の上に腰をかけていた。

これみよがしに胸元を開け、そしてスカートから図太いカモシカのような脚を露出する姿は痴女的なアレなのかと思ったが、単に暑いからという理由らしい。

会長はよくコレで理性を保っているものだ。

そして私の隣に位置する早嶋は、自慢の一眼レフカメラを没収されて閉まったために肩を落としてうなだれていた。

「申し遅れたな。あたしは坂詰衛さかづめゑむろ。この学園の生徒会長補佐を務めている」

「ああ、どうもよろしく……っていうかですね、広報のための写真を撮るならあんな盗撮まがいをしなくても良かったんじゃないですか？　しかもですね、問題は全て教職員方に移行しましたので、私はさっさと帰りたいんですが」

「勘違いをしてもらっては困るがな、君」

傍らで太っちょが吠えた。

一つだ、と中指を立てる彼はおそらく天然だとかそういった微笑ましいデブではなく、調子に乗っただけなのだろう。

「写真を撮られているという意識の一切を排除するために行動を選ばなかったまでだ」

「うるせえ変態」

「決してやましい気持ちが無かったわけではない」

「だから小鳩ばっか撮ってたのか」

「趣味の範疇だと答えておこう」

「やろう、この変態！」

やるせなさそうに言葉を返す中で、腕を組んだり、ケータイをいじったりする会長らはそれらを止めようとはしなかった。

そういった応酬もそこそこに会話は終わると、それに反応するように、坂詰はこちらに向いた。

「その身体能力を我が生徒会で活かさないか？」

「なぜ生徒会で身体能力が注目されるんですか？　風紀委員ではなくて？」

食い気味につっかかってみる。理由は、保健医にも散々な誤解を受けてからの現在だからストレスが溜まっているためである。鬱憤晴らしのため、といっても過言ではなかった。

ケータイを机の上に置いて、今度は会長が立ち上がった。

「理由はない。君に来て欲しいんだ」

「……帰っていいですか？」

「仕方ないな。補佐が許可しよう」

「ありがとうございます」

「じゃあなミチオ」

「ええ、さよなら」

——本当に何を目的として呼ばれたのだろう。

そんな奇妙な接触は、何故だか”コネクション”となって私の回りにまわりつくことになった。

嵐の中の静けさ

窓から差し込む赤い夕日は、教室内の全てを朱色に塗り替える。教室と言ってもそこには生徒のための勉強机が並ぶわけではなく、元は空き教室だった場所である。現在ではとある部室として使用されており、部屋の中心に長机が向かい合って置かれるだけの、殺風景な場所だった。

部活動名は『架空人生共有会』かくうじんせいきょうゆうかい。活動内容は未だ不鮮明である。

そんな教室の中、窓を開け、そこから身を乗り出すようにして黄昏る少女は、そよぐ風になびかせる長い髪が良く目立つ。最も、背を向けているのだから当然だろうといえはその通りだ。

その透き通る金髪は、だが今の時間帯にその色を見せる事無く夕日の色に染まっている。そこから斜め後ろのやや離れた位置に立つ、腰までの黒髪が似合う優しそうな少女は何をするでもなくただ彼女を見守っていた。

二人はそうしたまま、風によって髪はなびくものの、自身の意思では何一つとして動かない。かれこれ数分、この状態が続いていた。この部室は、文化部棟と呼ばれる、校舎から少し離れた位置に建てられる二階建ての棟の一室である。

階下では、誰かの笑う声が聞こえる。酷く楽しそうで、限り無く日常である雰囲気や壁や床を通して感じられた。過敏にそれらを感じることが出来るのは、ここが人気の無い二階の奥地に部室こくがあるためであろう。その上、空間が静寂に包まれているのが手伝っていると考えて間違いない。

「風が啼いている」

たそがれ乙女は口にする。

部室内は温度を下げたような気がした。その意味は決して良い意味ではないし、この表現をいい意味で使っているところを見た事が無い。捉えるのも稀だ。

気がつくとも表情を強張らせている同級生は、私の正面の席に座ったまま、気まずいようにこちらをチラチラと窺ってくる。私にどうにかしろと言っているのであるが、この会話に突っ込んでいく果敢さも勇猛さも、残念ながら持ち合わせていなかった。そもそもこれは会話になっているのであろうか。いや、これからそうなるのだろうか。

「もう間も置かずに”奴等”の時間が訪れる……気を引き締めろ」
サッシに両手を付いて、押し出すように身を弾いて窓から離れる。するとふわりと髪は浮かび、彼女は流れるように此方を視た。

緊張は走らない。その変わりに嫌な予感がした。授業中に先生と目が合うような感覚だ。うげえっと言う感じで、私は思わず顔を反らす。だが無論、そんな行為は無駄であった。

「……もう日暮れだ」

何かを促すかのように、何を求めているのかも分からぬ言葉が飛来する。どうすりゃいいんだと嘆く暇すらも与えぬ威圧が胸に突き刺さった。私は救いを求めてもう片割れに視線を流すが、彼女は依然として、窓付近の少女を見つめたまま動かない。視線は完全なる一方通行を作り出していた。

ならばと、正面の同級生”栗田栗子”あわたりんこをチラリと見るが、先ほど無視したのが崇って今度はそっぽを向かれてしまっている。これが世に聞く四面楚歌という奴か。

私は腹を決め、大きな深呼吸の後しっかりと彼女を見据える。この眼は凄まじく勇ましいものだろう。

「ああ、そうですね……この世界では、もう日暮れです」

がたりと音を立てて、椅子を足で押し出すように引いて立ち上がるのは私である。彼女等みたいに長い髪を持たぬ私は揺れるのが一枚のスカートだけになるが、別段羨ましいだとか憧れるだとか言う事は無かった。

「ならまた後日、という事になりますね。夜になってしまっは、貴方に、私に、フェアじゃなくなる」

ふっ、と彼女は笑い、今度は窓の縁に寄りかかる。腕を組んで余裕を体現してみせる彼女は、さらに鼻で笑うことで圧倒的な優位さを見せていた。主観的にも、そして恐らく客観的にも。

私は右手を腰に当ててモデル立ちをするだけで精一杯だから、一目で私がただの雑魚だと見て取れてしまうのが悲しいところだ。

そこで漸く、手を二度叩く音が響き渡る。音の主は、黒髪の乙女だった。

——その音で身体がやっと弛緩する。硬直していた筋肉は込められていた力を解して墮落し、崩れるように席に座り込む私は、そのまま上目遣いで二人の先輩を窺った。

霜月京子は薄い笑みを作って、窓際に寄りかかる身体を起こして此方に向かい、やがて私の背中側、席にして横の位置に腰を落とす。御堂珠樹は夕日にさえも映えてしまう黒髪を揺らしながら、リンコの傍らの席に着いた。私は正面を向きなおし、ほっと短く息を吐く。私はリンコと、御堂は霜月と向き合う形で一旦落ち着き、それから御堂が流れるような自然さで口を開いた。

「大分慣れてきたみたいね。違う自分を装うというのは、演技と同義語というのは分かってもらえたかしら？」

それぞれの席の前、机の上には紅茶が注がれたカップが並べられている。既に数十分も前に淹れられたものなのだが、口にしてみるとまだ温い。熱い方が美味しいのかもしれないが、猫舌である私にとってはこの程度が丁度良かった。

私は口に含んだ紅茶を飲み下しながら頷き、それから口内が空っぽになってから返答する。

「ええまあ、先輩方の指導のお陰ですよ」

なははと笑い後頭部に手を当てながら反り返る。そんな私に誰一人として視線を止める者は居らず、それから額に滲む汗を拭いながら、顔に掛かる髪を後ろに流して両手を膝に置いた。

——季節は初夏。六月の半ばである。故に制服は夏服。皆ワイシヤツを着用するだけの薄着となっており、人々の、主に男子生徒の

感嘆を煽った。

確かに、今年の夏は暑い。春の時点で例年より五度ばかり気温が高いと天気予報士がのたまっていたのだ。そしてその通りに汗はにじみシャツは身体に張り付く。学校指定のワイシャツは透けて、下着が人に見えてしまうほどである。それでも私は愛用のニーソックスは決して脱がない。なぜならば、若干筋肉質な脚が露になってしまいうからだ。しかしそのせいで周囲から寒がりだと勘違いされてしまい、私だけ暖かい紅茶でもてなされてしまっている現状を持っていた。

「あ……空、曇ってきましたね」

リンコが何もしていないのにもかかわらず冷たいストレートティーで喉を潤して何かをほざく。ふはは、その紅茶は既に温いだろうと腹の中で呟きながら、私は頷いて窓へと視線を投げると、先ほどまでの夕日は黒煙が如き雲によって遮られようとしていた。

「そういえば今週中に入梅すると聞いたな」

「そう、残念ね……。ちなみに皆、傘は持ってる？」

「いやあ、ちょっと持ってないです」

「私は常に備えて折り畳みを持っています」

それじゃあ、と御堂は立ち上がる。流れるように霜月も、席の脇に置いてあるカバンを机の上に置いて起き上がる。私達も促されるように席を立ち、カバンを手に持ち、或いは肩に掛けた。

「雨が降ってしまったわないうちに帰りましょう。どのみちいつもより今日は遅いし、仮に降雨に見舞われても、私と京ちゃんは帰り道が一緒だし、ミズキさんにはリンコさんが付いているし、ね？」

恐らく御堂の方が傘を持っているのだろう。否、二人とも折り畳み傘を所持しているのかもしれない。いや、普通に考えれば置き傘という手段を持ち合わせている可能性もある。なんにしろ、この二人が不測の事態に困り果てるという状況を、私は想像できなかった。常に優しく、常に冷静である二人である。このまま完璧人間人生を貫いて欲しいと思うほど、欠点が見られなかった。

そして私は傘を持っていない。リンコは持っている。

つまり私の為に、通常より早くの部活終了を決めたのだ。たった今”どのみちいつもより遅い時間帯だし”と言っていたが——ともかく、なんとなく申し訳なくなる話である。仮に私が部長だったら、構わず雨が降るまで部活を続けていたであろう。そしてその後輩へと傘を手渡し、というか半ば押し付けるようにして豪雨の中を走って帰る。恐らく批判はご意見箱一杯に溜まるだろう。

かくして私達は、やがて完全に夕日が燃え上がるが如く真赤になる頃、東の空が夜の色以外に侵されるのを見ながら下校するのであった。

——自宅の最寄り駅に到着すると、既に空は黒雲に塗り固められていて、さらに冷たい、否、生温かい雨を降り注いでいた。水滴は力いっぱい叩きつけられるように弾けて音を鳴らし、点ではなく線を描く降雨は視界を白く染める。

多くの人々はその時点で駅入り口で立ち往生しざわめくが、私はいうと、顔の前で両手をあわせ、且つ頭を垂らしてリンコに念仏を唱えていた。

「リンコさんリンコさまどうか哀れな産子が如きか弱きこの私めに雨風を防ぐそのちっちゃい折り畳み傘をお分けたまえ」

「神様に守ってもらいなさいよ。って言うか、ちっちゃいから二人も入れないし。こんな豪雨じゃ尚更よ」

確かに彼女の言葉通りこの降水は豪雨であり、入梅というよりはただの夕立である。

彼女は心底嫌そうな顔でそう告げると、カバンからさっさと取り出した折り畳み傘の拘束具を外して、中棒に手を添わせるように傘布の中へ手を突っ込み、今正に広げようとする体勢のまま人ごみを掻き分け駅を出ようとする。

私は焦る心を奮い立たせ、独り残される恐怖に、あるいは雨の中一人で帰らざるを得ないかもしれない孤独さに震える手を精一杯伸

ばして、なんとか彼女の肩を掴み、引き寄せる。人ごみ突入前だった彼女は誰に迷惑掛ける事もなく、驚いた顔をして私の元へ舞い戻ってきた。が、何故だか彼女の頬は、朱色に染まりつつあった。外はもう暗いというのにも関わらず。

ぱっと手を離して彼女の身体を自由にすると、彼女は少しばかり顔を赤くして、それから短く息を吐いた。

「今日は父さんが遅いらしいから、帰り道にスーパーに寄らなくちゃなんだよねえ」

「もう——わかったって。でも、背はアンタの方が高いんだから傘はそっちが持ってよね。無論、私最優先で」

「はいはい」

「ハイは一回」

「あいよ」

なんだかんだで押せば願いを聞いてくれる彼女は、なんだかんだ言って優しいのだ。中学時代からの友人はこうだから中々縁が切れなくて困る。勿論、損得勘定だけの仲では決して無い。

私は人を掻き分け、彼女の手を引き、やがて傘を広げて歩き出す。手を引いたのにもかかわらず、彼女がその手を自主的に弾いたが故に数歩遅れて、その為に少しばかり濡れて防水領域内に入り込む彼女は、冗談交じりに後頭部を叩き抜けた。

視界は開け、いつもより人通りの少ない駅前が広がる。そしてそう間もおかず、私達は近くの大手スーパーへと入店した。

——自動ドアが快く迎え入れる。緩慢だと受け取れる動きだがストレスを感じさせない程度の速度なので、私は素早く入り込んでカゴを手にする。傍らでは一歩遅れて入店するリンコが、早足で私に追いついて来た。

「何買うの？」

「何がいいかねえ」

彼女の問いに対する返答は適当にして、正面に大きくプッシュされる旬の果物の陳列台を華麗に回避して、右脇の常に水蒸気が噴出

されているが為に潤っている野菜の、その陳列を眺めて歩く。が、今現在特に野菜は切れていないことを思い出した。

「ああそう、トマケがもう無いんだよ」

「は？ オマケ？ なんの」

「トマケだよ。トマトケチャップ」

小バカにするように聞き返す彼女を、その上から愚者にんげんを見下す神が如き視線を重ねて返す。彼女は「はぁん」なんて分かったかわからないような気の抜けた、聞きようによっては外人の相槌みたいな返答で済ませた。何か気に喰わないが、リンコ補正で許す事にしてあげよう。

それからすぐさまケチャップを発見し、その中で特に高くも安くもないものを選んでカゴへ。それから彼女の要望で、菓子売り場へ直行した。

その移動の最中で色々手に取っていたら、かごの中には既に今夜の夕飯の食材が揃っていた事に気付く。これで彼女が適当に菓子を選べばレジへ行こう、などと考えていると、ぼうっとしているのかと思ったのか、彼女が肩を叩いて私の意識を呼んだ。何かと思ってそちらへ顔を向けると、彼女は私の視線に合わせるような高さに、昔懐かしのシールのオマケ付きウエハースチョコを上げていた。なんだか健気な子どものする行為に見えて、ちよっと心が揺らいだのは秘密だ。

パッケージにはなにやら剣や鎧で武装した青少年たち。ファンタジー風味である。私はその中の、丸まったような角を生やす悪魔っ娘が可愛いと素直な感想を漏らすと、あからさまに軽蔑する視線が胸に突き刺さる。なにやら心外だった。

「これに対する感想なんか聞いちゃいけないの。聞きたくもないし」

「でもリンコの方がもっと可愛い」

「あら、ありがとう」

「とか言われたかった？」

鋭い拳が腹に食い込む。私の瞳は上向うわいて、さらに一回転してし

もう勢いだった。内臓が押し込まれて息に詰まり、指先からは力が抜け、だが私はそれでもカゴを落とさず踏ん張った。

私は涙目になって彼女を睨むと、悪かったわ、なんて簡単な謝罪と共にお腹をさすってくれた。しかしこんな程度でプラスマイナスゼロになったと勘違いされてしまったては困る。私が軽い女だと勘違いされてしまうのではないか。でもまあ結局、彼女の怒りを促したのは私なのだから、許してあげよう。イーブン、と言う奴である。

「いや、別にシールも集めてないし……」

ウエハースチョコはなんかパサパサするのでそもそもあまり好みではない。

「でもこの前、あったじゃない。机の中に」

「何勝手に見てんのよさ」

「懐かしいなあゝって自分で見せたんだわさっ！」

言われて見ればなんとなく思い出してきた。しかし確かアレはギツクリマンチョコであって、この全裸干涉チョコとは違うのだ。それを懇切丁寧、殷懃無礼に説明を試みるものの、

「でも同じシールじゃない」

なんてトンチンカンな返答しか来ないので、私は肩を落としてレジへと向かった。

「お父さん居ないなら家でご飯食べる？ 多分お母さんは了承してくれると思うけど」

私の家はぶっちゃけると父子家庭である。母は今から大体十一年くらい前に訳あって他界してしまっているのだ。そして彼女はこんな何でも知ってる優しい幼馴染面をしているものの、出会ったのは僅か三年前なのだ。

しかし、仲が良いのでそれもあまり関係ないのだが――。

「好意はありがたいけどな。どのみち父さんに飯……ご飯作つとかないといけないし、お前ん家遠いじゃん」

「そう？ 歩いて十五分だけど」

「この雨じゃ厳しいねえ」

駅も離れて、本格的に歩行者が少なくなる。その代わりに一車線しかない道路には車が渋滞でもしているような勢い、つまり緩やかな速度で走っていた。私達はその、白線だけが引かれる歩道の内側——勿論、右側通行——で、私が傘を指しながら歩いていた。道は高いコンクリートの塀に挟まれ、いつもはその上で呑気そうに眠る猫も、空を飛ぶカラスも居ない。まあ、この雨だ。当たり前だろう。——しかし、断る理由はそれだけではない。もう腹具合は今日の夕飯色に染まっていて、且つ、彼女の家に行くとしても着替えなければならぬので、結局家に帰らなければならぬから面倒なのだ。彼女はこの事情を知っているが、恐らく彼女の両親はこの事を知らない。それ故である。

いくらこの、”女の子として認められる美貌——男勝りという系統だが——”を持ち合わせていても、一般的認識と了承とを得られるのは難しい。その事は、まだ何も起こっていない現在ですら理解済みだ。

そう、訳あって『女装』しているというこの現状を他者に認められるのは……。

——そんなこんなでリンコに家まで送ってもらった。正確には玄関である。まるで令嬢のような扱いだ。

「ありがとな」

「この借りは高いわよ？」

「んじゃ明日高い傘、貸してやるからな」

「ははっ。まあなんでもいいわ。でもま、何か困ったらなんでも言ってよね」

彼女はそう言って背を向け、我が自宅を後にする。私は彼女の背を見送ってから、パンパンに張ったスーパールの袋を手に、鍵を開けて家の中に入り込んだ。

玄関を閉めると、雨の音は少し薄れる。私は自前の肩まで伸びる髪を手で撫でるようにして掻き揚げて、ビシヨビシヨに濡れる左肩

に触れると手がまるで水に浸したように濡れた。さらにスーパーを出た頃から思っていた事だが、肌に張り付き不快感を催させいる。

「……先に着替えるか」

どうするかこうするかと、袋を玄関の端に置いてから数分間手を拱いて、それから靴を脱いで靴下を手に、けんけんぱと意を決して跳びあがろうとした瞬間。

——チャイムが家中に鳴り響いた。

「チィ！　なんてタイミタイミングの悪さだ。時間とクソツタレな機会的タイミに考えてリンコだろうが……」

頭の中の呟きを声にして、水が溜まる革靴ではなく簡単に履けるサンダルを踏んで大股一步踏み込んだ。そこで、そういえば鍵を掛けていなかったな、と思い出して——手も触れていないのに、ドアノブは自然に下に下がる。それは外側からリンコが勝手に、なんの遠慮も無く玄関を開け放とうとしている事を意味しているのだ。

なんて野郎だ。デリカシーの無いのは相変わらずで安心する。

「おいスギ！」

——そんな声は、悪態を付く頭の中の思考が全て消し去った。

ドアを勢い良く開いて、家の前の景色を遮るように立つのは見慣れぬ制服に身を包む男。短髪が良く似合う好青年は何が楽しいのか頬をにこりと吊り上げて玄関に入り込み、

「悪いな、居るならちよつと来て——」

目の前に居る私をじつと見て、硬直した。

——脳が震える。思考が焦点を合わせぬように揺らぎ、私は彼の眼を見据えながら、全身を震わせていた。だがその中で、私の心臓は確かに停止していた。同時に、全神経に電撃が走ったような激痛を覚えた。覚えざるを得なかった。今はどうにかして、このどうしようもなく混乱した感情を別の衝撃で消し去らなければならないと、本能が警鐘を掻き鳴らすよりも先に行動に移っていた。

彼は中学時代の親友、さかきじろう榊慈郎その人で——。

「お前、何、してんの……？」

私の耳にはもう何の音も入らない。びっくりするくらいの静寂を保っていた。

——今日は記録的な大雨になりそうだ。そう頭の端で考えて、私は静かに目を瞑る。

柵は瞳孔が開くその眼で、開け放した口をそのままにして此方を見る。それが私が見る彼の最後の姿だった。

——中学時代の友人は中々縁が切れなくて困る。仲が良くて、損得勘定だけでなければ尚更だ。

そういつの日か考えた私の言葉が頭の中に蘇る。現実から引き剥がされた意識は、さらにその深層下からも投げ出されて、私の意識は完全に消失した。少なくともこの数分間、私の意識が失われたのは確かである。

嵐の中の静けさ 2

私は現在女装をしております。理由は、死別した双子の姉が「高校に行きたい」と生前に特に主張していたからです。ですのその願いを果たすべく、容姿が近い私が女装し”杉林瑞希”^{すぎばやしみずき}となって『^{たまなしがくえん}霊成学園』に入学したのです。

自分の家で、自宅の居間で正座をさせられていた。テーブルを挟んで正面には爽やかな好青年が悪鬼が如き表情で此方を睨んでいる。私は髪から滴る水をそのままに、学園から帰ったままの格好で俯き、その言葉が言えずに居た。脚はそろそろ痺れ始め、指先の感覚はとうの昔に失せている。筋と言う筋が、全神経が死滅したような気がした。ならば何故この肉体は生き、頭は未だ思考し続けるのだろうか。

分からない。私は大分前から理解を放棄している。だから思考はザルのように、固まる前に零れ落ちてしまうのだろう。

「黙ってちゃわからないだろ！」

男がテーブルを叩く。破裂音のような激しい音が響き渡り、テーブル上のリモコンやらティッシュ箱やらが僅かに浮かび上がった。それは私の家の私物だ。お前のモノではない。壊れかける私はいっそう喚きのたまってもおかしくは無かった。

——学園が始まってからまだ二ヶ月ちよつとが経過しただけの、その帰り道。

私の中の全てが崩れたような気がした。コツを掴み始めたジグソーパズルを即座に踏み躪られたような感覚がした。膨れ上がる、いわれの無い感情が脳内を占める。憎しみが掌を拳に変えた。悲しみが、表情を悲壮に変えた。

だがこの拳は誰に振り下ろされるのか。この悲壮は誰に突き刺せるのだろうか。この私が、一体誰にそれを出来ようか。

「わかった、いい。なら質問を変えよう……そいつはその——^{れいえん}霊園

で通用しているのか？」

霊園。それは私が通う高等学校の略称であって通称だ。不気味で縁起が悪いものだが、皆それをそうは思わず楽しげに呼ぶ。別にタマエンでも良いのではないか？ という疑問を友人に提示してみたものの、その友人はそれ以前にどうでも良さそうだったから、求める返答は望めなかった。

彼が何故その略称を知って居るのかわからないし、正直どうでも良かった。何よりも、親友だった男をこれほどまで憎まなければならぬこの現状が何よりも腹立たしかった。

私は静かに頷く。現状で出来るのは、決して嘘を付かず、答えられる質問に返答する事だ。

「なら、まあいい。学校の先生は？ 黙ってんのか？」

首を横に振る。榊はふうむと顎に手をやり、小難しげな顔をする。彼がこんな顔をするのは、一年前、私が塞ぎ込むように落ち込んで居た時以来だった。

彼はいい奴だ。底なしのお人よしだ。運動神経は抜群で、顔が良くて、勉強が私より出来ない馬鹿野郎だ。何があっても自分の第一ボタンを外さないくせに、お前には似合うと私にちよつと悪ぶった格好をさせたがる男だ。

言いたくない時には聞かず、相談したいときにはまるで心を読んでいるかのように言葉を掛けてくる榊が無理矢理に現状を問いただすのは、それでも今回が初めてだった。だから私の心には、驚きもあるのかもしれない。どこか、彼を裏切っているような後ろめたさもあるのかもしれない。否、あるのだ。絶対に。

だから私は、食いしぼる歯から少しずつ力を抜いて、少しずつ、ゆっくりと口を開く。そんな行動に、自分の動作に、これからしゃべるぞと言う意気込みに緊張し、心臓が高鳴った。腕が震える。頭がどうにかなりそうだ。

歯がカチカチと音を鳴らす。顎が震えて、到底言葉は話せそうに無い。腹は決まっても、身体は本能に正直なのだ。

「外はもう暗い。まだ雨が降ってる。俺は雨宿りを目的にココに来たんだ。まだ帰らねえぞ——だけど、流石に着替えようぜ。悪いが、タオルを貸してくれ。こんなトコで風邪引いちまったら元も子も無い」

「う……う、ん」

彼はあぐらをかいて後ろに手をつく。私はテーブルを支えにして立ち上がり、生まれたての小鹿のような足取りで居間を後にする。

部屋で着替え、濡れた身体を拭いて、頭はすっきりした。まるで思いつき感情を爆発させて泣いた後のようだ。そして薄手のシャツは、短パンは私を暖かく包んでくれる。最早これだけで生きていても大丈夫だと信念の籠った眼差しで総理大臣を射抜ける程、私は強く立ち直っていた。

そうだ。もう櫛に知られてしまった事は時既に遅しであるし、さらに相手が櫛だった事を幸運に思うしかない。世界は何が起こっても回るし、私の女装が親友にバレた程度ならば何の問題もなく回る。回らないはずが無い。仮に瑞希の代わりに私が命を絶っていたとしても、悲しむ人間が違っただけで何も変わらない。

だから私は彼に話そう。全てを打ち明けよう。責められようとも、慰められようとも、私はそう決めた。

この状況では誰も悪くは無い。無論彼は被害者に等しいし、私だって被害者……なのだろうか。まあともかく、私は決めたのだ。

そう考えて、腹筋を固めた腹に一発力いっぱい拳を無意味に打ち込んでから、部屋を出ようとドアに向かうと、ノックの音が二回した。だけれども、私はもう驚かない。私に二度は通用しないという事だ。

だから素直に、男の声でただ言った。恐らく、扉越しなら言いやすいだろうと配慮して、ノックはしても決して中に入っては来ないであろう櫛へと。

女装の理由と、きっかけ。交友関係。学園では無問題なこと。リ

ンコが協力してくれていること。学園側も校長が容認し、下手が起きたら根回しを約束してくれた事——その全てを、吐露してやった。彼は相槌を打ち、口を挟まずただ聞いた。ゆっくりと、考えながら、言葉を選びながら、拙いその台詞を紡ぐ私をせかす事無く、ひたすら優しく、聞いてくれた。私はそれだけで満たされたような気がした。このまま全てが終わってしまったても何の悔いはないような満足感が心に在って、私は気がつく、本当の女の子みたいにこの身を抱いていた。

目からはしょっぱい涙が流れる。いつのまにか、声は涙混じりでよく聞き取れなくなっていた。

何故涙が出るのか、これが悲しいからか嬉しいからか、私には良く分からない。直ぐにでも崩れてしまいそうな膝が激しく震えて、立っているのも私はやっとだった。

「なるほど、良く分かった。いやな、もしお前が面白半分でやってンなら……まあこりゃ良いか。なんにしろ、お前はお前が正しいと思ってるってわけだな？」

「……いや、正しいとは思って無いよ。だけどさ、やらなくちゃいけないと思ってた」

「だから俺に後ろめたさがあったのか？」

私は首を振る。だが私と彼は扉で隔てられていて、相手はそれが分からない事を思い出す。なんだかそれを誰かに見られているような気がして顔に熱を帯びるのを感じながら、慌てて問いに返答しようとして口を開くが、ははは、と言った笑い声が、それを遮った。

「まあよ、お前はいつでもふてぶてしいからなんだかんだで悪気なんてありもしないし悪いとも思わないのは知ってるけど」

がちやりと音を立てて、櫛の声はより鮮明になって部屋の中に流れ込んだ。真っ暗な自室の中に明かりが差し込み、彼は、電気くらい付けろよ、とぼやきながら壁に手を這わせて、照明のスイッチを押す。かれこれ何十回と遊びに来た友人の部屋なのだから、もう慣れたものだった。

が——彼は再び、私を見るなり硬直してみせた。
何だろう。もう条件反射になってしまったのか。

「パブロフの犬って奴か」

私は呟くが、彼の反応は無い。今度はちゃんと男物の服に着替えたとというのに。私は目に溜まる涙を手で拭い去って、鼻から空気を一杯に吸い込む。胸がすつとして、酷く心地が良かった。

大きく伸びをするとやがて全身の震えは漸く治まる。

杉林瑞希はここに完全復活を極めたのだ。果たして。今は男の姿だから違うのだが。

「なわっ……」

「縄……？ すまん、私……俺にそんな趣味は無え」

自室の照明に照らされる精悍な顔は頬を赤く染めた。風邪でも引いてしまったのだろうか。確かに濡れ具合ならば彼の方が酷かったから、それもそうだろう。彼が家に来てから、そういうばもう一時間程経過しているのだ。仕方無い。

熱を自分で感じて確かめているのか、彼は目頭を抑える。目が疲れていたのならば仕方が無いが、まずは熱を測るべきだろうと私は思った。だから私は、常に机の引き出しに備えてある体温計を取り出して、離れた袖へと投げつける。が、彼は受け取る動作もないままにただ頭にぶつけ、そのまま体温計は自由落下。軽い音を上げてソレは転がり、間も無く彼の足元に落ち着いた。

「反応鈍いぞ、何やってんの！」

「俺はお前が学園で通用する気がなんとなく分かった」

「分かるならはつきり分かれ。でも正直お前には分かって欲しくなかったな。つかお前それで赤面してんのかよ！」

「ばっ、んな訳ねえだろ！ そのふとももに騙されたんだよ！」

慌てて顔を背けて指でその箇所を示す袖から遠ざかりながら、私は自身の太腿を見下ろす。若干筋肉質で、見ようによってはゴツイ部分である。最もゴツイといっても筋肉が浮かび上がっているというほどではなく、女の子のような柔らかさが一見してあまり見て取

れないのだ。

だから私は今まで腿までを隠すためにオーバーニーを標準装備していた。どのみち、太腿の美しさならば友人かつクラスメイトの流^さ石琴已に負けるのだが。

私は奇妙な顔で彼を見ると、ははぁんと彼が恥ずかしがる理由が分かってきた。なるほど、爽やか好青年で高スペックを持つこの男は女の耐性が無いというわけではない。単純に、この私にドキンときめいてしまった自分が恥ずかしいのだ。そしてそれを意識してしまえばしまうほど、私を見れば見るほど、思考は悪い方向へと転がってしまうのだ。つまり興奮に直結する、と言う事だ。

「つか騙されたってお前、結局俺の魅力に――」

「ズボン穿いてくれないか!？」

「この蒸し暑いのにマジ勘弁。つか穿いてんぞ。短パンだけど」

「お、前な……ん？」

顔の前で手を広げ、さらにそっぽを向いて確実に私を視界に入れないように、私の部屋の前で立ち尽くす彼は何かを言いかけて、停止する。硬直したのではなく、全ての音を消すように、さらにそれを促すように黙り込んだのだ。だから私も同じように口を閉ざす。そこで何故彼がそんな事をしているのか、ようやく理解できた。

薄く、小さく、だが常に聞こえていた雨音が、途切れているのだ。私はソレを、雨が止んだのを確認するために、部屋の窓を開錠し、開け放つ。途端に嫌な湿気が顔に襲い掛かって、生温い雨の臭いが空気となって部屋の中に流れ込んだ。確かにあれほどの豪雨は治まっていたものの、小雨がまだ持続中であつた。

気がつくとは彼は私の背に立ち、同じように外を覗き込む。もう彼の緊張や興奮は忘れ去られ、解けているようだった。もしかすると、あの反応も私の心を緩やかなモノにするための演技だったのかもしれない。

底知れぬお人よしだからこそ、そう思ってしまうのだ。

私は本当に良い友人ばかりを持つ。心からそう思わせてくれる男

だった。

「あー、じゃあそろそろ帰るな。時間取らせて悪かった」

彼は私の背を叩いてから距離を取る。振り返ると、背を向けて自室を出ようとしていたところだった。

「でもここから結構時間かからなかったか？ 三〇分くらいだろ？」

小雨でも、折角乾いたのに濡れちまうよ」

「水も滴るいい男ってな」

「んな事あいんだよ。傘貸してやる」

廊下を歩き、階段を降りる。彼はそれから荷物を取りに居間へと向かって、その中で私が親切な台詞を投げかけてやると、彼はそうだと、手を叩いた。まるで名案でも浮かんだような行動である。

「お前、最初から傘貸してくればさっさと帰れたじゃねーか！」

「怒鳴られてる最中に、”傘を貸してやるからさっさと帰れ”って言えるほど、俺は凶太くねえんだがな」

「……ぬ、確かに」

彼はスポーツバッグを肩から提げて、さらに私から大きな目の傘を受け取ってから靴を履く。つま先をとんとんと叩いて踵をいれ、それからまた振り返って、今度はいつもの爽やかな笑顔を見せてくれた。

「んじゃ、また来るよ」

「ああ、良いけど……その傘の貸しは高いぞ？」

どっかの誰かみたいに、あくどい笑顔で言っただけ。その気になれば全財産を搾取してしまうぞと言ふような悪い顔だ。私がこの目で見たままにやってるのだから、そう可笑しいものになるはずが無い。

だというのに、彼は軽く笑っていた。まるで小さな子どもが大人の真似をして微笑ましい状況になったかのような、アットホームな笑顔である。

「”今回の事”で支払えば、随分大きい釣りが来るはずだけだな？」
「そう来るか……」

確かに、言われて見ればそうなのだ。

今回、彼が来なければ平穩のままであった。だが彼が来た事によって、大切な何かを得たような気がした。その上、誰かにバレた時の予行演習が出来たと考えれば、それはそれだけでも非常に大きなもののなのだ。どの状況で何が来るか。どんな返答でどんな反応を望めるか。少なくとも一つの例がある限り、それを基準に、実際のモノと近い予想が立てられるだろう。

そして長い間失われていた友情が培われた。さらに自信が、勇気が胸の奥に息づいている。

これは最早何モノにも代えがたい。リンコを失う代わりに得るものだったとしたら、少し迷ってしまうかもしれないが。

なんにしろ、彼のお陰で私が変わった。良い意味で、である。だから自分、こいつには頭が上がらないなあと、私は櫛に苦笑した。

「俺もお前も相変わらずだな。それじゃ、またな」

彼はそうして手を挙げ私にさよならをした。私は手を挙げ返し、別れの挨拶をする。やがて玄関は閉まり、完全に彼がこの家の中から居なくなつて、私は嘆息した

身が引き締まる。これからやる事の全てが全て上手く行きそうな気がした。なら明日は学園で様々なことに挑戦してみようか、などと考えて、頬が緩む。なんだか明日が楽しみになってきた。

まずは父さんが帰ってくるまでに夕食を作ってしまうおう。私はそう意気込んで、玄関に放置していたスーパ―の袋を手にも、勇ましく台所へと向かったのである。

明日は土曜日。そんな事実も忘れたまま。

体感型シミュレーションゲーム『戦場の人型兵器』

「空中反転状態から噴出^{ブースト}を利用して方向転換、だとオッ!？」

およそ考えられる人間の技術^{ひとテクニク}から限り無く離れた反応速度で、人型の機械兵器^{それ}は頭を地面に向けた体勢で宙に飛び上がったかと思うと、ふくらはぎ部分から爆発力をエネルギーとする噴出機動を行い、予想された着地地点から数十メートル離れた位置に加速する。

一二〇m滑空砲をそれまで標的が居た空へと向けていた私は、三六〇度に広がるフロントモニターに映し出されるロックオンの表示と警戒音に頭痛を促されながら、自動的に側転の回避行動を取るこの”機体”の着地動作を軽く操作してやりつつ、九時方向へと身体を向けて滑空砲を構えなおす。が、間髪置かず放たれたレーザー兵器が右腕の肩当てのような追加装甲を掠めて過ぎた。装甲の表面は溶けて固まり、熱が伝わる、装甲を固定する腕^{アーム}はその柔軟性を奪われた。

「対弾だけどレーザーはからつきしなんだよねえ、装甲^{これ}」

溶けて固まる補助腕^{アーム}は、その可動を失ったが故に強化装甲の下に収める機関砲を封じ込める。相変わらず伸びるレーザーから逃げた私は、背面から地面に飛び込みそうになる体勢のまま強く大地を蹴り飛ばし、次いで噴出^{バースト}。水平にジャンプすると平泳ぎのように宙を滑り――。

半壊したビル群が目立つそこは旧市街地。しかしそこには人など住んでおらず、放置された街並みはそのまま廃れて寂れて自然の波に飲み込まれて浄化される。故にビルは崩れ、だがその中から空を見上げると、視界には必ずビルが入り込む。似た景色が続く街中は、地図を確認しなければ自身がどこに迷い込んだかすら分からなくなってしまう程に画的であった。

そして私が操るのは、人型の戦術兵器。全長は十五メートルあり、今は強化装甲を装備するために逆三角形に鍛え込まれている。両手

で抱えるように装備する滑空砲には残り二発が残されており、予備弾倉は切れていた。

接敵。画面が赤く明滅する。

「二時の方向！」

私は叫び、高く跳躍。同時に私が居た場所に鋭くレーザーが突き刺さった。私は背にするビルを片足で蹴り飛ばして機体を前方へ突き飛ばし、空を仰ぐ敵機の頭上に移動する。そして間髪置かず引き金を絞り――砲弾は敵機の脇を通り抜けてコンクリートで固められた地面をたたき砕く。故に巻き上がるその破片と砂煙は一瞬にして機体を包み、レーザー兵器の出力を大幅に減退させる。

ビルは大きな穴を空け、さらに内部の中軸を破損したのか、ただでさえ崩壊しやすいそれは緩慢に、だが確実にその身を倒し始めていた。

「甘いつてえの」

そのまま一二〇mm滑空砲を全弾出し切り、その頭上高くまで硝煙と砂塵が舞い上がり始める頃、その煙の中から肉薄する機体を私のモニターは知らせていた。空間に固定物はなく、推進剤も心許なくなり始めた空中で、さらに私の機体は機動に特化したものではない。対弾性能ならば滑空砲を数十発受けても駆動に問題が無い程度なだけであり、さらに相手がレーザー兵装が主たるものであるのを知ってから、この強化装甲は無用の長物になってしまった。それ故に、その接敵は致命的に処理できない危機に違いなかったのだが――。

滑空砲を敵機に向けて投げ捨て、流れるように腰から短刀を抜く。同時に腰の噴出口から蓄積していた熱を吐き出し、同時に推進剤を燃焼。さらにモニターに映る装甲を選択し、排除。次の瞬間勢い良く全身から吹き飛ぶ追加装甲は四散し、巻き上げたばかりの砂塵を見事吹き飛ばし敵機の姿を露にしてくれる。

黒塗りの禍々しい悪魔が如き人型兵器。明かに私が搭乗する機体とは異質な素材と造りを持つソレは、外部スピーカーから空間が割

れてしまうかのような甲高い笑いを響かせながら肉薄し、その初期武装と言うよりは最初からそのデザインで武器としても扱えるよう造られたらしい鋭い爪を突き出した。

スリムな機体はそれ故に機動性が高い。そして私が想定した以上に与えたダメージは少ない。だから速度は——落ち始めていた。

かれこれ数十分続く戦闘だ。そしてそれに用意された武装は、豪快に言えば数分と持たぬ量が初期装備として準備されているだけである。サブウェポンはこの旧市街地内に十数と用意された補給コンテナに存在し、随時そこから武装を変更、あるいは弾薬の補給をすることになる。だが空を飛ぶ、加速する為に使う推進剤は機体に搭載されたものだけだ。

それぞれ機体によって、推進剤を使うか現代社会では説明の付かない未知のエネルギーを利用するかが異なるが、私が対峙する相手は考えうる限り貧弱な縮退炉しゆくたいろを利用していた。レーザーのエネルギーも、その銃器を手に接着した時点で供給される造りとなっており、照射は即ち機体エネルギーの消費を意味する。だがその代わりに弾切れの概念は限り無く薄れており、武装変更以外で敵機が補給コンテナを使用しないので、実質上コンテナは私の占領下にあった。

故に無駄撃ちと消費エネルギーの高いレーザー兵器のみの使用に拘る敵は、それ故にここに来て上昇の勢いを低下させたのだ。

さらに相手にその自覚はない。昂ぶる感情がそれを認識させない事と、機体自体がそう簡単に傷つかないからそれ故の安心感が重なる為なのだろう。

私はさらに、解放された機関砲を空いた手に装備し——ふくらはぎから残された推進剤を全て燃焼。噴射口から吹き出る白い爆炎が機体を超加速させ、私に強い重力を負荷する。敵機の搭乗者の笑い声は途端に失せて、瞬間、対応し切れぬ相手はそのまま私の横を通り過ぎた。

同時に振り向き、機関砲をその背に向ける——瞬間。

「っがあ！」

地面に限り無く近い宙で低空する私の横腹に、刹那的に肉薄した黒い影が一閃。およそ想像に難くない、巨岩を錐状にくり貫いて装備しているような対なる腕から放たれるその豪力は、一瞬にして機体を碎き――凄まじい衝撃の中、視界を赤く染まりあがらせる。モニターは赤く明滅し、割れんばかりの警報を掻き鳴らした後、無責任に、恐ろしく唐突に機能を停止し、沈黙。強い衝撃によって後頭部を打ち付けた私は朦朧とする意識の中、光の失われた狭く息苦しい空間の中、外側から装甲の粉碎音と衝撃を覚えながら、同時に恐怖に意識を奪われた。

「未確認物体に注意を促せないなんて、まだまだ三流だな」
アンノウン

「って言うかね、そもそもの任務はその未確認物体の殲滅なのよ。いくらプレイヤーキラーでできるからって……」

それから程なくして、私達は箱型のシミュレーション機の外に出て並ぶ客と交代。近くの自販機で一息つきながら、先の戦闘について議論を交わしていた。

――ここは学園の最寄り駅に程近い巨大ゲームセンター。最近出来たばかりのここには、最新鋭の筐体きょうたいが並び、さらには一般的なゲーセンでは考えられないような大きさのプライズコーナーが存在していた。五階建てのこの店は階層ごとにジャンル別のゲームコーナーを分けていて、私達はその三階部分『体感型シミュレーションゲーム』コーナーに居た。

先ほどのゲームは、まるで本当にロボットに乗っているかと錯覚が出来るほど精巧な造りをしていた。モニターは全方位に広がり、二対の操縦幹と二つのペダル、その他操作パネルどのシミュレーション機でも共通しているが、選ぶ機体ごとに癖が異なり、まるで別物のようなだった。

さらに数多の既存作品がこのゲームに参戦しており、一プレイ千円と庶民には手が出しにくい値段となっておりながら、コアな人気を持って繁盛しているらしい。それは私としても好ましいことであ

る。

その上プレイ画面がプレイヤーのみならず、付近の壁一面を使う大画面に投影されているという事もあって野次馬も多く、数億円の開発費がかかるその筐体も全国各所に配備され、ネットワークを介した、いわゆる遠くのお友達とも対戦できる、という仕様があった。最も、データサーバに蓄積された戦闘記録から作り出されたゴーストとの対戦なのだが。

プレイヤーも傍観者も飽きぬゆえに、並ぶ客こそそう多くは無いが、決して筐体に空きが出る、なんてことはないし、これからも当分なさそうでもあった。

「このカードが、メモリーカードみたいなモノなんだっけ？」

「ああ、うんそう。このカードに対戦結果が記録されて、搭乗者の成績が刻まれるわけですよ。それである程度のポイントを得るか、シナリオで一定距離進めば階級が上がるんですよ、先生。ちなみにミズキはさっきので、訓練兵から少尉に任官したんですけどね！」

奇妙なハイテンションで語る流石琴巳に気圧されながらも、私はなるほどと理解する。異このゲームにおいては彼女のほうが専任であり詳しい事もあり、分からないことは彼女に聞くのが一番なのだ。私は手の中で弄ぶ、手のひら大の、キャッシュカードのようなソレを再び眺めた。表にはこのゲームのロゴが大きく描かれており、裏側にはバーコードと、リアルナンバー。それと公式ホームページのアドレスと、私が決めたニックネームが刻まれている。これを作るのにも五百円もかかるのだから大したモノだ。

しかし――。

「てか、私の機体はヘベレセブンのであまりにも有名だけど、ミズキが乗ってたのは何？ 他に並ぶ機体の性能と比べると、空を飛ぶって訳でもないし、速いけど特化してるって訳でもなかったし。確かに格好よかったし強かったけど、なんの作品？」

「え？ ああ、あれはPCのアドベンチャーゲームに出てくる奴。ちなみにさっきの未確認物体も、ソレに出てくる敵だよ。確かにレ

ーザー兵器も無いけど、他のロボット作品には勝るとも劣らないと思うけど……」

実際作中では、先程の、一撃で機体に致命的な損傷を与える攻撃を与えるものや、無数の触手を突き刺し先端から強酸の液体を噴出するものなど無数の化けモノが何万と出現し、それを単機で掃討する描写があった。さすがにそれをきっちり再現すればゲームバランスが崩壊するだろうが、少なくとも弱いと判断するような機体ではないだろう。

いつもながら耳に心地よい、声を大きく発さなければ相手に言葉が届かないBGMが鳴り響く中、もう一度プレイしてから帰ろうか、なんて会話をしているその最中。

「君が『ミチオ』さんで相違ないかね？」

「へあっ!？」

見知らぬ声が、不快なその手が、肩に触れる。反射的に間拔けな声を上げて振り返り、先ほどの機体操縦さながらの後退をして距離を取ると、相手は呆気に取られたような顔で触れた手をそのままに立ち尽くす。それから何が可笑しいのかカラカラと笑い、目の端に涙を浮かべた。屈託の無いその笑いだったが、なにやら話を掛けられた直後という流れだけに不信感を抱かずには居られない。

”彼女”は――凛々しい眉が印象的な、長い黄色のハチマキを巻いて、九〇年代アニメのアツイ主人公のような格好して現れた。ズボンはジーンズ、カッターシャツはズボンから出して胸元は大胆に開けるゆえに見える胸の谷間に、視覚情報は混乱する。これがジャミングか、なんて呟いていると、彼女は腰に手をやり、口を、会話の契機を果敢に切り開く。

「失礼ながら拝見させて頂いたよ……そちらの大尉殿との戦闘。君はまだ今回で五度目の実戦だと言うに、あの身のこなし――あの機体であるそこまでの機動を取れるなんて、まるで主人公の如しだ」

気がつくと彼女の傍らに居た、小太りの――と表現すればたぶん多くの人間が肥満体型が痩せ型、痩せ型がガリガリになってしまう

ような体躯の男が腕を組んで頷いた。約二メートルの距離で酸っぱいような臭いが鼻をつくのは、彼が発汗しているためだろうか。

「あ、ありがとうございます……」

しかし唐突ではあるものの、誉められて嬉しいのは確かだ。だから素直に、後頭部を掻きながら礼を述べると、彼女は言葉が続ける。「次はあたしと対戦して頂けないかな」

——という事で、十数分の待機の後、再び私は筐体の中に入り込んでお札を投入。カードを差込み、登録された機体と、新たに追加された武装、それと獲得されたポイントからなる装甲の購入やカスタマイズ、強化など一連の作業を適当にこなしてみせる。琴巳も準備を終えたようで、やがて画面は黒く染まり……。

「うおおっ、なんで貴方までこちらに!？」

——カードにはそれぞれ、他の搭乗者を相手のモニターに映すために画像を保存している。特に指定が無い限りは作品内で機体に搭乗するキャラクターの顔写真になるのだが、プレイヤーの顔を撮ってその代わりにすることも出来る。そして私のモニター前面には晴れ渡る空の下に広がる森の景色と——その手前に、先ほどの肥満体型の男の顔が映し出されていた。無論それだけではなく、琴巳が扱う機体の搭乗者^{キャラクター}の顔もあるのだが、なによりも目を引くのは、その圧倒的なアップ画面なのだ。

顔が近い。一番最初に思ったのはそれだった。

初期装備の機関砲から近接戦闘長刀を持ち直そうとした際、反射的に口について出る言葉は、それ故に、男の反感を買う。その眉が歪み、口が開く。どうやら動画らしいそれは——画像を反映しているのではなく、カメラに映っているのをリアルタイムでデータ共有しているからだった。

「彼女相手に僅か戦闘数二〇回、五回の君たちだけで勝てるんでも?」

聞いただけでも腕が反射的に操縦桿を捻りそうになるその声は、

その見てくれに反して格好よかった。冷静で、だがその奥底に熱を孕む声音は妙な説得力を持っていて、私はだから、返答できなかった。

そしてモニターに映る彼の顔を選んでプロフィールを表示させると――階級は少佐。

今日始めたばかりとは言え、私は一日この場所に張り付いていたのだ。朝、開店してから一戦も見逃しては居なかった。私と対戦した者も、野次馬として観戦した戦闘も。今まででゆうに五十を超えるその中で、私は大尉を超える階級を見たことは無かった。

なぜか。それは、大尉までは容易にたどり着ける場所だからである。順調に、ある程度シナリオを進めるか、対戦を重ねるかすれば自然にそこまでは上がる。だがそれ以上は難しい、とされている。私自身からないが、何か特殊な条件があるらしいのだ。

――さらに、大尉といってもその実力は様々なモノがある。

「リアルマネーで課金すれば、ゴリ押しで君たちに勝てるぐらいの武器は買えるが」

「そんな、武器に頼ってるようじゃ勝てません。単純にシナリオを進めるだけじゃ芸がない」

「ああ、そんな雑魚は放っておこうと思っていたが、そう、君だ。初めての戦闘、そして次の戦闘で手も足も出ずに機体の自爆にまで追いやられた君は、シナリオで一度戦闘を経験するだけで任官し、初期装備以上の武器を与えられると聞いてもめげなかった。そしてそれ以降、三度目でコツを掴み、四度目で自分の中のイメージを試し、五度目で圧倒的なセンスを見せた。圧倒的だ、と僕は思ったのね。そして今、まだ初期装備を酷使している」

「一二〇mm滑空砲は初期装備にしては十分すぎる攻撃力だし、三六mm機関砲は使い勝手がいい。長刀は損耗率が激しいが、その代わりの短刀が長く使える」

「ああ、機体それはいいものだ――そして、彼女の期待は僕以上とだけ伝えておこう」

男のその言葉を最後に、接敵の警戒音が鳴り響く。直後に脇を締めて狙撃する白い機体は、琴巳が乗り換えたものだった。

赤い閃光が紫色の影に肉薄するが、敵機は深くもぐりこむように体勢を屈めていても簡単、という風に頭上でやり過ごす。

私は高鳴る鼓動を全身で感じながら、大地を蹴り飛ばして右方向に加速した。同時に琴巳は左側に飛び去り、男だけがその場に待機する。

しかし、一定の距離を進むと敵機は男を正面にして低空する。マントをなびかせ、両の肩は大きく水平に伸びると、途中で空へと曲がる。胴は一度きゅっと締めあがってから足を生やしていた。

黒を基調とするその機体は、先ほどの琴巳とは別の禍々しさがある。何か圧倒的な余裕を持っているようで、さらに武器を一つも持たぬことが気になった。

「琴巳、止まろう」

ひと言の指示で、私と彼女は、敵機の両斜め後ろで停止する。これで三角の陣形が出来上がったわけだ。が――。

メインモニターに彼女の顔が映し出される。その顔は限り無く無表情に近かったが、やがて口角が上がり――笑う。

それにつられる様に三人は咆哮^{さけ}び、戦闘が始まった。

「敵機は防御障壁^{せいごしょうへき}を張る。戻って来い君達、飽和攻撃を開始する！」

男は命令を下しながら機体の腰を落とし、機関砲で射撃する。同時に敵機の前面に赤みの掛かる半透明パネルが無数に出現し、弾丸の一つ一つをそれぞれで防いだ。一つのパネルは弾丸の一撃で破壊されるのだが、射撃よりも早く精製されるそのシールドはそれ故に弾丸を漏らさず、機体損傷を起こすことは無かった。

微速前進。敵は徹甲弾の雨あられに押されながらも徐々に距離を狭める――というわけではなく、余裕を持ってジリジリと、相手に焦燥と恐怖だけを抱かせるかのような緩慢さで機体を動かしていた。故に防衛以外の行動は前進以外とって居らず……だがそれ故に、私

は理解する。

敵機はシールドを張る。それはいくらなんでもこの射撃を全身に浴びてタダでは済まないからなのだろう。そしてシールド精製速度は恐らく〇、一秒ごとに一枚。そうでなければ男による連射で機体は蜂の巣になっている。

「こちら指定位置に移動完了。全弾解放^{フルバースト}にて飽和攻撃を開始する」

やがて私と琴巳は扇状に戦場を展開し、攻撃を開始。琴巳はレーザー兵器による精密射撃を試みた——その瞬間。あろう事かそのパネルは突如シールドの役割を放棄するように倒れ、そして地面と水平になるように体勢を崩すと、そのまま直進——僅か数瞬、一度の瞬きも許さぬその刹那に肉薄したパネルはいとも簡単に、男の右腕、機関砲を支えるソレを切断してみせた。

直後、男はその切断の瞬間に後退の機動をとって高速度でその場を離れる。後続のパネルは予測できた筈のその行動についていけないのか、単純にホーミング性能がないのか、無数のそれらは勢いよく大地に叩きつけられ凄まじい衝撃を巻き起こす。

だがそのお陰で弾丸は敵機に命中する、と思われたが……。

「なっ、どーゆー事……ッ!？」

琴巳が舌打ち愚痴を漏らす。それもそうだ。展開した全てのシールドを解放して攻撃に回したと思ったら、すぐさま新たなパネルが出現し、同時に弾丸から身を守っているのだ。

いくらなんでも速すぎる。攻防一体型の武装なら色々存在^あるが、これほどまでの性能はさすがに初めてだ。そして多分、このままを続け^もればそう長くは保たない。

そもそも、私の知る限りこんな機体は見たことも無いのだ。

——オリジナルか？ 男の言葉から察するに、彼女は我々より遙か数段実力が上なのだ。未知の仕様を理解し手に入れていても然程おかしくは無い。

「『ミチオ』は散弾銃に切り替えろ。『大尉殿』はその間援護だ！」
男は遙か後方から即座に飛びあがり接敵する中で冷静に命令を下

す。だが私は彼の命令よりも先に散弾銃に切り替えていたために、言われると同時にその場から飛び出した。

跳躍ユニットから噴射炎の尾を引かせて私は匍匐飛行に移行する。同時に私から注意を引くように、レーザーを拡散に切り替える琴已は敵機の正面に移動。その頃男の機体は弧を描いて接敵した。

「『タミヤ』、フォックスス三^{スリー}！」

その中でタミヤと名乗る男の機体の背から、無数のミサイルが煙を吐き出し迫る。彼女は面倒そうに溜息を吐くと、マントの下に潜む翼型の跳躍ユニットを起動。僅かに腰を落としたかと思うとすぐさま強く地面を蹴り飛ばし、さらに翼からマントを燃やし尽くす炎を吐き出して垂直跳躍の機動を取る。

私はそれを追うように大地を蹴って軌道修正し、同じく空へと飛び上がる。その間彼女は手首の下に装備されている銃口からバルカン砲のように弾丸を吐き出し、自動修正して追尾するミサイルへと迎撃。

そのまま地面と水平に加速したかと思うと、すぐさま降下し、息を吐く暇もなく残るミサイルの尻へと回り込む。一度の迎撃の爆発はそのほかのミサイルの自爆を誘導したが、それでもまだ一、二発は残っており――その全てを消し飛ばした彼女は、なんでもないように、密かに肉薄する私へと振り返る。

「君には特攻隊の資質がある！」

「フォックスス四^{フォー}！」

無線で声が機内^{こくら}に届く。が私は構わず武器を接近戦闘用の長刀に持ち替えて加速。噴出炎が白く染まり、私の機体は瞬く間に敵機へ迫る。その間片手は塞がり、散弾銃をしまって長刀を取り出そうとタイムロスが起きていた。

風を斬る音もその圧力も搭乗席にいる私には感じられない。四点ベルトを締める私の身体は席に完全に固定されている。だが両手に握る操縦桿は、引けば機体の腕を引かせ、捻れば手首を捻る。足元のペダルはそれに応じて加速して――だが武装変更や直立姿勢など

は全て自律制御である。しかし、物にぶつかればしつかりとした衝撃が機体を揺らすし、銃を撃てば反動がこの身を揺らす。

だから――。

「ッ！　な……にをオ、やっている！　真面目に……」

「戦ってますよ、真面目にイ！」

肩からタックルをブチかますと、展開されていた赤いパネルは瞬く間に碎けて割れたガラスのように宙に舞って空気の中に溶けて消える。さらに私の機体は強化装甲だけを傷つけ、敵機の左腕にめり込んでいた。

同時に私はようやく引き抜いた長刀を構え、振り上げようとする。だがソレよりも早く空いた右腕はそのまま私が搭乗するコクピット部分に当てられ――腕内に装備されているバルカン砲が弾丸を装填しなおしている音が静かに聞こえた。

だから私は振り払うように右腕を振るうと、彼女はこれ幸いとばかりに後退。だが再び噴出ユニットを駆使して添い寄るように私は交代の速度と同じ速さで彼女を追った――が。

一度深く降下する。私はそれに付いていこうと同様に速度を落として下がると、瞬間。

接敵の表示が画面に映る。私は応じて回避の行動を入力しようとするが、ソレよりも早くこの背に強い打撃を受けたような衝撃が襲い、機体は地面に叩きつけられる。

「うあッ……！」

「この左腕は、タミヤのお返しということか？」

丸まった前頭部に、対なる角のような後頭部のアンテナ。その頭部を掴んで地面に押し付け、さらにそのまま摩り下ろすように引きずられるのは私だった。

身動きが取れない。握っているであろう長刀は、引きずられる磨耗の中で柄から上がへし折れて存在していなかった。

「畜生ッ！　なんで、なんで障壁が途絶えない！」

琴已の狼狽が響く。恐らく今まで、そしてこれからずっと後方

支援に徹しているのだろうが、射撃によるパネル撃破が追いつかず、故に支援の結果が出ずにイラついているのだろう。

だが仮にこのシールドが無くとも、常識を逸する機動性がある。だから全ての弾丸も避けるだろうし、白兵戦では勝ち目も薄い。恐らく機体性能でも、技術面でも。

「ミチオ、そのままあと五秒待て」

タミヤの声が耳に届く。モニターには顔が映らないのは、恐らく秘匿として回線を延ばして通信しているからなのだろう。

だが――待ってるばかりで、やられっぱなしで平然と助けを待てるか？　いくら実戦経験が乏しいからと言っても、それを言い訳にしたくは無い。ここまで攻めてきて、強いんじゃないかと認められ始めたところでボロ負けして、そんなところで初心者としての立場を利用したくは無いのだ。

状況に応じて立場を入れ替えるなんてことはしたくは無い。自分が強者を気取ったのなら、それを貫かねばならない。幾ら厳しく悲しく辛くとも、それを耐え忍び前進するのが、この杉林瑞希なのだ。

だから――故に。

「いいや、五秒後に叩き込むだけでいい。私はアシストに徹する！」
手の中で柄を逆手に持ち換えて、すかさず後頭部を掴む手首にそれを突き刺し、切り抜く。敵機はバランスを崩すと思われたが――思った通りに徐行し、やがて停止する。私は地面に押し付けるだけの形になったが、直後、

「フォックスス三^{スリー}！」

超音速で肉薄するミサイルの爆発音と、警戒音とが重なり――。凄まじい衝撃が私の機体を地面に埋める。激しい硝煙が辺りを包み、視界の鮮明さを完全なゼロに変えていた。

機体損傷――は五〇パーセント。主に強化装甲と、後は跳躍ユニットがイカれてしまっているらしい。推進剤も漏れて焼かれ底をつく。

私は装甲の排除と同時^{パージ}に、ただ頭の中に浮かんだ言葉を何も考えずに口にする。

「やった、のか……？」

しかしマップには目の前に赤いマーカーが。

……目の、前に……？

はっと我に帰ったときには既に、煙を裂いて肉薄する敵機が私へと手を伸ばしていて――即座に後退。すぐさま武器を持ち替えようと焦りに任せてモニターを睨んでいると、突如赤い何かが目の前まで迫ってきて……。

首が飛ぶ。

途端にモニターは黒く染まり、モニターにはゲームオーバーの文字が映し出されていた。

激しく高鳴る鼓動を押さえつけながら、私は既に十回目となる深呼吸を最後に筐体を後にした。

その後の展開は息を呑むもので、解放された赤いパネルが一瞬に残る二機を残骸へと変えていた。覚悟をする暇も、悲鳴を上げる隙も無い。彼女が本気を出せばこの通りなのだ。

だが機体を破壊するには幾枚かのパネルを使用しなければならぬ。なにせ、機関砲の一撃で破壊される脆弱さを持っているのだ。持ち前の精製速度と使用の柔軟性が高いだけで、そこを突いてどうにか作戦を立てればまだ勝ち目はあったのだろうか……。

しかしそれを今考えても仕方が無いことだ。

その場での思考の柔軟性や思惟速度が足りなかった。また順応性に掛けていたことも敗因だろう。

額から流れる汗を拭い、多分汗の臭いが充満してしまっているだろう筐体を心配していると、やがて他の連中も私の元へとやってきた。場所は再び、自販機の前である。

薄暗い空間内は、自販機の前だからか明るく照らされ、その前にある丸いテーブルに肘を付きながら、お疲れ、と声を掛けた。

「いや、随分と目を付けてくれるので自分が優秀だと勘違いしちゃいました。あはは」

私が軽く笑いながらそう告げると、彼女は横目で私を捉えながら、自販機に向かって返答する。

「それでいい。実際あたしは君を潰すつもりで行ったんだけど、まさかあそこまでガッツがあるとは思わなかった……私は特攻タイプだから、次はタミヤに、今度は『クリア』が揉んで貰えばいい」

ガコンと音が鳴り彼女が屈む。それを見ながらタミヤは腕を組み鼻を鳴らす。それを嫌悪感を限界まで覚えた琴巳は、私の影に隠れるように彼を覗き身を守った。

「いや、ご遠慮させて頂きたい……」

タンクトップにホットパンツという格好の彼女は、汗で衣服を肌に引っ付けるために色っぽく見えた。だからか、タミヤの視線も著しく嫌らしいものに見えてしまう。

「君たちはまだ弱い。また、縁があれば会えることもあるだろうが——ここで失礼させてもらおう。さらばだ、君たち」

彼女はそのひと言を最後にその場を後にする。携帯電話を取り出していたタミヤは恐らく私達と連絡先を交換しようとしていたのだろうが、彼女に首根っこを掴まれ引っ張られて、やがて姿を消した。そういえば名前を聞いていなかったな、なんて考えても見たが――。

「なんか、また会いそうな気がする」

そんな嫌な予感が背筋を掠めた。

「肯定だ」

それから少し間を置いて、私達もゲームセンターを後にした。その空間がいつもとは少しばかり違うどよめきに包まれていたが、疲労のせいかな、あまり構っている余裕は無かった。

外に出ると、冷房の効いた店内とは一転、生温い大気が私達を歓迎する。私達は自宅の方向の違いからその場で解散して、一息を吐き、帰路へと向かう。その中で、ふと無意識に操縦桿を捻ろうと

する自分に気付いて苦笑した。

——この感覚が失せるのは、また当分先になりそうである。

すっかり夕日に染まる中、私自身も影となりながら、雑踏へと溶け込んでいった。

お盆

「はぁゝあ」

日差しがジリジリと照りつける午後二時過ぎ。私は手に花束と買
い物袋を提げて道を往く。

一陣の風が吹く。私は翻るスカートを押さえて下着の露出を阻止
すると、そのポケットの中で震える異物に気付いた。外側から手を
添えると、どうやら携帯電話が振動しているらしい。花を持ち替え、
なだらかな坂道を気だるく歩きながら携帯を取り出し液晶画面を覗
くと、そこにはリンコからの着信を知らせる文字が表示されていた。

私は携帯電話を開くか否か少しばかり躊躇い、短い嘆息の後、開
いて耳に当てる。親指で通話ボタンをプッシュしてから一拍置いて
口を開いた。

「もしもし」

中央線も引けないくらい狭い道路。左右には雑木林が広がり、お
世辞にも都会的とは口に出来ないほど自然が多い。車は路肩に駐車
されるのが度々眼に入るが、だからといって人が多いというわけ
もない。

セミの鳴き声がやかましいのが、一番の印象だった。

『今何してるの？ あ、もしかして忙しかった？』

「別に……話相手だけで良いなら付き合うけど？」

たまに親子連れが、緩慢な動きでノロノロと頂上を目指す私を追
い抜く。楽しい声や耳に届くが、父、母、子、それぞれが皆フ
ォーマルな格好に落ち着いているのを見て、やはり彼らも私と同じ目
的なのだと理解する。最もこの時期にこの坂を上るという行動を見
れば、その目的は大体分かったようなものなのだが。

この先には大きな寺がある。イッツテンポー、と言えば分かりや
すいだろう。それに付随するのは、その寺の何倍もある敷地内に広
がる墓地。

つまり目的とは墓参りだ。

『あ、本当？ んじゃ付き合ってもらおうかしらねえ』

「はは、その喋り方おばさん臭いよ」

『うっ……き、気を付けるわね』

額から流れ落ちる汗を拭い、一息をつく。私が立ち止まる所でようやく上り坂は終わりを告げたのだ。

目の前には十段前後の階段。その上には、恐らくどの世界においてもここだけは、こういった場所だけは完全なる秩序が保たれるであろう空間——墓地が広がっていた。

一様に並ぶ縦長の六面体。だがその石材には様々な種類が有り、多くは御影石なのだが、個人として広く土地を有するところの墓碑はなにやら妙につるつるとした表面が目立った。それが同じ御影石なのか、それとは別の石材なのか違いが分からなかったが、ともかく綺麗に掃除が行き届いているのだけは理解できた。

階段を上りトコトコと脇道を歩いて少しばかり、私はやがて目的の墓石の前に到着する。杉林、という名を見つけたお陰もあるのだが、それは飽くまで再確認に過ぎない。去年は特に幾度も訪れた場所だから、自然に身体が覚えてしまっているのだ。

「——だったら、好きな方にすればいいんじゃないかな？」

台に乗る墓碑には小難しい漢字が刻まれ、その手前には線香台がある。両脇には以前訪れた際に生けた花が枯れていた。まるで待ちくたびれたといわれたような気がして、心の中で陳謝する。

『ああ、やっぱりこれだっと思ってたのがいいかなあ。私も直感が大事だと思ってたんだけどね』

一先ず寺から桶と柄杓ひしゃくを借りてこよう。後は花を生け、線香とお供え物を置いて報告だ。

——そう意気込んだところで、眼に入る。墓石の頭部に、黒く焦げたような灰と、半ばまで焼けて捨ててある煙草がそこにあったのだ。

……確かに、今日はこれまでこれなかった分をきっちり綺麗に掃

除してやろうと楽しみにしていた。お盆を利用しなければ来れない状況になりつつあるからだ。だから、一年に二度の、その年が明けて初めて来る一度目の墓参りはそれ故にその気持ちは強くなる。

雨によって汚れてしまっているだろう、鳥のフンやその他動物からの原因があつて汚れてしまっているのは仕方が無い。自然の為す事だ。自然の残骸だ。が、こいつは——この煙草は明かに人が意図的にここへ捨てた物。そうに違いない。

そして先ほどの、私のスカートをめくる風さんの悪戯からは時間はあまり経っていない。一〇分以下と考えてまず間違いは無いだろう。

だがそんな悶々とした怒りを蓄えても、こんな場所では意味が無い。ここに煙草を捨てた人間が私に気付いて額が擦り切れるほど土下座してくれるというわけでもない。だったら意味が無い。私が健気に掃除するしかないのだ。

私は大きく溜息をついて、リンコと問いかけに返答しながら、すぐ近くの寺から貸し出し自由の桶と柄杓と、それから水を汲んで来ることにしたのである。

吸殻が増えていた。数は二つで、火種を消した後も二つ。

戻ってきて目撃し、思わず、というか至極冷静に落として害のない花束と買い物袋を地面に落とし、それから水がたっぷり汲まれた桶を地面に置いてから、歯を噛み締める。ちなみにリンコとの通話は桶を入手した時点で終わらせている。

胸が高鳴り、呼吸が苦しくなる。恐らく過度な興奮からくるストレスが原因だろう。

しかし——墓地で、こんな事を見ず知らずの輩にされて黙ってられるか？ この私が、熱々に熱された墓石を水で冷やしながら汚れを落として、綺麗になったから結果的には良かったねと笑ってこれまでを報告できるのか……？

「出来っかよ……ッ！ そんなことッ！」

この吸殻の主をどうしようかと考えているのに、ある一つの思念がまるで決定事項のように頭の中をくるくると回る。私は気がつく
と、周囲の人間を睨むように標的を探していた――が。

――いや、こんなところで問題を起こすわけには行かない。

そういった冷静な面が私の心に冷却水をぶっかけた。肉が熱した鉄板に押し付けられたような音を響かせ、激しくなりつつあったピストン運動は徐々にゆっくり、やがて緩慢になって冷えて落ち着く。最後に大きな深呼吸をして、私は柄杓を手にとった。

墓地に於いては全てを許そう。そう、菩薩のように。

私は彼女の墓の前で手を合わせ、掃除を始めた。

「よしっ、これで随分、ってかもう完璧に綺麗になったね」

袋から彼女の好物だった揚げ饅頭をを供え、線香に火を付ける。これでようやくこれまでの報告が出来るわけだ。

まずは私の制服姿を彼女に見せびらかしておこうと、ヒラヒラとスカートを風に揺らしながら一回転。彼女が生きていたらさぞかし羨ましがったことだろう。なにせこれは彼女が生前着たいと夢に見ていた制服だからだ。

――多分、こんな姿は瑞希は認めてくれないだろう。”私の分まで生きて”といわれたのに、その”私の分”しか生きていないのだから。仮に貴方が生きていたら責めて貶してどうしようもないくらい落ち込ませてくれただろう。いや、今現在でもたまにどうしようもないくらいどうしようもない気持ちに渦巻くのだから、死して尚強し、といったところかな。

だけど、この三年間は何があっても生きてもらう。誰でも無い瑞希に。幸い容姿は似ているし、仕草は覚えている限り真似してる。口調はまだ慣れが必要だけれど、大分サマになってきていると思う。それで、あと少しすれば生徒会選挙があるから、私はそれに立候補しようと思っているの。そうすれば、この”杉林瑞希”の名前が確実に刻まれるから。誰よりも高い場所で、誰よりも目立つ其処で。

高校生になってナンパもされたし、友達も大勢できた。部活動もなんとなしに活発になり始めてるし、なにはともあれ学園生活は充実しているから心配はしないで欲しい。

……改まった口調は多分嫌いだろうけど、たまの報告くらいはしつかりとしなくちゃ、ね。

運動に勉強に、なんでも出来た貴方と過ごした長い年月は、いつになっても色あせることはありません。そんな全てに秀でた貴方に張り合おうとした私自身に、微笑ましさを覚えます。

幼きあの日、泥だらけになって遊んだ日々。成長して、身長体重だけが勝る私に頬を膨らませて、だけれどどこか誇らしげに笑ってくれた貴方は私の胸に生きています。

一年以上も経過^たつたのに、いつまでも貴方の事をこうして引きずって、そしてこれから三年間も貴方に安眠を許せないのは、本当に申し訳が無いと思っています。なにせ、この世にいないのに世間では貴方の存在が生き続けているんです。自分でない自分が、分身とも言える弟が外でどんな粗相をしてしまうか心配でしょう。

でも、安心してください。私が汚れるときは、私が私として存在している時だけです。決して、何があってもこの名には埃一つ被せません。

日常^{いつも}の事は仏壇で話しているから改めて話すことはもう無いだろうけど――最後に。

勝手に下着を使ってごめんなさい。

「――つとまあ、こんなモノかな」

一通り報告も思い出話も終わって、最後の最後に気がかりで、いくら信頼親愛する彼女でも決して許してはくれないであろう事を謝罪逃げして……少しばかり心残りだが、もう墓参りも終わりだろう。花は生けた。お供え物も好物を狙って供えたし、線香だって高いヤツを選んだんだ。周りは綺麗に掃除した。よし、完璧だ。

「それじゃ瑞希、また来るね」

次来るのは命日だ。アレは十一月中旬……忘れもしない、あの出

来事があった日だ。が、今は思い出したくは無い。思い出すべきではないのだ。だから回想は止めておこう。アレはもう解決した。全ては丸く――は無いが、収まったのだ。こんな、歪んだ結果を導いてしまったが……。

ゴミが詰め込まれる袋を手にして、柄杓を突っ込んだ桶を拾い上げて寺へ向かう。周囲には依然として人は居らず、墓地故の静けさが風となって優しく頬を撫でた。

抜けるような青空の下は酷く平和だ。最も、この日本の、一高校生としての私の身の回りが平和でない事がまずありえないことなのだ。

人一人とすれ違うのがやっとな道を抜けると、そこから少しして寺の側面に到着する。その足元には幾つかの、柄杓と桶とがワンセットになった物が並び、その近くに水道が立つ。私はその並びに添えるように戻して一つ息をついた。

ここから帰るには、またバスに揺られて三〇分、そして電車で揺られて一時間。歩いて十分ちよつとの道を往かなければならない。しかしまあそれでも季節が夏なのもあって、どう間違っても日暮れ前には家に着くだろう。

「あ、仁科さん……？」
にしな

私が呟くのは、視線の先――境内に、竹箒を両手に握って丁寧に掃除をしている、画になるような美貌を持つ見慣れた巫女さんがそこに居たからである。

そんな彼女はこちらを向いて、顔を伏せがちにして下を向いて箒を捌く。が、私のそんな呟きのような言葉に反応したのか、それとも視界内で動く異物を発見したから何気なしに視線を向けたのか、彼女は此方を向く。それから暫し、凝視するように私を見て首を傾げて――。

「み、み……ちゃ、ん……っ!？」

目を見開いて、開いた口を両手で押さえるような所作と共に、押し殺すように紡がれた言葉が私に届く。それはまるで驚いたような、

否、確かにその顔は驚愕を表して私に釘付けになっていた。

——彼女とは、いくらか面識がある。母方の家が葬儀を執り行う際はこの寺の坊主にソレを依頼しているのだ。そして坊主はその手伝いとして彼女を連れて来る。私と瑞希は葬儀の為にこっちへ来ると大抵彼女と会うこともあって、歳も離れていても五、六程度だったからお姉さんとして世話をされたものだ。

その為に瑞希の葬儀の時も彼女はその手伝いに駆り出されて……。彼女はどうか、亡霊が出たものと勘違いしてしまったのだろう。今では腰を抜かして地面にへたりこみ、あうあうと口元を震わせ足元の竹箒を必死になって手探りで探していた。

「な、なむだいじだいひきゅうぐー」

見るに堪えなくなつて姿を消そうとも考えたが、しかし妙な亡霊を見たと自宅に電話を掛けられても困るから事情を話そうと決意する。それから有りもしない手袋を剥ごうと必死になって右手の甲を搔く彼女へと近づき、出来る限り穏やかな声を出そうと善処した。

「あ、あの仁科さん……こんな格好^{ナリ}してますが、弟です。瑞希じゃなくて——」

「え？ え？ あ、ええっ？ あの……みっちゃん？」

「そうそうみっちゃん。というかもういい加減にみっちゃんってやめてくれない？」

しかし良く覚えていたものだなぁと感心するが、彼女とは意外に長い付き合いの去年会ったばかりだから然程懐かしくも久しぶりでもないことを思い出した。瑞希よりお姉さんぶるのが好きな彼女は、私達は本当の姉のように慕ったものだ。

乱れた長い髪を整え、それから立ち上がって赤い袴を叩いて汚れを落とすと、緩慢な動作だが、ようやく私を見据えた。

首を傾げるようにして微笑むのは彼女の癖のようなものだ。だがそんな仁科を見ると不思議と瑞希が隣にいるような気がしてならない。別に悲しくなってくるのだとか、胸の奥からえも言われぬ勘定が湧き上がってくるという訳ではない。ただ単に、そう感じただ

けなのだ。

「まあ仁科さんの事だから事情は説明する必要は無いと思うけど……」

「あるよっ！ 大いにあるよ！ みっちゃんの事だから大体の想像はつくけどさ、こう、筋を通す？ ような感覚ニユアンスで話して！ それから仁科さんじゃなくて、ちゃんとお姉ちゃんを呼ぶ感じで！」

「にーちゃん？」

「お姉ちゃんだよ！」

「仁科おねえちゃん」

「もっとうこう……ユウちゃん、みたいな」

結ゆづこ迂子だからユウちゃんか。安直だが彼女らしい……というか、いい年齢としして五、六歳も離れた男に何を言わせようとしているんだ？ 「いや、百歩譲ってユウ姉ねえだ。よく漫画とかで親戚のお姉さんと呼ばれるのがこんな感じだし」

しかし今更呼び方を変えられるとは思わなかった。そもそも相手から自分の呼び方を変えろ、だなんて滅多に聞かないぞ。まあユウ姉だから仕方が無いかもしれないが。

だがまあ、よくこれで二十年以上も生きてこれたものだ。今は大
学に通っているらしいが、後一、二年すれば社会人か。流石に寺を
継ぐわけにもいかないだろうから、どうするつもりなのだろうか。
「――どうせみっちゃんの事だから、高校時代はみーちゃんは生き
ていたって言う傷跡を残そうと、みーちゃんに成りすましてるんだ
ろうケドさ」

「なんでわかるんだよっ!？」

大体の予想がつくと言っていたが、大体と言うかもう答えそのものが理解できている。おっとりとした口調で妙にほんわかとした雰
囲気をかもし出しているのにも関わらず、頭の回転だけは速い。こ
れで身体も素早く動ければ、先ほども尻餅をつかず臨機応変に対応
できていたのだろうが、天は二物を与えないということなのだろう。
しかし傷跡とはやたらに血生臭い表現だな。

「みっちゃんは賢そうに見えて単純おバカさんだからわかりやすいのよ」

「ユウ姉はバカそうに見えて賢いから侮れないな」

「バカって……円周率十三桁、みっちゃんは言えるかな？」

こういうところからそこはかかない馬鹿さ間抜けさを漏らしていることに気付いていないのだから、やはり本当に馬鹿なのかもしれない。いや、馬鹿というよりはなにかもっと違う……言うなれば、ドジの類似品なのだろう。

「でもまあ」

彼女はそう前において、空を眺める。視線は遠くに投げられて、何かを思い出すような口調で、溜息混じりに台詞を紡ぐ。

「人殺しのストーカーが捕まっただけ、まだマシだよな」

ストーカーされてる時点で相談してくればよかったのに。口を尖らせて不満を垂れる彼女に、思わず私は耳を疑い目をかっぴらいた。

”ストーカー”と彼女は確かにそういった。だが、瑞希はそもそもストーカー被害になど遭ってはいないはずだ。

姉弟で、しかも学生で仲睦まじい。そのお陰で一日の殆どを一緒に過ごしていた。二人きりで無いときも違う友人を間に入れるだけであり、違う時間を過ごすとしても部活動中以外には存在しない。

「でも背中から不意の一撃——なんて、どんな恨みが……。ご、ごめんね、みっちゃん？ また、私……」

彼女は恐らく一年以上も時が経過したのだから傷は癒えたと考えたのだろう。そしてそれは間違っではない。確かにあの頃に比べれば確実に彼女の死と向き合えるようになったのだ。だから墓参りにも来れるし——と言っても未だ彼女を装っている私が言っても説得力は無いだろうが。

彼女の言葉は明かにおかしい。

殺害現場は自宅付近、住宅街の中だ。そこで不意に襲われて、すれ違い様に腹部にナイフによる深い一撃突き刺さり多出血によって

死亡した。私はそれと直面したし、相手の男は慌てて逃げていった。だがその現場に行くわした私であるが、彼女に致命傷が与えられたときの、前後の記憶は無い。だから犯人が何故私を生かして逃げたのか、その理由は分からずじまいだった。

瑞希が死んだという事実さえも受け入れられなかった私はもちろんニュースは見なかったし、だれもその事について触れなかった。

だから、多分ユウ姉は違うニュースがごっちゃになって間違えているのだと考えた。そう、思い込もうとした。だが、彼女がこんなところでそんな不謹慎な間違いをするはずが無い。ましてや親しかった、妹としてみていた人間が殺されたのだから。

おかしい――何かが、決定的に間違っている。

彼女は腹部に一撃だけを受けたし、ストーカー被害にもあっていない。だがニュースには被害者の名前と顔が出るわけだから、いくらユウ姉でも間違えるはずも無いし、間違いようもないんだ。

ナイフは背に達していたかもしれない。だけど幾らなんでも、背か腹か、どこから刺されたかわからないなんて馬鹿げた事がありえるだろうか。

否、断じて否である。

腐っても警察だ。あっていいはずが無い。そんな事があるわけが無い。冗談じゃない。

何かが違う。どこが違うのかは分かる。だが何故違うのかが分からない。

なぜだ。どうしてだ。そんな言葉ばかりが渦巻いて、私は答えを導く力を失っていた。

いや、仮に背からというのがマスコミによる誤報だとしたらまだ分かる。だがストーカーという部分はどう足掻いても間違いようは無い。調べてみるか……？ 確かに、そうするしかないようだ。

もしかしたら――という事があるかもしれない。だがもしその”もしかしたら”があったら、私は一体どうすれば良いのだろうか。

「ね、ねえみっちゃん……？ ごめんって、だからもう怒らないで

よ」

「え？」

気がつく、ユウ姉が覗き込むようにして顔を窺っている。返答が無いのと無表情とが相まって怒っていると勘違いしたらしい。

しかし何も悪い事をしていないのに申し訳ない気持ちにしたのはなんだか可哀想な事をした。だが十五の子どもに二十の成人がそう思われるのは、大人としての威厳に関わってくるのではないかと思う。個人的には冷静な女性クールが好みだからそれが問題だと思うのだろうか。

「ああ、いや怒って無いよ。ごめん、ちょっと考え事してただけだ
って」

ちよつと以前まえなら、ちよつとご立腹の素振りをすれば目の端に涙を浮かべていたものだが、流石に今は困った顔だけに留まっている。お姉さん、という立ち位置は変えるつもりは無いのだろうが……どうにもこういっただけをされると年下に抱くような可愛らしさを覚えるのだから困ったものだ。

「そう？ それじゃ、気晴らしに夕飯食べていく？ みっちゃん来れば、お父さんも喜ぶし」

ユウ姉のお父さんか……。確かこの寺の坊主だったな。それに私を見るたびに薦めていたのは実の娘であるユウ姉自体だし、喜んでいたのは私がしっかり者に見えたからだろう。だが彼女はそれを理解していない。もしかしたらしているのかもしれないが……。

ご飯を勧められた途端に、お腹はグウと一つ自己主張してみせる。家を出たのが中途半端な時間だけに昼食はとっていないから、空腹を覚えるのは仕方が無いか。

どちらにせよ、現状報告も兼ねて彼女には相談したいこともあったのだ。恐らくここで夕食のススメを受ければユウ姉宅での宿泊は逃れられないだろうが――。

「ああ、じゃあお言葉に甘えようかな」

私の言葉に、彼女は笑顔で頷いた。

結局帰宅はこの日から二日後になるのだが、唯一の保護者である父はそれを心配した風も無く、なんで結迂子ちゃんと将来の約束をしてこなかったんだ、なんて逆に怒り出す始末だから理不尽極まらない。その後リンコからどこへ行っていたんだくなんて嫉妬の嵐を頭から被ることになるのだが――その時には既に、私は見てしまっていた。

どうしようもない絶望と、衝撃の事実と、ちょっとした危機に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0640p/>

架空人生

2011年10月5日07時24分発行